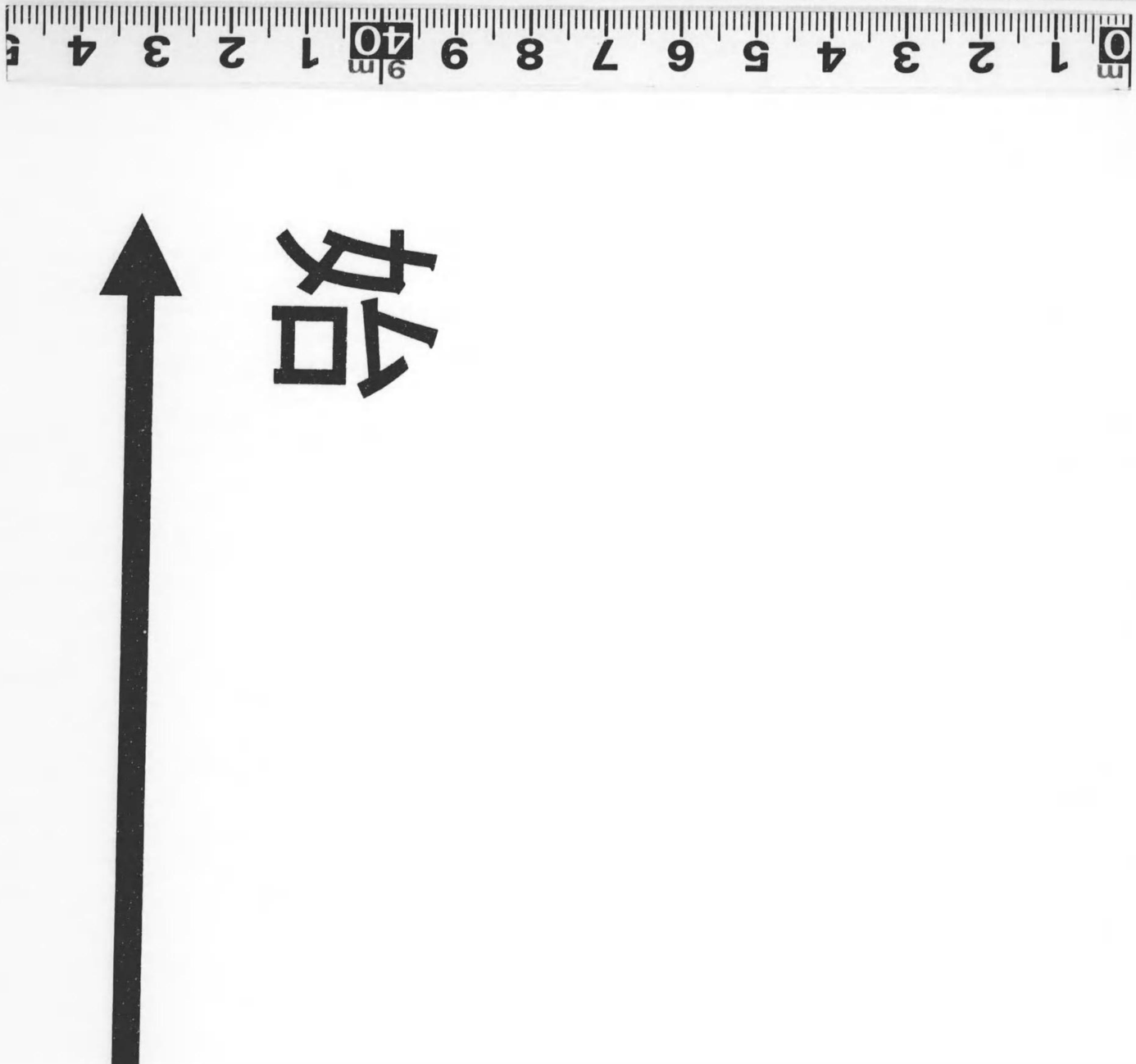
049
Y863
049-Y8637
1200500724553



049.
Y863

吉田悅蔡文集

内務省
19.9.29
版出通報

994
244

目次

緑……一
箱根に遊ぶ記……二
麻酔劑にかかる記……六
米と諸……九
日本はアメリカの先進國……一〇
日本と世界とを考へる……一二
外國崇拜の清算……一四
貝加爾湖畔より……一五
道連れ……一九
モスコーより……二二
セントペテルスブルグより……二五
紐育の二面……二八
聲……三二

宙返り飛行家ナイルス氏と語る……三五
安全第一と冒險第一……三七
地球上の生命と永遠の生命……四一
新年はお目出度う……四三
信仰の冒險……四五
不用意の用意……四七
天下……四八
近江のポーロ……五一
山田警部山田牧師山田老人を想ひて……六〇
青……六六
外套の話……七三
自分のものの迷ひ……七六
賀川豐彦兄と私の對話……八〇
滋賀縣高島郡にキリスト教の入りたる由來……八二
溫突……八六

母ごころ……八八
銀行家……九四
時の記念日……九六
衣食住……九八
佐佐木のおばあさま……九九
往生要錄……一〇三
昔話をする人……一〇三
宗教と金……一〇五
南無阿彌陀佛……一〇七
神に養はるるもの……一〇八
ある新婚の人達に與ふる言葉……一一六
宗教と言ふ文字……一一七
所謂基督教の破滅よりキリストの御出現を想ふ……一一八
失敗記……一一九
田家朝……一二一

本當の生活十ケ條……一三三
やつて見たいことの一つ……一三五
支那の乞食哲學……一三六
人生の目的……一三九
宗教について……一三〇
時間を超越して……一三三
十字架上の血……一三三
現代教會の行きつまりより新しき教會を想ふ……一四一
旅から旅へ――その一……一四三
新しき決意と希望……一四七
世界の中心を極めるまで……一四九
致良知……一五一
近況錄……一五三
旅から旅へ――その二……一五五
旅から旅へ――その三……一六三

危險な旅の感じ……一九〇
旅から旅へ――その四……一九三
日本を見直して感あり……二〇五
旅から旅へ――その五……二〇七
アメリカにて見たる基督教……二一五
金持の國と貧乏の國……二二二
旅から旅へ――その六……二二三
羊の年……二二五
日本國の位置……二二七
ある落つきかたに就いて……二二九
たばこと日本のキリスト教徒……二三一
アメリカの惱み……二三四
アメリカの藥店瞥見……二三五
三度北京宮殿を見て……二四九
湖畔の雨……二五三
……二五五

家庭に就いて……二五七
湖畔の空氣……二五八
日本と世界……二六〇
病氣と人生……二六七
近況　錄――その二……二七八
近江の百萬損者……二八〇
僞裝親日……二八二
ヴアン・ルーンは言つた……二八四
人の死ぬ時……二八五
天に寶を積むもの……二八七
そろばん……二八八
漫筆……二九〇
アメリカ物語……二九二
聖手に導かれて……三〇二
この頃の思ひ……三〇四

永遠の聞き手……三〇五
兄弟社の目的……三〇七
奉仕の喜び……三〇九
一粒の芥種……三一〇
新しき教會を懷ふ……三一二
「問」と「答」……三一四
生命をかけて……三一五
酒と煙草とクリスチヤン生活……三一六
「天父」と「神」……三二四
黄海を南行しつつ……三二五
斷想五題……三二八
大陸はまねく……三三〇
信仰の三階段……三三二
「一人の心」……三三四
漢字と日本的な考へ方……三三六

北京を想ふ……三三八
アメリカ大陸と支那大陸……三四〇
人を見る眼……三四三
北京の名園……三四四
基督といふ文字の整理……三四六
天津と上海の話……三四七
三官廟の話……三四九
ある足跡の話……三五三
故林邦彦兄……三五四
斬られた匪賊……三五六
アメリカを百萬分の一として見れば……三五八
興亞日本の姿……三六〇
世界大動亂時代に直面し衣食住と文化を考へる……三六一
物の間違ひ……三六三
黒人の神様……三六五

組合教會に新興潑剌なる體制を要求す……三六七
大陸傳道私見……三七〇
變り行く世界……三七四
言葉といふこと……三七五
新體制と日本のキリスト教團について……三七七
彌次郎と魯連須……三七八
二十七世紀の初頭に立ちて……三八一
學園だより……三八一
湖東草居雜記――その一……三八四
湖東草居雜記――その二……三八六
近江兄弟社の新圖書館の前途……三九一
山を登る……三九四
命を拾ふ……三九七
少女達に告ぐ……四〇一
病床漫筆――一より九まで……四〇四

回生漫筆――一より二まで……四四三

吉田悅藏文集

綠

綠！

綠は靜かな色である。綠蔭に友と語るは、ゆかしき、又美しき時である。

『綠の林は神の第一の宮殿であつた』と詩人は言ふ。

余は或る日、夕陽を感じつつ三井寺の山奥、太古の面影ある處、谷深く綠濃かなる邊、檜の林に友と語つた。日沒の壯麗と其清涼な光風を眺望することは出來なかつたが、然し深く夕陽の美しさを感じた。

我が人生には使命がある。使命は我に疲勞を與へる、此の疲勞はこの綠によつて取去られた。そして其の夕は萬感交々來りて我を慰めた。＝明治四十五年湖畔七月號＝

箱根に遊ぶ記

はからず、僕は箱根に數日を過す機會を得た。平常一度は行つて見たいと思つてゐたので、すぐその機會を捕へて友と出かけた。

箱根には歴史上の古蹟がある。弘法の舊蹟だとか曾我兄弟の墓だとか、賴朝の何かしたところだとか、下つて近世に入ると有名な關所の跡もある。それにつれて武士時代の話が何程でも頭に浮んで來る。

或茶店によると、老婆がしきりに、神崎與五郎だとか關口彌太郎だとか、講談の話をするし、跛者勝五郎と初花の情話も出て來るといふわけで、聞けば聞くほど出るわ、出るわ、幾何でも。

山の地形を見ると唱歌にある「天下の嶮云云」の文句は實際であると思つた。關所近くの舊東海道には、晝尙暗き杉の並木もある。朝夕は霧に閉されて何もかも、ぼんやりして見えなくなることもある。

芦の湖は非常に靜かで、大嵐のうちにも小舟を浮べて大平樂を言へさうな、遊ぶのには誠によい湖であると思つた。

とに角避暑地で我邦に有數の一つだから、氣持のよい處である。

七月の二十五日に國府津から下車して湯本まで電車で、それから箱根まで徒歩した。何でも三里半ほどであつたさうだ。別に苦しみもせず友と愉快に語りながら登つてしまつた。

その翌日芦の湖で、舟を浮べて一日の清遊をした。

その時に實に何とも知れぬ一種の感興を起した昔の偉大な人格の話を聞いた。そしてこの話は箱根に遊んでゐたうちに、始終僕の頭に歴然と遺つて居た。

五六百年も昔のことである、多分賴朝が天下に雄視して居た時分、箱根の麓に農夫で二人の兄弟が住んで居た。そして二人は殊勝にも、人間として世に生れたからには、何か後世に遺さなければならないと種々考へた末、思ひ當つたのは、山の上にいつも水の涸るる事のない湖水がある、それを山一つ何とかして道をつければ、水が來て沼津附近の荒地は立派な水田と化する。何とかしようと苦心の結果、兄弟で穴を掘つて水道をつけようと相談一決して、一生の事業として着手した。

測量機械だの、ダイナマイトだのは、夢にも考へたことのない時分、手で掘る鶴嘴さへ覺束ないものしか世にない時分に、山の上に旗を立てて、兄弟して、兄は上から、弟は下から掘り初めた。幾十年かかつたか今に記錄はないが、とうとう一念嚴を通すで、人の知れぬ恐しい目、馬鹿な目、苦しい目を幾度か繰り返して遂にやつてしまつた。上からの穴、下からの穴が近くなつて、もう途中で出會

ふ筈と思つてゐると、下からの穴は上からの穴より四尺高い處に行つた。それでも水は水源が高いから無事に流れて、この無名な兄弟の偉業は、三千石乃至五千石の田を灌漑して、今に至るまで農民の喜びは非常なものであると。

そして當時の人はこの兄弟を見て何としたか、考へれば實に涙の種である。彼等は兄弟があまり偉大な仕事を仕出かすので、危險人物と看做した。そして遂にその一生の大事業を默殺するばかりでなく、眞に兄弟の命を縮めてしまつた。殺したのである。

僕はこの話を聞いて嬉しかつた。兄弟は幸福な人であると思つた。

嗚呼我等は後世に何をするのであるか、又何のために人として生れて來たか。これは嚴肅なる問題である。

箱根に來てしみじみこの問題を思つた。

それから箱根に三日ばかり居て、小田原を通つて歸路に就いた。

小田原といふ名は實になつかしい名であると思つた。子供の時分に讀んだ太閤記がありありと顯れて來る。北條早雲の城跡に行くと、何だか例の豐太閤が意氣揚揚と、部下の大小名を從へて華美を盡して小田原攻と出かけ、長陣の用意も周到に、御得意の位詰の戰略を施したことを思ひ出した。

そこで豐太閤の逸話があることを、前の箱根の無名の兄弟の話から聯想した。

或る時淀川の堤は洪水のため危險となつた。百姓共が大騷ぎをして居る處に豐太閤は行列を整へて通りかかつた。それを見るより忽ち乘物より飛んで下り、誰かの家臣、友田左近右衞門を見て、

『其方は乃公と好比の相肩ぢや、それ枋(あばた)の一方を擔げ』

と言ひながら、大汗で土を運んだ。これを見たお供の大名小名より、見物の彌次馬に至るまで皆棄て置くことが出來ない。直ちに急こしらへの勞働者と化して、漸時にして工事なりて、攝津、山城の二國は大洪水より免れたと。

僕はこの太閤の心がけと、前の農夫の兄弟の話を寄せて箱根に遊んだ記といふのは、實に紀行より何より、箱根に遊んで得た最も重要なる事であるからである。

クリスチヤンとはイエスに絶對的に從つたもので、其の命にある、

爾等神を愛すべし、亦隣人を愛すべし

とあるを實行するものである。

位階高く名聲一世に高き豐太閤の如きものも、或は片田舎の農夫も、俱に世のため、神のため、後世に遺すべき事を、如何なる困難も切り拔けてせねばならぬ。

僕の箱根に得た感想を遊記として、如斯に書いてみたのである。—湖聲　大正元年八月號—

麻醉劑にかかる記

僕は氣持よく寢た。朝の三時頃にふと目を覺してからうつうつとしてゐると、急にエーテルの匂ひがし出した。僕は幾度も强い呼吸をして、その一種刺戟する匂ひを嗅いで見た。ちつとも麻醉せない、頭はますます明瞭となる。僕は遂にクロロフオルムの力を疑つた、そしてそれは夢であつた。後からエーテルとクロロフオルムとを混同してゐた事を思ひ出して獨りで笑つた。

僕はその夢より醒めた朝、クロロフオルムを頂戴して、後頭部に手術を受けるのだ。何となく氣にかけて醫者の來るのを待つてゐた。

昔、クロロフオルムを發見した何とかいふ大科學者が、當時の人から大惡魔のやうに思はれ、クロロフオルムは魔法使ひの藥であると思はれてゐて、神學者達はクロロフオルムを使用するは、神に對する大罪也として居た其の時、其の科學者が創世記にある、エホバ神がアダムを深き眠りに落し入れて其の胸の骨を取り、エバを造つた昔噺を唯一の楯に取りて、世の中の頑迷と戰つて遂にクロロフオルムが世に行はれたと、僕は何だか賢いこの科學者の胸中が察せられるやうに思つた。

人を見て法を說く、犬に眞珠を與ふる勿れ乎。

約束の時が來た、僕は手術臺上の人である。醫者は二人がかりで、僕の親友は見分の役で傍に立つてゐる。一人の醫者が、布片に藥を浸して僕の鼻に當てた。そして息を吸へと言つた。さあ、これからだ、と覺悟を定めて、もう暫く此の世界も美しい日光も、山も森も何も彼もに告別しなければならぬ（僕は二階の一部屋に碓氷峠の景色を、手術臺上に頭を置いてよく觀賞しつつクロロフオルムの御馳走を受けて居るのだ）。

一息吸つた、そしてむせ返つた。藥が强すぎると醫者に言つた。夢で嗅いだエーテルよりはよほどきつい。

二息吸つた、すると肺の奥が何だか小さい振動をするのを覺えた。やあよく利くわい、と思つた。

三息吸つた、肺の振動がますます烈しくなつて來た。恰も電燈會社の發電所が急に僕の肺臟の中に開業したやうであつた。

四息吸つた、そして眼は役に立たぬやうになつた、ああもうやられたのだ。

"Doctor I am done for … I am done for !"

と英語で、もう罹りましたよ、と二度程言うた。

僕の醫者は二人とも米國人で、若手の元氣活潑な人と、少し年寄の二人である。醫者は僕の言葉を聞いて、なにまだ罹つてゐない、罹つたらたことが解らなくなるのだ、と言つた。

その聲を聞くと、何だか氣が遠くなり出して肺臓の臨時發電所はますます烈しく振動して來た。もう來たと思つて、最後の思ひ出にと、僕は友の手を堅く堅く握つた、そしてそのまま何もかも知らぬ。

『もうお醒めだらうか』と誰かの話聲がする。ふと我に返ると自分の寢臺の上に、誠に安樂に寢て居たことに僕は氣がついた。醫者も誰も居ない、僕の頭は大きな繃帶ですつかり卷いてある。僕は不覺のうちに、後頭部の手術もすんでしまつて、これから寢て居ればよいのだ、人を呼んで經過を聞いた。鏡を持たせておいて床の中から自分の頭を拜見した。聞けば、二時間半ばかり寢て居つたさうだ。夢も何も見ない。勿論發電所のやうな轟聲は、すつかり耀つた時より知らない。眞に不覺とはこの事である。

僕は手術を受けて、頭の骨まで出して洗つて貰ひ、血の二合位失つたが、少しも苦しまなかつた。醫術の進歩は有りがたいものである。

僕は神にこの幸なる世界に住はせ給ふ事を感謝した。そして又哲學上の時間といふ事は人の作つた勝手のもので、『神の御目には千年も一日の如し』と昔の詩人が歌つたのを、僕は立派に裏書して眞也といふことが出來る經驗を得た。—湖聲　大正元年九月號—

米と藷

米が高い、一升金二十八錢、新聞を見ると中食をしない學童が幾百人もある、少額の月給取の如何に其の生活難を社會に訴へつつあるかを見よ。

生活難也、生活難也、我國民は餓死せんとするか。

米價の壓迫を受けたる同胞は、外米の關稅撤廢、政府の米價下落策成功を望み見ること、旱天に大雨を希ふ如く、更に烈しく壓迫されたるものは、幾多の富豪慈善家が一齊に立ち、施米、慈惠安賣米を供給せんことを待つてゐる。萬朝報の一口噺はこの消息を明かにした。

或人は氣絕したが、程經て蘇生した。

甲『なんだ、この米の高いのに、安くなるまで死んで居ればよいのに。』と。

吾人は覺悟あり、人は米のみにて生くるものならずと、大阪の醫師會は過日、其の生理上、經濟上の諸點より食物を調査して斷案を下した。

「芋は最良の食物なり」と。

諸君、芋は一貫目十五錢を以て買ふことを得る。愛蘭人は芋を常食とすると。芋を食うて何の恥づることかある。

吾人は知る、吾人は其の味官の奴隷となつてはならぬことを。—湖畔　明治四十五年七月號—

日本はアメリカの先進國

アメリカ人中の文筆の士、ウイル・ローヂャー氏が、昨年の冬日本に來訪、日本の感想を聞かれた時に、次のやうに一筆ペンを走らせたさうです。

『日本は驚くべき自轉車の國である。アメリカは近來不景氣が深刻になつて、高級車は賣れなくなり、ボロ自動車で我慢してゐるが、今より更に經濟界が悪くなれば、襤褸フォードにさへ乘れぬやうになるであらう。その時はソロソロ自轉車である。だから、日本はアメリカの先進國であるんだ。』

皮肉も、ここまで行けば愉快であります。然り、日本は、その貧乏に於て慥にアメリカを斷然リードして居ます。

今日ある村で、七十九翁藤田齊一先生に面會しました。『長壽の秘訣は、清貧生活にあり』と申されまして、私は脫帽敬禮したのであります。『貧しき者は幸福』『幸福なるかな心の貧しき者、天國はその人のものなり』であります。

日本人は隣國に支那あり南洋あり印度あり、ビルマあり、シベリヤあり、北極あり、全く全世界の厄介國林立のまつただ中に、或は東洋の平和を叫び、人類の平和を主張し、歐米の資本主義の横暴と戰はんとしてゐるのです。全く、アメリカと比べものにならぬ難局を十重二十重に切り拔けつつ、血みどろの生活をしてゐるのです。西半球の四海波靜かにして、ジャズと踊りと、煙草とコーヒーと半裸體禮讃の國とは斷然違ひます。

人生は天國を地上に築くため、眞劍な血と十字架の苦難を越えて行く荊棘の途だと、我我は考へて居ます。この考へはやがて、日本をアメリカの先進國とすると私は思ひます。

『我等をキリストの愛より、地上に天國を作る愛の運動より、離れしむる者は誰ぞ。艱難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危險か、劍か。

我、確く信ず、死も生命も、御使も（天使も）權威ある者も、今ある者も、後あらん者も、力あるものも、高きも、深きも、此の他の造られたるものも、我らの主、キリスト・イエスにある神の愛より、我等を離れしむるを得ざることを』

大膽なる哉、パウロの言葉。

私は、この意味に於て、日本はアメリカ否全世界の先進國たらんことを、熱望して止みません。

日本と世界とを考へる

『日本は發狂したんだ。いよいよ東洋の一角より世界大戰の幕が切つて落されたんだ。日本の公債や、日本人の會社の債券なんか、今に、ロハになる、賣れ賣れ、賣るのは今のうちだ。』といふやうな人氣が、一時アメリカを吹きまくつてをりました。それは、今年の春のことでした。ソラ、前大藏大臣が殺された、三井王國の大黑柱がヤラレたといふと、日本の金が毎日毎日暴落をつづける。

百圓が、アメリカの三十二圓、弗と言つても圓と言うても大した認識不足ではありません。むしろ現實的に、日本金、百圓とアメリカの弗三十二弗の實力を比較すれば弗をすぐに圓と言うてもまだ足りません。何しろ一ケ月女中の給料が八十弗もしますから、日本金では三十二弗の計算すれば二百五十圓です。日本の高給上女中が一ケ月二十五圓とすれば、アメリカの女は正にその十倍の收入なんです。だから、アメリカの弗と、日本の圓の比較をしますと、勿驚、日本の百圓は、アメリカで使ふ段になれば十分の一、金十圓位の使ひ料しかないんです。食堂車で少し大食すれば一飯十圓位は飛びます。

今春の爲替では百圓が三十二弗に落ち、現今はまだ下落して、百圓が二十七弗何セントとなりました。つまり日本が金のことでは世界的に信用を落したのです。その原因は軍備のために、日本政府は破產するだらう。農村の窮乏は結局日本內地の金融大恐慌を卷き起すだらうと、世界人は日本の現狀を見てゐるのです。

私はこの所謂爲替問題に就ては、存外樂觀して居ます。アメリカ人が小遣錢を三四ケ月貯蓄して置くと、立派な、ビュイック級の自動車を手に入れられるのです。つまり自動車なんかは、日本人はアメリカ人の十倍も金を出して買つてる馬鹿を清算し、アメリカ流の快樂、アメリカ流の所謂文化生活を捨るなら何でもない。そして日本は滿洲國と協力し、太平洋と南洋とにある諸國と協力すれば、立派に自給自足、日本獨特の生活を打ち建てて民力を養ひ、五十年後には富國强兵を實現して、世界を正道に立ち歸らす大實力を發揮するに至ると信ずるものです。

西へ西へと、世界の覇權は移りました。古代支那、印度、メソポタミヤ、エジプト、ローマより佛國文明英國文化、そして最近のアメリカニズム、それは昭和の今日、日本へと西進しつつあります。

日本人は、掌につばきして、この機會を握り、日本は決して發狂してゐないのだ、日本の農村は更生するんだ。日本人の精神生活は、過去を清算して徹底的な、西洋人がクリスチャンの夢だと思つてゐた、精神第一生活に沒入して堂堂世界を正道に立ち返らす、イヤ新理想主義の地球を作るんだと、今日この頃の大奮發を、大飛躍を、する時代が來たんだと考へて居ります。

外國崇拜の清算

ある雪の夜、江州は中仙道筋の愛知川町で十數人の老若男女に向つて、私は『歐米の旅より見たる日本』と言ふ題で、いろいろ世界見物の感想を、冬の夜の長長しき物語をして居ました。

前列に、眞宗ごりのやうな媼さんが熱心に話を聞いてくれまして、私は心から喜んで、このお婆さんに世界のことが少しでもわかる樣に話しました。

日本人は昔から、大變な外國崇拜をしてました。たとへば、地獄繪ですね、あの佛敎について來たいろいろの藝術文化の中の地獄の繪を考へて下さい。

まん中に坐つてゐる閻魔さんは、どう見ても支那服、唐服をつけて死人の裁判をやつてます。そして赤鬼青鬼は、裸體で虎の皮の褌です。あれは、印度人、天竺の黑ん坊や、印度支那あたりの青黃ろい人間なんです。そして單衣ものを着て、慄へてゐる亡者は、日本服を着た日本人なんですからやり切れません。日本人が支那、印度の國際聯盟の裁判にかかつて、途方にくれてるのが昔の地獄の繪なんです。

德川時代では、全く支那天竺の盲拜をやつたのです。それから、明治時代には歐化主義で、白人文明盲拜をしたのです。處が、有難い哉、昭和の今日、たうとう外國崇拜の迷信から、斷然、近頃の言

葉で言へば、清算され脫却して、正義のためには、『日本國中黑こげとなつてもすることは斷じてする』とまで、言ひ切るやうに、日本は豪くなつたのです。

ここまで話をすすめますと、お婆さんは突然、私を見上げました。手を堅く握つて謹聽してくれたのは、全く愉快でありました。

外國文化の衣を脫いだ、本來の、キリスト敎、白人文明の迷ひを洗ひ流したキリスト敎、敎祖イエスが、念願したやうな世界的の、人間全體的の、從つて、日本人には日本的のキリスト敎を、私共は憧れてゐます。變てこな、西洋神學ものに、ばかされぬやう、心して、キリスト敎の中心眞理のみを表現したく思ひます。

貝加爾湖畔より

突然に、一年の閑月日を得て、歐米に旅行する機會が出來た。僕は九月三十日、敦賀港を、露國義勇艦隊ポルタワ號に乘じて出帆した。日本海の波靜かに、實に春心地して、十月二日浦鹽港に着して、其の日の午後直ちに、萬國寢臺急行列車に乘じて、西へ西へと運ばれた。そして、今十月五日の午後、有名な貝加爾湖の南岸に運ばれつつある。

湖水は漣打つて誠に靜かである、是が海拔一千五百尺の高原にある、西比利亞第一の淡水湖かと、車窓からその北に際限なく伸びてゐる藍色の水を眺めつつ、案内記を手にすると、其の湖の面積は、丁度英國の本國と同じ程であることを讀んで少からず感じた。思へば我琵琶湖は豆のやうであることを、今更ながら想はれる。更に我帝國の領土の狹いことが北滿シベリヤと大大的の未開原野を見せられて實物教育を受けたやうに深く僕の頭に刻み込まれた。四五年前北海道の十勝の平野を車窓から眺めて、其の廣大なることに感歎した事は最早このシベリヤを見て取り消さねばならぬやうに思はれる。浦鹽から夜晝となく急行列車は走つてゐる、其の間今まで滿三晝夜、その間眼界を邪魔する物は殆どない、唯廣廣とした平野ばかりの旅であつた。

北滿洲は實に淋しい、樹木なんか決してない、褐色の秋草の枯れたのが一面であつた。滿洲里の市街を通過して西比利亞に入ると落葉松の林がある。白樺の林がある、黑龍江の上流が時時眼前に顯れるといふやうに漸次賑かになつて來た。更に深く西に進みて貝加爾近くになると大森林が一帶に續いて、露人の移住した村落が中中多い。

思へば露國政府が極東に非常なる放資をして西比利亞鐵道を敷設して、この廣大無邊のシベリヤの開拓をして居るのは、大大的事業であり學國的な壯圖である事が明かである。

西比利亞鐵道敷設費、計へて七億二千萬圓、毎年經常費平均五百萬圓を要すとのことである、一露里毎に番小屋を設けて鐵道を守つて居る。番をして居る一家族が、人の氣のない、趣味もなく變化もない平野に年中暮して居るのを見ると實に氣の毒で堪らない。そしてその寒さ零度以下二十何度と言ふのに幾月か戰はねばならぬを想へば、是等の人達は如何にして生きて行くか不思議のやうである。

『露國の海軍は船舶の上にあらず、二本の鐵軌道上に有り。』とウキテ首相が昔日叫んだことがある、西比利亞鐵道は露國に取りては幾百艘の商船であり又軍艦である。軍事上の目的でも通商上の目的でも何でも構はぬこの大陸横斷鐵道は、文明に大功あるものとしなければならぬ、軍備擴張も鐵道敷設なんかに金を使うてくれれば、後後のためになるものをと僕は車中で獨語した。

萬國寢臺急行車は、實にその名のやうに萬國共通である。乘合せて僕が言葉を交へた人だけでも、英米獨露は勿論伊太利人、瑞西人、波蘭人、支那人、和蘭人、ハンガリー人、印度人及び日本人といふ次第で、この外きつと佛人も居るに違ひない。然し僕は佛語は不解であるので、先づ怪しい獨露清語と、少し優しな英語で、我國人を除いて十一ケ國の人と會談した。何にても萬國共通するものは、親切といふことが土臺になれば、言語や文字が解らなくてもよく意志が通ずるものであることがつくづく感ぜられた。

愛の一字は何時か萬國共通語中最大の者となるに違ひないと僕は豫言して憚らない。

インターナショナルエキスプレスと言ふと如何にも立派な、非常に速力の早い汽車のやうに思はれ

るが、乘つて見て一寸落膽した。速力は多分一時間に二十哩か二十五哩、我國の普通列車と同じやうなものである。然し客車は隨分立派で、丁度新橋下關間の特別急行一等室を廣くしたものと想像すれば間違ひない。食堂も奇麗で料理も精養軒の食堂車よりは上手である。列車の編成は機關車並に荷物及浴室車一等寢臺二等寢臺合計四輛といふ順序で、僕の列車を最後に特別車があつて、我明治天皇御大喪に英國皇帝の名代として來朝せられたコンノート殿下が、其の隨員と御乘車せられて居る。ボア戰爭に勇名を聲かした將軍も居れば、現今英國海軍の明星であるボー大將も居る。

『旅は道づれ世は情』と、誰かが言つたことも亦『渡る世間に鬼はなし』と言つたのも、よく實驗から言つた言葉で、其の考へ方が如何にもクリスチヤンの態度であると思つて、昔の是等の言葉を初めた人達に僕は慕はしい氣持を持つて居る。會つて見たい。ハルビンより僕と同部屋に支那人二人乘合せる、茶商人でイルクツクに商用で行くのである、なかなか親切で筆談すると色色のことを書く。

辮髪を何時切つたかと書くと、民國建國卽日と書いて返すといふ工合で、筆談も一興である。

ハルビンから僕は幸にも米國の婦人で僕の友人が二人まである一團に加つて愉快に旅行を續けることとなつた。

客車内で毎日一度鑵詰を開け、牛乳を溫めて手料理をして食事をすることを約束する。搖れながらの水仕事もするので、滑稽なことは山ほどある、これも消閑の最良手段である。

眼を擧げて貝加爾湖を望むと、最早夕陽は西に入つて日暮である。湖面はいよいよ靜かに見え、湖邊の丘は優美な曲線をもつて北の空一面連つて居る。僕等は既に大なる展開した湖面を眺望すべき處は通り過ぎた、今磁石と地圖をもつて位置を見ると、丁度湖水の南岸を過つて西北バイカル市に向つて進行しつつあるのだ。

琵琶湖の南端瀨田、石山を眺めながら、車中にて種種の想ひに耽りつつあつた過去の幾度かを想ひ出でつつ、バイカル湖畔より愛する『聲』にかくの如くに書き送つて我一信とする。

—大正元年十月五日夕六時東の空を望んで認む—

道連れ

日本海の波靜かに、見渡す限り疊を敷ける如き靑海原、氣持よき十月の太陽は一點の雲なき空に照つて居る、ボルタワ號の甲板は世界各國人の散步場となつた。僕は今しもキヤビンより出でて階段を上つて行くと、向ひの室に居る和蘭人が肩を叩いて、

『君、將棋をしないか、隨分よい天氣だね。』

僕は幸に西洋の將棋を知つてゐた。それですぐやらうと言ふと話はまとまつて、奇麗に飾つてある

娯樂室の机の上に盤面と駒が揃つた。

『君、幾程賭けよう、一磅金貨ではどうだ。』

と連れが問を出した。平氣なものである。僕は曾て賭將棋をしたことがない、そしてこの言葉には閉口した。賭けるのならやめだ、僕はそんな將棋は嫌だ、と答へると、和蘭人は、そんなら名譽のためにするのかと機嫌が悪い。僕の顔を暫く見てゐたが、賭將棋は出來ぬと見て、名譽のために彼は僕と二番戰つた、印度人が來る、瑞西人、露西亞人、英人まで盤の周圍に集つて觀戰して居た。

僕はこのゲームは初めからいやなので氣が乘らぬ、二番とも初めは勝つた、そして終りに負けてやつた。

浦鹽の停車場を離れて萬國寢臺急行列車は薪を燃して黄色の變な煙を吐きつつ、急行に似合はぬ緩速力で、北へ、西へと進んで行く。ニコリスクも過ぎボグラニツチナヤも通つて北滿洲に入ると、廣い廣い褐色の野原ばかりである。

車中の人皆倦怠して無趣味の旅をかこつて居る。

『君、ヴオドカ酒は甘いよ、チビチビやるとよい味だよ。露西亞の奴なんかガブリと大口に飲むからいけないんだ。』

僕の連れは酒の講義を初めた。

食堂列車にある、黒赤白三種の葡萄酒、シヤンパン、コグニヤツクシエリー、ブランデーの幾程、ウヰスキー、麥酒の幾程についていろいろの批評をして居る。

『昨夜食堂で露西亞の奴が飲みすぎて小氣味よく仆れたが、あの時、額を割れる程椅子で打つて居たよ、あれだから困るのだ。』と、或る連れは話し出した。

閑居しなければならぬ、西比利亞の旅、僕の連れは醉ひ續けて居る。

歐洲も程近い、明朝の十時にはウラル山脈を横斷する、今夜は亞細亞での終りの夢を結ぶのだ、僕は十時過ぎボーイが來て寢臺を作るのを待つて居る、室の戸が開いた、來たのは隣室の伊太利人である、僕の席の隣りに腰を掛けた。

『君これから何處へ行くの。』と、歐洲の地圖を膝の上に質問した。僕は道順を話した。

『ぢやあ巴里に行くね、君、忠告するよ、巴里に行つて夜の一時から朝の五時まで寢てゐるやうでは、鞄の中に入つて見物して袋の中で歸途に就くのと同じだ。』

聞けばこの伊太利人は夜の男である、巴里にゐた十日のうちに僅か四十時間寢たと言つて居る。日本に來ては東京の芝居を毎夜見て歩き、吉原に行つたことなど話し出した。

僕は止めればよいのにと思つて居ると、日本に於ける公娼の可否を論じ出した。仕方がないから少少議論すると、此の男益々風に煽られた焔のやうに話し出した。僕はしまつたと思つたが、この男とうとう二時間ばかり話した。

巴里の魔窟ヲリンピヤ、ブレース、ブランシュ、なんか僕に見物せよといふ、僕は斷然彼を去らしめた。すると佛蘭西語の浮れ調子の流行歌を歌ひながら出て行つた。

今度の旅で幸に僕は眞面目なる連れのある事はうれしかつた。されど昔の乘合船の如き此の汽車の連れは、僕に種種のことを語る。

酒、女、賭博、昔の人は三道樂と言つたこれ等のものは、旅の連れの口より恥は搔き捨てなりとする人達には、強く響くであらう。そして神の子イエスが昔話の放蕩者はかくの如くして墮落した。嗚呼墮落、僕は餘り多くの實例を見た。又それに導く手段も聞いた、今又僅かに見ることを得た。

堅き信念、高き理想、眞面目なる人生觀、是青年輩の生命である、人生の旅は餘りに多くの道連れがあつても困ることが多い。

昔エノクは神の道連れとなつた。誰か、現代に於ける神の道連れたるものぞ。其の人こそ最も幸福の人と言ふべきである。—湖畔　大正元年十二月號—

モスコーより

モスコーは露國の京都である。朝霧の中に高い寺院の尖塔が何れも金色の光々放ちつつ、數ケ所の空に線を作つてゐる。市の周圍に綠したたるやうな山はないが、肥沃な平地は漫漫と流れるモスコー川の岸邊はたしかに畫である。

五十幾萬の南歐兵はナポレオン一世に率ゐられて百年の昔、丁度僕の見た秋のモスコーを攻め落してクレムリン宮城に乘込んだ。そしてこの愉快な市を見下した。忽ちにして市の各所よりモスコー住民の放ちたる火は炎炎と焰を上げて、彼等南歐の精兵の賴みとする糧食も宿所も燒き盡し、繁華なりし市は灰と化した。

千古の名將奈翁を退却せねばならぬ目に會せた此の市は其の後更に築かれて人口百萬を越え、今は榮え、に榮えて居る。

僕は奈翁の跡を追つて、初めてモスコーを見たといふ「雀が丘」を本陣とした「クレムリン宮」を見物した。美しいモスコーの市、ああ此の市は奈翁を呪つたのである、宮殿の一角に彼が腕を組んでうらめしい物凄い顏をして燒けゆくモスコーを眺めて退却を決定したと傳へられる處に、僕も立つて腕を組んで見た。千萬の感に打たれつつ南を眺めてその秋、時ならぬ大吹雪にコサック兵の追擊を加

へ、五十幾萬の大軍も殘り少く亡ぼされて、大將ナポレオンは數十の衞兵と共に佛國に逃げ歸つたことを思ひ出した。思へばナポレオンは英傑である、しかし古今無雙の人殺しである、彼の戰は七百萬の兵を戰場の露と消えしめた。

トレチコフ繪畫陳列場に行つて見た。そしてその名畫が數百もあるうちに、旅僧でペテロパウスク號の轟沈と共に落命したベルスチヤーギン作の戰爭の繪を見物した。

雪の一面に積つてゐる野の中に裸體の死骸幾百も、或は頭或は胴、或は足又は手などが追追に突き出てゐる。皆凄い死色をして、血の跡など實物を見るやうに畫いてある。左手に一人の僧と一人の將が感概溢るる趣をもつて祈禱を捧げてゐる畫がある。露政府は文學を壓迫して各種の近代思想の輸入を拒絶したが、しかし畫を制限しなかつた。

西比利亞の奥に配所の月を眺める國事犯人の畫の語る處、戰爭畫の語る處、皆深い深い聲である。

幾つかの寺院を見物した。祭日で幾百の參詣人が何所に行つても滿ち滿ちて居た。

ダイヤ、ルビー、エメラルド、眞珠、トーパスなんかを幾百もつけてある聖像(アイコン)が、周圍の壁に柱に金色と寶石のきらめきを眩きまでに放つて居る。善男善女が皆一一拜禮してそのアイコンに接吻して行く。

僕等が不思議さうに見物して居るのを少しも頓着しない、眞面目である、靜かである。寺の內は唯唱歌隊と美しい聲樂と僧侶の讀經の聲と、祈禱の聲と燒香の煙及び香りばかりである。

皆寺院はうす暗い、そして飾りは金銀寶石を到る處に使つてある。太陽の光線の入り來る處は皆奇麗な色硝子で、モザイクの聖畫であつて、薄暗い內陣から輝く日光を受けて居る色硝子の聖畫を見ると本當に美しい。

露西亞は希臘カソリツク教が國教である。そして禮拜儀式、壯嚴な寺、金銀寶石で飾つた聖像、金襴の衣を着た僧侶、唱歌隊の美しい聲樂讀經がその生命である。

露人がまた僧侶を通じて聖書を讀み祈禱を捧げて居るのは氣の毒である、宗教は個人の魂の熱い願であつて、神と吾等は直接の關係がなければならぬ。舊思想を押賣して居る露政府の下に、革命の暗雲あるは當り前である。—湖聲　大正二年一月號—

セントペテルスブルグより

ペテルスブルグは沼地に建設された。

西曆千七百〇六年に洪水があつた。ペテルスブルグはネヴア河の水に浸された。

英主ピーター大帝は日記に記して『人人が屋根の上に、木の上に住んでゐてノアの大洪水の時のや

うで見て居ると面白い。』

スヱデンの英雄チャーレス十二世は露西亞に大軍を率ゐて荒れ廻り、今は南ポーランドに轉戰して居る。其の虚を睨んでピーターはバルチック海方面のスヱデン領地を占領して好地ネヴァ河に己の首府を建設しつつあつた。河口は沼地で建設に適しないし、しかしピーターには困難障害は大好物である。附近の大森林は皆切り倒して建設の地杭とした、石材其の他集中する樣は驚くべきである。此の市に入り來る車或は船舶は、必ず石か煉瓦か砂利かを積載して居る。幾十萬の工夫は都會を作るために働いてゐる。丁度ピーターは魔法で露都を建設したやうに、歐洲の天地を驚かした。西曆千七百〇九年チャーレス十二世とプルトワで決戰してスヱデン侵入軍を打破り、露西亞は覇を世界に稱へ、ペテルスブルグは榮えに榮えた。

今は人口百五十幾萬の大都會となつた。しかし昔の沼地はやはり名殘りを留めて居る。僕のペテルスブルグに着いた時から、ペテルスブルグを去る朝まで五日間日光を見たことがない。露ばかり深い濕つた冷い都會である。

モスコーと違つて此の都は純歐洲式に出來て居る。家も街も橋も何も彼もピーター大帝が露西亞を歐化しようとして、嚴かな法律で歐洲式の着物をその人民に强ひ鬚を剃らせ、（この法律は僧侶を除きロシア鬚をつけて居るものは金四錢より金四百圓の罰金を科するとある）袴を改めさせた昔を今、

此の都會の樣子で悟ることが出來る。勿論この法律は消えてしまつたが、發布された時は嚴格なもので、ピーター大帝自身で不從の臣を罰した例があるくらゐである。

兎角熱心な大帝の歐化政策は實現されて居る。先づピーター大帝手造の家を見に行つた。又手造の船を見物した。二百年前の英主の器用なお手前に感じ入つた。

冬宮を見物した。部屋數七百八十二、何時此の宮殿を出ることが出來るだらうかと心配した。丁度印度の釋尊が父王の際を睨んで何時どうして宮殿より逃れてやらうかと考へられたと、動機と境遇は違ふが、僕は實際餘りの大きさ、餘りの立派さで飽き飽きして疲れた。早く出たいものだと思つたくらゐである。

其の冬宮の隣りにやはり續いて又モナストリー宮がある。それは今は博物館になつてゐる。これも大きい宮殿で僕は同じ日に見物する勇氣がなかつたから、二日して見物に行つた。

冬宮内でその華美な造りと冷いモザイクの床と壁に掛つてゐる幾十の戰爭畫のうちで『肉橋』といふのがあつた。砲兵が前進してゐる平原に小さい溝がある。小さいが砲車は橋なくして進めない。戰は酣で急場である。それで兵が生きながら此の溝を己の身體で埋めて、その『肉橋』を馬幾頭かに曳かせた野砲が通過しつつある畫である。僕は一目見て、二目見る勇氣がなかつた。けれどもその畫は深く頭に殘つてゐる。

聖サイク寺院カザン寺院アレキサンダー博物館、郊外の露帝定住のザースキー宮其他種種の建物を滯在して居る五日間に忙がしく見物した。

東京で數年前に會つた男爵ニコライを、或夜訪問して露西亞の近況を聞いた。

露西亞は人民の半分が官吏と軍人で他の半分を攻めて居るやうですと或人が申しましたが本當ですか、私はシベリヤで、モスコーで、又露都で制服を着た人を澤山見ました。

といふとニコライは答へて、

そんなことはありません、しかし官吏と軍人は多いですよ。

政府は酒の專賣から軍事費の大部分を得てゐるのは恥ですね。

と言はれた、又、

希臘教は困つたものです、まるで人民に信教の自由はないのですもの。

五日の晩、僕は露都を辭して、ベルリン向けて出かけた。—湖聲　大正二年二月號—

紐育の二面

大西洋を横切つて、紐育の港に入つて來たのは、丁度晝の十二時過ぎであつた。その日は霧深い天氣で、今一時間でハドソン河を溯つて棧橋にこの大汽船ヲセアニック號が横づけになるのだと船員が話してくれたのが虚言のやうに思はれて、ただ甲板の上から平たい島と大陸の低い線を眺めてゐた僕は、急に船首の方向に霧の上高く聳えて、夢のやうに魔天樓の數棟が壯快な輪廓を作つてゐるのを見てアッと驚いた。

聞いてゐた世界一の富める國米國第一の都に、四十階五十階の家があるといふことを夢のやうに思つて、今まで想像を逞しうしてゐるたのが初めて、丁度富士の高嶺が雲の上にその皚白の雪を頂いて雄姿堂堂と關東の空に聳え立つて天下の壯觀であるが如く、茲に魔天樓は人の手を以てその最新最高なるもの高さ七百五十尺、階數五十五、何れも皆商事會社の事務室となりて、天下の富力を支配する米國の巨人を集めて居るのは又世界の壯觀であらう。

船の進むにつれて距離が近くなつて、ハドソン河口に入つて來た時には霧も晴れて、魔天樓が一一手に取るやうに見えた。四十階五十階の建物が僅かばかりの間に束ねたやうに立つてゐる、其の數萬の部屋の數十萬の窓硝子に、強い午後の太陽が眩いばかりに反射してゐるのは、寶石の城のやうに見えた。

飛び立つやうな心持ちで稅關の調べが濟むと迎へに來てくれた友達連と、すぐ市内電車で僅か半歲の月日を送る宿に着いた。

宿は紐育の富豪町、五番街に近い。

或る土曜の午後散歩に出て此の町を通つて見た。カーネギー、ロツクフェラー、モルガン、ヴアンダービルド、タイタニツク號の沈没に非命の死を遂げたアスター等、米國一流の富豪百萬弗（ミリオネアー）の主人でなく、數千萬數億弗（マルチミリオネアー）の主人が軒を連ねてゐるのを見て、摩天樓より以上に驚かざるを得なかつた。五番街は自動車の充滿する處である。數千臺の自動車が走馬燈のやうに通る、人道には肩に風切る大盡連の行列が續く。

どこの富豪連でも此所に來ると、其の威勢も光も非常に見劣りがするだらうと思はれる。

これが紐育に時めく方面の話である。

しかしその蔭には恐しいものがある、丁度光の最も大なる處には、影の最も暗いものがある如く、金のなる木が轉んで居さうな街の影には、人か犬か、はた豚か、何か知らぬものが集つて居る。

東河岸（イーストサイド）に貧民窟がある、摩天樓より有名なウオール街株式取引所があつて、世界の財界の覇王の集合所から程遠からぬ所に、世界の最下等の人類集合所がある、其の數町の間を東河岸（イーストサイド）と言つて居る。

或る土曜日の晩九時過から僕は貧民窟探見に出かけた。高架電車でフランクリンスクエヤーまで行つて、それから徒歩だ。一寸行くと紐育の町にもこんな暗い町があるかと思ふ樣な所に出て來た。氣持が惡い程うす暗い。石を敷きつめてある道の兩側には煤けた四階五階建の長屋がある。人道には汚

い洋服を着た醉つぱらひが、高低の足、血走つた眼、酒臭い地獄の息。一歩一歩に滿身の力を入れて居ますと言はんばかりに歩いて居るのが數人もある。

電車に乘ると、『おい車掌、一體、俺が醉つて居るのか電車が醉つて居やがるのかどうだ。』どうだといふ言葉に無闇に力を入れて、若い車掌を睨み上げた恐しい老爺が居た。

紐育の貧民窟は、日本の貧民窟より酒の香がよほどひどい。人殺し、賭博打、强盗、窃盗、何でも來いの惡人が、獄屋に悔改めて此の暗い東河岸にウオーターストリート・ミツションと言ふ名前で基督の教を、實行的に戰爭的に傳道し出したのは、ゼリ・マコーレーといふ人である。此の運動の始つてから今年で丁度三十九年になる。僕はその集會に列した、もう其の時は九時過ぎであつた。集つて居る人達は皆一曲ある連中で、色の燒けた汚い破れた洋服に、數月も剃つたことのない長い髪、誠に日本の乞食と同じ風をして居る。會衆の内から一人立つて、『私は繪かきで一週二十弗も儲ける事が出來るのですが、ウキスキーの捕虜になつてこんな有樣です。今晩此所でキリストの力を與へられて酒を止めます、神の御名は頌むべきかな。』といふた。

そして會衆一同が頭を下げて牧師が祈禱して會が終つた。

皆表口からぞろぞろと出て行つた、僕はこの會場に留つて暫く考へ込んで居ると、一人の男が僕の手を取つて親切に『よく來て下さつた。』と言うた。それから御互に話をして居ると、此の男はもと

賭博場の番頭で、三週間前に禁酒を宣言して、キリストに依る以前約六月の間は醉つて居ない時がなかつたので、何も彼も飲んでしまつて落ぶれた果、此所で救はれたのだと言ふ事が解つた。それでそのウキルソンといふ男に、

『君一つ紐育の一番暗い所に案内してくれ給べ。』といふと、輕く受合つて、夜の十時前から二人で大道に出て次のやうな所に行つた。

最下等の酒場、賭博場、コケインやモルヒネの秘密販賣所、支那町の最下等の飲食店、夜通し椅子に腰かけて夜霧を凌ぐ所、其の他種種。

十一時半過ぎまで暗い恐しい町を二人で歩き通した、そして見たものは皆地獄の有樣ばかりであつた。

人は萬物の靈長であるが、此の暗い紐育には天地萬象のうち最下等の形を見るのである。

僕は物質文明が醒めた二十世紀にかくの如き汚點を與へて居るのを見ると、實に精神文明のために我等は如何に責任を感じて働かねばならぬかを痛切に感じた。今は物質文明が先になつてゐるやうに思はれる。精神文明が魁けせなければ虚言である、人道の破壞であると思ふ。吾等は考へなければならぬ、然り我等は大いに發憤しなければならぬ所がある。僕は貧民窟の狀態を書かうとした。そして頭の中で稿を立てて見ると、とても書く勇氣がない。余り汚れて居る、余りに獸類以下の問題である。で、最後にこの最底の物からやはり潔い高い聖なる人を得るために、夜通しこの地獄に働いて居る人人のために祈りたいと思ふ。

時時神の力がこれ等の罪の子の間から絶大な人物を得て、大成功をするのを見るのは、近世の奇蹟である。—潮聲　大正二年三月號—

聲

一

田舍の青年は都會に出たいといふ。百姓を止めて土にまみれざる都會生活を慕つてゐる。皆平平凡凡なる生活を離れて非凡なる人の偉大なり、超越せりといふ生涯に移らんゝ希つて居る。

然れど眞に偉大なる超越せる人格とは何か。高位高官か、富か學力か、或は體力を誇る者か。否否然らず、神は路傍の小石をもナポレオンとし太閤とし、桂太郎とし太刀山となし給ふのである、我等の價値は、如何程神の御旨を現世に顯はし神の國を擴張するかにある。職業の種類何物ぞ、都會と田舍と何の差別かある。富と貧と有爵と無爵と何の異同かある。學者と無學者と何の區別かある。我等は神の前に一介の平民として一個の神子となれば足るのである。我等はナポレオンを偉大なりと思は

ず、されど草深き田舍に、神のために人知れぬ愛の行をなし、此の世を神の國と爲さんがため日夜熱禱を天に捧ぐる一老婦ゝは一青年を偉大なりとするものである。―湖畔　大正三年八月號―

二

私は近代の人があまりに智識的になつて、理一法で何物をも解決せんとする樣を見て、危險なる時代であると思ふ。

日本人は餘りに智識を追ひ求めた結果、眞の人として成功したるものの少い事を思ふ。

人は頭腦のみで救はれるものではない、宗教を知る事と行ふ事とは別問題である。更に知る事と喜んで行ふ事とは雲泥の差がある。

意志と感情と知識は、何れに偏しても圓滿な事ではないが、少少智識は時代に遲れるとも先天的の白痴でない限り、神より受けたる吾等の良心は活動して止まぬ事を思ふ時、其の良心の聲に强烈なる意志を以て從ひ、苦痛多き事も、美しき喜ばしき感を以て斷行するならば、世界は神の國となる事が早いのであると思ふ。

『此の言は智者と學者に隱しかへつて幼兒に顯し給ひしを神に謝す』とパウロはその深き實驗を以て言つたのである。

『智識は人を驕らしむ、然れど愛は德を建つるもの也』とか、『若しみづから智しといふ者は未だ其の知るべき程も知らざる也』とは實に現代の吾等日本の同胞に悟つて貰ひたい言である。キリスト敎は、意志と感情を、智慧以上に置くべきものとする。

瞑想三年、坐禪二十年の工夫も、愛の行一つに及ばぬのである。

吾等は冷かなる哲學者たらんよりも、神を愛し人を愛する、强き良心と、堅固なる意志と、美しき感情の人たらんと思ふ。

『智者安(いずこ)にある、學者安に在る、この世の論者いづくにある、神は此の世の智慧をして愚ならしむるに非ずや。』―湖畔　大正三年九月號―

宙返り飛行家ナイルス氏と語る

鳥人ナイルス氏と語つて見ると、その快活な飾り氣のない平民的の調子に誰も引込まれないものはあるまい。一月二十九日の午後四時過ぎ、八日市飛行場で握手してから其の夜の更けて十一時にも近くなるまで、私は空中の征服者と續けざまに語つて感興の盡きざるを覺えた。飛行家の實歷は不斷の冒險譚で血の沸くを覺えずに聞くことは出來ない。

昔から寢てゐて聖人となつた人はない、成功者の生活には必ず普通人以上の努力がある。

明治二十二年米國紐育州ロチエスター市に生れた我等の鳥人ナイルス氏は、其の家は富み順境に成長すべきであつたが、幼い時に父母を失ひ孤兒の悲しみをなめた。コルネル大學に勉學中飛行家たらんと志し、親族と意合はず、遂に決する處あり、學業を廢してボストン市へ脱走したのはまだ十年足らぬ近い昔の出來事である。

華かなる大學生活より自動車製作所の一職工、一週四弗の支給を受くる安勞働者と化した青年ナイルスは、立志傳中の雄であらねばなるまい。初め彼は飛行機の製作に熱中した、その貧者の生活に於て郵便切手一枚買ふのにも小首を傾けたと、本人は私に話した位である。その一個無名の青年は同好の友三人と組合ひ、四年の苦しき克己の月日に一臺の飛行機を完成した。飛行機はあつても空中に雄飛するのには飛行家を要するのである。四人の青年は飛行家ではなかつた、或日彼ナイルスの友なりと言ふ肥大の男がその飛行機に試乘した。そして美事目の前の林檎の木に衝突して、機體と發動機は粉碎した。此の一事は思ひ出の深い一幕であるとナ氏は語つてゐた。

屈せず撓まざるは成功者の要件である。ナイルスは其の後數年バス市に勞働して後、貯金を以て飛行學校に入つた。其の業を了へて後今に至るまで數年彼の奮闘は目覺しいものであつた。宙返り飛行の妙技を得て空中にその自在の巨腕を揮ふに至つて彼の名は全米に轟いた。『私の成功は全く私の信仰と禁酒禁煙及び清潔なる身持の結果であります。諸君如何なる職業にあつても現代の成功者は私と同情同感であります。』とは、同氏が近江基督教傳道團の聖書講義會で、二十餘名の青年に與へたる教訓に實驗談の中の一句である。

更に彼は頭を兩手で押へて下向きになり、如何にも謙遜で熱心に

『諸君、酒は人を馬鹿にしますよ、煙草は手が震へるやうに神經を害します。飛行家は禁酒禁煙で性慾の節制をしなければ墜落あるのみです。私の知人飛行家は飛行機體より下りると、身體一面の汗で手なんか字を書くことが出來ぬやうに震へてゐます、それは酒の結果です。』

ナイルス氏は宗教を有してゐると語られた。飛行中に發動樣の故障に出會ひ、幾千呎も落下して來る時に、自分は神と共に歩むやう出來得る限りの力を盡して居るから、何時この世を去つても神の御旨なれば喜んで墓の向ふに行くのであると語つた。

安全第一と冒險第一

米國の鐵道、電氣事業、機械製造業其の他より年年出す處の死人、負傷者の數は驚くばかり多數であつて、私が歐洲から米國に到着した時、紐育は何故あんなに片輪の人間がウヨウヨして居るのだらうと、小首を傾けたものである。處がよく觀察すると、世界で米國ほど機械を澤山使ふ國はなく、新

進の製造國であり、勞働者は家庭的の人間でなく、濡れ手で粟の冒險青年連だから堪らない、怪我をするのは當り前だと思つた。

處へ大正二年頃より、安全第一と言ふ題の記事が各有力雜誌や新聞に出て、電車でも汽車でも船でも、或は名所でも「安全第一」と書いた赤地に白文字の札が掛けられて、私共の眼につく廣告のうち、最も忘れ難いものとなつた。交通機關の安全第一は人命を重んぜよといふ聲であり、臺所の安全第一は、日本の「火の用心」の格言であつた。安全第一は結構な言葉である。近頃の我國に、この言葉から安全第一主義だとか、信用第一、實用第一、とか言ふ言葉が流行するやうになつた。

今の遞信次官內田嘉吉氏が歐米旅行より歸られた時、私共は富士の裾野の或る集會で此の安全第一の話を拜聽した。其の時の集會は冒險を喜ぶ青年の群のためであつたので、或る大學生が後から腕を振うて壇上の人となり、吾輩等は安全第一に反對する、そんな長椅子に横になつて居るが如き安全を人生の第一とする思想を以て世渡りをする事は出來ない。宜敷危險第一、冒險第一を叫びたいのである。困難を通過して始めて人生を味ふのである。といふ意見を述べて喝采を博した。その時私は安全第一と冒險第一の關係に就いて考へたことがこの文となつて、湖國の諸賢に見ゆる次第となるのである。

人情として、私共は安全を希ふものである。走つてゐるよりは立つて居たい、立つてゐるよりは坐つてゐたい。更に增長して坐つて居るよりは寢てゐたいと思ふのである。そして動物の本能は腹に食物を詰め込んで、すぐ快眠を貪るのであらうと考へられる。

私共の手紙に昔はよく、無事消光罷在候とやつたものだ。無事泰平を喜んだのであるが、私共の心の一方に、有事泰平を求むるものあるを打消すことは出來ない。

何もする事がない生活よりも、大いに活動する有事の生活を希ふのである。二十世紀の今日まだ私共が手紙に、無事消光なんかを書くやうな馬鹿らしい考へは止めねばなるまいと思ふ。

暑中休暇に日本アルプス行と富士登山が流行となるのは何か。それは、人は常に安全第一のみを要求しない事を告げるのである。私どもは安全第一にして危險第一の爽快なる冒險を喜ぶものである。

人生は冒險である。今年の洪水は大阪附近の百姓と湖邊の農民諸君には、豐年の喜を一晩に變へて、家藏が流れ、田畑が砂地と早變りして、一年の正直な勞働を全く水泡としてしまつたものである。百姓ほど儲けが少いかはりに慥かな職業はない。然し春種を播いて秋の收穫を苅入れるまでは、非常な冒險である。

考へて見れば人生の事は皆冒險である、やり損ふと病氣になつたり、事業に失敗する。貧乏は容赦しないで寄せて來るのであるから、世の人は何とかして安全な世渡りをしたいと思ふ。然し今一歩深く社會を見ると、安全な世渡りのみを人生の目的としてゐる人は怠惰者であつて、人と生れては、何

か後世に名を遺すやうな事をしたい。卽ち功名心があり、冒險心がある。

そこで私共はこの人生を樂しく又生甲斐あるものとして渡るには、冒險を安全にやつてのける術が必要なのである。

死ぬるか生きるか、九死一生と言ふが如きは人生の冒險の最も大いなるものであつて、危機一發に生命を得た時は、天にも地にも變へられない喜びを感ずるのである。ロビンソン、クルーソーの漂流記や、日本の武勇傳が多くの人に喜ばるるのは、此の消息を語るものであるからである。

人生、死を決して事に當る程强い力はないのである。戰爭の場合のみではない、其の日常の業務を執るに當つて、決死の覺悟、又は文字通りの一生懸命があつたなら、非常な强味のある世渡りをすることが出來るのである。大悟徹底の人、といふのは死すとも其の天職のためならば滿足也とする人を言ふのであつて、此の決死の覺悟が實は、此の人生を樂しむ第一の要件である。

その己のために生命を得る者は之を失ひ、我ために（神＝正義のために）生命を失ふ者は之を得べし、とキリストは宣うたのであつて、最も健全な人生觀を與へ、神のためには其の生命を捧げんとする大決心を固め、しかも心のうちは大安心にして平和の氣に滿ち、外は如何なる人生の冒險も喜んで之を決行する人が眞のクリスチヤンである。

そして、その眞の基督信者は、安全第一にして、此の世の冒險第一を敢てするものである。

眞の人生、樂しき人生、生甲斐ある人生を送らんとする者は、どうして基督信者にならずに世渡りが出來るだらう。記者は、信仰のない同胞が其の日其の日を送つて居るのを不思議に思ふものである。―湖畔　大正六年十一月號―

地球上の生命と永遠の生命

信長は人生五十年と考へ、大隈侯は人生百二十五年と說き、生物學者には人生二百年說を主張する者もあります。然し鎭守の森に三百年の大杉あり、深山に一千年の楠があつて、智慧に誇る人間共の短い命をアザ笑つて居る有樣を私共は何と見ませう。

植物の生命や鶴や龜の長命を羨むやうな人間は、愚に毛をかけねばなりますまい。大隈侯は去年の重病の癒えた此の頃、百二十五歲說より奮發して『我輩は永遠に生きるのである。』と叫ばれたと洩れ聞いた。私は床しく思うたのであります。

忠孝の道、夫婦の和、朋友の信などを考へて、努力して居る私どもの生命が庭先の紅葉の樹に及ばない筈は絕對にないのであります。

肉體は私共の地球上に生存する借り家でありまして、肉體の土に歸るのは宿替であります。地球上

に修養を積んだ生命がその舊い家を捨てて、新しいよい家に移るのでありまして、『われらが地にある幕屋（テント又は家）もし壊れなば神の賜ふ所の家天にあり』と聖書にあります。

生れたての赤ん坊の心と八十の老翁の心とは大變に違つて居ます。老人は尊とまるべき筈のものです。其の譯は長い人生の旅にいろいろの經驗を得て賢くなり清くなつてゐる筈です。そして順當に行けば老人は最も豐富なる生命を以て此の世を去り死後の新生命に入るべきであります。處が今の世は老人を厄介視し又馬鹿にします、老朽と申します。それは老人が罪のために尊敬さるべき寶を捨てて來たからです。六十歳位まで勉强を續けて始めて人を教ふる資格が出來るのではありますまいか。

『我儕が外なる人は壊るるとも內なる人は日日に新なり。』とは何たる雄大な言葉でありませう。肉體卽ち外なる人は老朽となるも精神は益盛となる生活に於ては、長命なる程豐富なる靈界の人となると思ひます。

『爾等は神の殿にして神の靈なんぢらの中に在すことを知らざる乎』 健全なる肉體は實に神の殿堂であるとあります。キリスト者が禁酒禁煙を叫ぶのは此の理由を以て肉體を長命せしめ、靈界に入る時最も豐富なる精神を準備しておきたいからであります。

『健全なる身體に健全なる精神宿る』 とギリシヤ人中の一賢人が言ひのこしたとか申しますが、それは問違ひで『健全なる精神に健全なる身體宿る』でなければなりません。肥太つた相撲取は必ずしも品行方正ではありません、精神的に缺點がありましたら花柳病にかかります。一時的の健康は役に立ちません。健康の根底に確かな精神があつて始めて眞の健康なる身體を持つことが出來ます。永續して天壽を全くすることが出來るのです。―湖摩　大正七年六月號―

新年はお目出度う

私は一月元日を以て三十歳となります。そして實際は二十八年と九ケ月に少し不足致します。三十歳は主イエスが公生涯に入り給うた年で、私の父の死んだ年より僅かに三年前であります。私は自身を省みてまだ三十歳の壯年に達したとは考へたくありません。まだそれまで一年と三ケ月を殘して居ます。そしてその間に大いに修學修養したいと思ひます。

さて考へますと日本人の年勘定程不精密なのはありません。二日の赤ん坊が二歳であつたり、十七の娘が十九歳で通つたり致します。今や世界は非常に正直に且精確を尙びます。飛行機の發動機の或部分の如き、一寸の一萬分の一まで勘定して作つてあります。晝の三時朝の三時と言はずに只三時とか十五時といふ時が來りつつあります。私共も人生の旅路に其の歳を精確に且正直に見且發表したいものであります。

新年と共に飾らぬ私、正直な我、精確な自己を見且反省して、今年は大いに神により實力を增し、世界の人として實益を世界に行ひたいものです。

ついでに年號といふものも大正八年と言はずに紀元二千五百七十九年、キリスト降誕後一千九百十九年と、後世の人に迷惑のない精確な事を言ふやうにしたいものです。『小なる事に忠なる者は大なる事にも忠なり』

預り物と私の物

祖先傳來の財產で事業を起す人があります。戰爭のため、不慮の收入があつて學校を建てる人があります。世間はこれらの人の名を傳へ合ひます。私は勿論結構な事と思ひますが、私は獨立獨歩人生の戰場に正義の戰利のために惡戰苦鬪しつつある中流人士が、一圓、五圓の金を慈善に或は宗教宣傳のために寄附した金とは比較にならないと思ひます。

世の中の富、地位、名譽もその根源を調べますと、白く塗つた墓で中は腐れ果てた骨ばかりではありますまいか。

私共の所有だと思つて居るものは、實は預つたものです。神はいつでもその預けておいた金でも名譽でも地位でもお取り去りになつて、赤裸裸の私共となさる事は容易であります。雨を三日降らすれば田畑も川になります。五分間の地震で高壯な煉瓦作りの洋館も廢墟となります。堂島と北濱の取引所の半日は何百萬圓の株券や利益をフイにしてしまふことがあります。この點より考へますと大阪の公會堂の寄附者岩本氏は豪いと考へられます。即ち一番澤山預つてゐる最中に世のためにその財產を投げ出しました。

嗚呼我我、今神より預つてゐます才能、財產その他を神のお引出しになりませぬ間に、思ふ存分世のために使ひたいものであります。

神はその我我に預けてお置きになるものが世の中に益となりつつあるのを知られますと、更に多くを預け給ひます。

言ふ事を止めよ、富は我物なり、才智も私のものなりと。全部神よりの預りものです。眞の我物とは即ち何でせう、今世にありては自己の精神と肉體のみではありませんか。—湖畔　大正八年一月號—

信仰の冒險

人生は冒險であります。新しき明日は未だ人跡絕えてなき處女國であります。

人生は開拓であります。開闢以來斧鉞の入つたことのない大森林を拓くのと同じであります。

『門を出でた男には七人の敵あり』と昔の士は用意用心をしました。現代はそんな物騷な世ではあ

りません。然し私どもは次の一時間にどんな大事件が起るかを知りません。ルーテルは昔其の友人と散歩して居ました時、大雷のためその友が殺されました事件のため、宗教に入つたと傳へられて居ります。嗚呼、人生は冒險也と悟つた人は、既に宗教の門に程遠くないのであります。

冒險には勇氣が必要です、そして勇氣の根は信仰であります。天祐を信じた軍人は日本海の勝者でした　日輪の子也と信じた秀吉は太閤となりました。天を信ずるとか或は人間以上の或る力を信ずるとか言うて、私共より見れば漠然たるもの、その內容を知ることの出來ぬ或るものを信じた人が勇者であつたことを考へますと、私共キリストに依て傳へられ顯され給うた、天地の造り主、正義と愛の神、人類の父なる唯一の神を信ずるものは如何にも幸であります。

人生は奮鬪であります、奮鬪の根は體力と精神力を要します。むしやくしやした氣分の日、腹立てた後は能率が減じる。快眠休息せねば奮鬪は出來ません。人が罪を犯すのは疲勞した時に多く、夏の暑いイライラした日には殺人が行はれ易いのです。

奮鬪には冒險的精神を要します。冒險的精神は健全なる肉體を要します。健全なる肉體は崇高な精神がなくては保てません。

日常の生活に神信心が必要でないと斷言し得る方がありませうか。—湖聲　大正八年六月號—

不用意の用意

上州の長脇差國定忠次は、恐しい用意の行屆いた生活をしたといふ。彼は捕縛されることを恐れて、其の晩年の如き、彼の寢姿を人に見せたことはなかつたさうであります。或時は物置に、或時は押入の中に、又或時の如きは天井の裏に其の身を隱して寢たのです。そしてその床の中にある彼の姿は、脚絆手甲をつけて草鞋を穿いて、大刀を枕元近くに置き、三日分の辨當を用意して寢たといふに至つては、私共は彼の用意深いことを思ふよりも、一刻も休まれぬ不安の心を憐れむのであります。用心の極致まで實行した彼忠次も遂に捕はれてお仕置獄門を免ることは出來ませんでした。

用心用心と申しましても、私共人間である以上は必ず失敗することがあります。私は今この事を人格上の問題として考へたいのです。

重大な事件になると、『固くなる』と言うて平常の能力を充分出すことの出來ぬ事、驚かされた時殆ど我身を忘れてしまふこと、腹の立つ時前後を忘れることなどを考へて見ると、私共の毎日の生活が、用心と注意といふ鍍金細工のやうであることを思ふのです。常に注意注意でヤツトその日を無事に過すが如き生活より、私共は一歩を進めなければなりません。道德、倫理は注意用心の鍍金術ではないでせうか。全體の私が、何處、如何なる時にも、卽ち不注意、不用心の時に常に用心あり、常に

定見と所信ある、通俗に言へば、腹のある生活に入りたいと思ひます。不用意の中に用意のある、全人格の圓滿なる發達は我等の目的であります。―湖畔　大正八年七月號―

天　下

老人の天下か

清浦さんが大命を拜して内閣を組織された日であつた。私はある米國婦人、しかもまだ三十に足りない方と、三等車の腰かけの向ひ合せに坐つてゐた。

『いよいよ清浦内閣が出來ましたよ。』

と、私は新聞を讀みながら、その婦人に話しかけた。

『ああさうですか、日本には内閣を主宰するのに、もつと年取つた老人がないんですか。』

私はこの皮肉に恐入つた。もつと年取つた老人がないかとは餘りの鋭い詭辯である。

老人、老人、老人の天下、日本には本當に偉大な青年は居ないのか。

レニンは五十五歳で死んだ、が一代の豪傑らしい、ムツソリニも若い。

私はムツソリニやレニンに何の關係もないが、日本にもつと世界的の人材の出て來らんために祈るものである。

内閣の總理は劇職である。或る意味から考へると、年取つた老人が乘り出せば結局生命を縮めるのである。大隈侯も若死したのだ(百二十五歳より考へて)。寺内さんも加藤さんも、國家のためにその生命を短縮した。激烈な生涯に入つたのに違ひはあるまい。

文字通りの一生懸命で事に當る老人は、野心ばかりの若者よりよい仕事が出來るはづである。私は老人の天下必ずしも悲しむべきものでないと思ふ。

要は、筋道の通つた國民全體の向上と利益とを計つて貰ひたいのである。大義名分を明かにして欲しいのである。

我等、キリストを信ずる者は、我大和の國が理想的の國家となり、世界の榮光とならんために努力し且祈るものであることを告白する。

新聞の天下か

大阪毎日新聞が一日に百十餘萬部の印刷をして、日本全國より朝鮮、支那に臺灣に樺太にその勢力を延ばしてゐる有樣は、一種の壯觀である。部數を誇らない大阪朝日新聞も數十萬は勿論發行して居ることだらう。

今の世は、新聞の天下のやうである。全國の新聞が一時に發行を中止すると、社會は暗黑になると

人は言ふ。さうすると新聞は、逆に考へると、社會の光とでも言はれてゐるやうなものだ。

ところがこの社會の光たるや、甚だ怪しい光であつて、有毒な光線が隨分あるやうで、新聞の光で社會を見る時は、餘程の用心が要ることになる。

『新聞は商品』だとは資本主義の天下の正直な告白である。何でも商品として黃金第一にしてしまふのが近代の弊である。

讀者を多く作る、卽ち商品を多く賣るのが目的だから、興味本位で記事や報道が變態的なことに集中され易い。

勿論同じ新聞の中に、私共讀者に無くてならぬ日每の糧や、有益な光線が輝いてゐるのは事實である。

そこで新聞の天下に生活する私共は、その善惡、益不益混合の光線を、取捨して讀まねばならぬことになる。

『極樂で金箔塗られた佛樣になるのは退屈すぎる。僕は地獄でもよいから、鐵棒を振り廻したり、針の山に雪中登山をしたり、血の池に遊泳したいものだ。』などいふ考へは、普通一般の人が如何に靜的な善より活動的な惡の事件を讀みたがるかを悟らしむることである。

ミルトンの失樂園で、惡魔の唄つたやうに『俺は神に叛く者だ、神は惡の中に善を發見しようとするが、俺は善の中に惡を發見するのだ』といふやうな事がある。

そして新聞紙に見る惡口や批評や特種三面記事は、善事を小さくして惡事を誇大に書く場合が多い。

それから例の廣告である。よくもあんなに人間が墮落し得るかと思ふ程な廣告が、堂堂と一ページを占有したりして居る。

私は新聞紙を見る時に自分の眉につばをつけることにしてゐる。

本當に、確乎不拔な人生觀がないなれば、新聞紙に禍されて、社會がだんだん退步する（道德的に）と感ずることだらう。われわれは少くとも世の中に、新聞紙の光線を受けて、その眞僞、善惡を色分けする事の出來るプリズムとなりたいものである。—湖畔　大正十三年二月號—

近江のポーロ

ある五月雨の降る朝だつた。ガラリヤ丸のエンヂンの響は消えて、デツキに落ちる雨粒の音が烈しいのに目を醒すと、まだ船は湖の眞中に居る樣子だつた。

ポーロ船長の計畫では、たしか昨夜の今津集會のあと、十二時過ぎから一寢入りして、未明の四時

出帆といふのだから、もう六時半も過ぎた時分、長命寺の岬も程近いだらうと思ひながら、私はキヤビンから寢衣のまま、エンヂン室を通つて船尾のコックピットに出て見た。が、ボーロ船長は姿を見せない。デツキだらうとのぞいて見ても居ない、それに機關士西澤君も居ない。

狐につままれたと言ふ人の氣で、よく見ると、船は雨の中にピツタリ進行を止めて居る。五月雨が夕立のやうに烈しく落ちて來る。

突然、船首の方に、オールの音が聞えて來た。クラツチに響くあの悠長な音、ガタリ、ガタリ、ガタリ、ガタリ。

私は雨よけをまくつて、雨に煙る湖の面を見た。そこに小さい曳船のマーサ、ゼーンに人影二つ。

ボーロ船長は十五噸のガリラヤ丸を、長さ九尺幅三尺弱のボートに綱をつけて、西澤機關士に舵を取らせ、自分の二つの腕にまかせて、沖の島の遙沖合から湖上五里ばかりある近江八幡の浦へと、曳いて行く最中だつた。私は吹き出した。

『ハロー、ボーロさん、エンヂンの方があんたの腕より力が強いでつせ。雨の中のボート獨漕はよして、エンヂンを修繕して下さいよ。今晩までかかつたつて、その方が早いですよ。』

ボーロ船長は、體量二十三貫。さすが數年前まで、プリンストン大學の角力部に於て、名ある闘士の一人だつた巨腕の人である。もう既に何哩か曳船したと言ひながら、もう一度機關を修繕する事に同意して、ニコニコしながら西澤機關士を引つれて、ぬれ鼠になつて本船に歸つて來た。

そして、雨の中三時間立往生した後、とうとうエンヂンが動き出してその日の午後、長命寺の岬を廻つて、八幡城跡を廻る運河を通つて、無事に本壘近江八幡町に一行は歸つて來た。それが傳道旅行に行つた或る日のエピソードである。

私はボーロ、ウオタハウスの肖像に、運、根、鈍、の三要素中、根とどん（うす馬鹿といふ意でなく、スロー、バツド、ステディ、牛の如き堅實さの鈍）を發見して、一筆それを畫面にぬる事にする。文明人になるほど、この意味の鈍重といふ事が失はれる嫌がある。然し最後の勝利者は、この非凡な堅實さと頑ばりでもつて、最後の五分間をマスターするのだ。

聖書に『終りまで忍ぶ者は救はる』とある。ボーロ船長はこの意味で、クリスチヤンであつた。

× × ×

彼はプリンストン大學の文學士で、また宗教學を專攻して學位を持つてゐて、其の親父はアメリカ切つての別莊町、世界の樂土、田園都市の模範を以て知らるる常春のパサデナ市、市長として華やかな生活をしてゐる家に育つたボーロ、ウオタハウスの何處を押せば出て來るかと思はれる不思議千萬な蠻から風を、その肖像に一抹塗つて見る。

中江藤樹先生が、少年時代に母を慕つて遠く四國から歸つて來た時、雪のために危く命を落す處だ

つたとされてゐる西近江路のある寒村での出來事である。地上に雪は二尺位一面に堅くなつた銀世界である。ただ縣道には人の歩みで一尺五寸位の、比較的雪の踏み固まつた雪を道として、薄暮を過ぎて夜の幕の降りた頃、三つの人影と、三つの自轉車の影が、黑ずんで走るのが見えたことであらう。

眞先は吉田だ、その次はボーロだ、そして殿(しんがり)は武田牧師である。

『ボーロさん、もう自轉車はよして引張つて行きませうか。だいぶんすべりますよ、自轉車博士のウオータハウス先生だつて、もう背中の幻燈機が物言ふ頃でせうよ。』

その日、ボーロ、ウオータハウスは、背廣の服の上に着古した外套二枚を重ねて、まだその上に背中に子供を負ふやうに大きい幻燈機を荒繩で縛りつけて、烏打帽を冠つて大きい皮の手袋をはいたまま、ギアの大きな米國製の錆びた自轉車を飛ばせてゐた、イヤ、すべらせて居たのだ。

『ワタシは、』ボーロさんはきつと、ワを小さく發音して、次のタを馬鹿に大きく言ふくせがあつた。

『ワタシは大丈夫です。自轉車引張つては、今夜の集會に間に會ひませんよ。』

武田牧師の消えさうな瓦斯燈は、チラチラ半町後に見えた。

私達三人は兩側田甫の道から上り阪を越えて、川を渡つて下り阪をすべつて行つた。雪はだんだん深くなる、自轉車は危險で冷汗を流しつつ急角度の途を左に廻つた。

『バサツ』

私は飛び降りた。そして雪の中によろけながら後を見ると、ボーロさんが居ない。土手の下に黑い影があるので、瓦斯燈を外して見ると、まつ逆樣にボーロさん雪の中に頭を突込んだまま、背中の幻燈機が動いてゐた。イヤ大變だ、武田牧師が來られる。そして二人して二十何貫のウオータハウス先生を引揚げた。

『アハハハアハハハ、今日は博士も落第しました。』

といふのが、ボーロさんの挨拶だつた。

その晩だ、武田牧師がしんみりと、

『吉田さん、私は今晩のやうな旅行は、一時間に百圓の手當をやるから賴むと言はれても、決して決してしませんよ、ただ神の國のためといふ一念だけで、こんなことも愉快にやるのです。』と話された。

× × ×

近江の冬の美しさは、近江の雪を見たものの誰知らぬ語り草である。比良の暮雪に、薄桃色の日光が照つてゐる時、或は純白になつた伊吹山の上空に、コバルトに綠を混じたやうな明るい日本晴の上空の顯れる時など、何とも言へない。それに、虹のよく出る湖上の景色、時には二重の虹が完全に相

重つて、彦根や安土の城跡の前に、七色の門の如く浮き出して來ることがある。造化の妙、彩色の極致だと誰もが言ふ。

或る冬の話である。水戸の宣教師B氏夫妻の訪問があつた。一つの美しい冬の湖の景色を見ながら、ある湖上の小島を訪問して、浦人達に福音を語るのは、何といふ愉快な事だらうと衆議一決。即ちボーロさんは金筋入の船長帽を冠つて、ガリラヤ丸の舵を取り、船客としては、ヴオーリズ父君夫妻、メレル、ヴオーリズさん、B氏夫妻、吉田りう子姉及記者に船員達が乘り込んで、その湖上の小島に向けて、最も愉快な航海をして行つた。油を流したやうな靜かな湖面に漣一つも立たない。ただ船尾のスクリウの廻轉した跡に立つ浪の姿だけが動いて居るやうに見えた。

行手の小島には、瓦葺や藁葺の家が一列に湖岸にその美しい影を寫して立並んでゐる。我ガリラヤ丸の近づくのを見て、子供が兩手を高く擧げて走つてゐるのが見える。

近寄つて見れば、皆いつにない奇麗な姿をしてゐるので、その日はお正月の十五日であることを私共は知つた。

湖岸の石垣の上に大きい焚火がしてあつた。そして、消防隊の出初式といふので、紺のハツピに赤筋の入つたのを着た若者の一團が、年酒をあふつて、皆一樣に、ホンノリ桃色の顏をして、私共のガリラヤ丸の近づくのを見てゐた。

いよいよ岸についた。ガリラヤ丸は船尻を石垣に繫いでエンジンを止めた。

大勢の子等が、ワアワアと珍らしげに兩手をひろげ、口をあけ、鼻汁を落して集つて來た。

早速ボーロが、デツキの上に昇つて行つて、力强い聲で、

『皆さん、神樣の歌をお聞きなさい。』

と言つて、米國式の日本語さんびかを聞かせ、それから簡單な演說をした。

私もその後で、『迷信打破、天地に唯一の神あり』といふやうなお話を始めた。見ると集つた兒童の數は百名位もあつて、石垣の上、石段の上に黑山のやうになつて居た。二三分大きい聲を出したと思ふ頃、聽衆の後より、

『ドケドケ、ドケドケ』と怒聲をして後鉢卷した消防隊の猛士達がやつて來た。そしてドシドシと私の立つてゐる傍から總計十六名、船尾のデツキや船室の入口に充滿した。

『コラ、糞！　コラヤイ赤鬚！　コラ貴樣は日本人カイ、生意氣なことさらすとドヤスゾ！　コラキリシタン、赤鬚、ナグレ　ナグレ。』

と言ふ豪傑が私の前に白眼赤眼をむいて見せた。

ヴオーリズさんを見ると誰かに押されて、クルクル廻つてゐる。「コヅキ廻す」といふ手にかかつてゐる。

B氏は本當の赤髭の老紳士で、頭は光つてゐる。その老人を兩手ともつかまへて、『ヤイ、コラ、赤髭！　しやれたことさらすなよ、早く消えてしまへ。』

とやられてゐた。

『オイ、君、俺等は船見に來たんやぞ。さあ早く戸をあけて、毛唐の嬶を拜ましてくれ。』

と、不良相な中年者が私に談判を始めた。私は眼鏡を外して船室の蒲團の上になげた。外套の襟を立てた。鳥打を眼深に冠つた。それは、なぐられる用意だつた。そして船室の戸の前に立ち塞つた。

ヴオーリズさんは優しい人で、見るも可愛さうにクルクル廻されてゐる。B氏は何か議論してゐるやうだつたが聞えなかつた。ボーロは身輕に甲板から姿を消して居ない。群集はワイワイ岸に騷いで居た。

『この喧嘩俺が買つた。サアサア皆待つてくれ、待つてくれ。』

と、人波を押しわけて、小頭とハツピの襟に染めぬいた一人の若者が、又船尾へ飛び込んで來た。

『もうやめとけよう、今日はお正月の十五日や、島に上つてくれ、俺が引受けたから。』

萬事引受ける、引受けるといふと、今までの十六人（人數はその中たしかに私が數へてゐた）が、ぽつぽつと島に上つて行つた。

『異人の女は出て來ないなあ。キリシタン、ヤソと赤髭とアメリカ歸りの奴ばかりやぞ。』

小頭は私に談判を始めた。

『どうしたんです。屆けなしにこの石垣でヤソの話なんかやめて下さい。今日は皆氣が荒いから早くいんで下さい。私は後の始末をしますから。』

と言うてるうちに、ボーロが船の綱を外して、エンヂンは爆音を立てた。そしてガリラヤ丸は、この小頭を乘せて靜かに動き出した。すると突然、岸から小娘の金切聲が聞えた。

『お父つあんよう、船が出ると捕虜になるぞ！　早う早う、早う島に上つてよう、早う早う。』

船は二尺三尺と島を離れる頃、小頭は身輕に島に飛び上つた。そしてガリラヤ丸はずんずん沖へ向つた。陸から聞えるどなり聲は、

『こら、ガリラヤ、こら、ガリラヤ、暗の晩もあるぞ、もう一ぺん來て見い、尻に穴あけたるぞ。』

琵琶湖は騷動を知らない、靜かなことは又別天地のやうであつた。

比良の暮雪は如何にも美しく、明神崎や、小松や、竹生島ははるかに、ガリラヤ丸を見送つてゐるやうであつた。

船中では、

『今日は一つ、パンパンとやられるのだつたが、まあ大したこともなかつたですね。』

といふと、ヴォーリズさんはゲラゲラと笑つて居た。そして、

『私はくるくる廻つてゐました。メリー、ゴーラウンドでした。』というた。

ボーロは沈默して舵を取つた。B氏夫妻は、愉快な經驗だつたと馴れ切つたやうに言ふて居た。

婦人達は少し神經を鋭くして、青い筋が顏の皮膚の下に見えたが、八幡町につく頃は消えてしまつた。

それからその島の路傍傳道は、時機の來るのを待つてゐる。そして傳道の印刷物は、どんどん島の青年に讀まれた。

聖書には『神を信ずる者には凡ての事働きて益をなす』とあるのを實驗した譯なのだ。

—湖聲　大正十三年三月號—

山田警部山田牧師山田老人を想ひて

『予ハ偶像崇拜ノ家庭ニ成長シ毎朝夙ニ起キ佛壇ニ香華ヲ手向ケ跪キテ朝參暮拜ヲ怠ルコトナク致シテ現世ノ幸福ヲ祈リ來リシ家柄ニ育チタル、モノニ有之候

嘗テ明治十六年、西ノ宮ニ奉職ノ頃（警部さんでした、記者言ふ）戸川安宅、松山高吉ノ二氏ヨリキリスト教ヲ傳ヘラレシモ頑硬耳ニ入ラズ。偶々其頃大阪川口ニ於テ、マルチン・ルーテル四百年祭大演說會アリ。時ノ辯士宮川先生ハジメ澤山、古木、松山ノ先輩諸氏ニシテ之ニ和スルニ女學生洋洋、讃美ノ聲ト共ニ嘲哢タルオルガンノ音ヲ聞イテ一層ノ感ニ動カサレ會會無言ノ警鐘、我心ニ響クヤ、昔年ノ迷夢忽チ覺メテ斷然決心、松山牧師ヨリ受洗セリ。時ニ迫害大ニ起リ已ニ兵庫縣廳ニ於テ種種物議ノ末內諭ヲ下シテ曰ク、基督教ナルモノハ外教ニシテ我國體ニ抵觸ス。其身苟モ警察官ニアルモノニ於テハ決シテ之ヲ信ズベカラズ、速カニ廢信スベシ。若シ自由行動ニ之ヲ信ゼント欲セバ直チニ其職ヲ辭スベシ。決シテ信職兩ツナガラ全フスルコト能ハザルナリト。抑抑、予ガ斯教ヲ奉ズルハ世ノ頹敗ヲ矯メ赤誠其職ニ忠實ナランガ爲ナリ。官其微衷ヲ察セズ僅カニ區區タル其名ヲ嫌ヒテ宗教自由ノ大道ヲ過ラントハ惜ムベシ、官其宜シキヲ失ス。飽マデ抗辯其道ヲ開カント謀リシモ事用ヒラレズシテ遂ニ勇退スルニ至レリ。此時神ハ同情ヲ以テ予ヲ慰メテ曰ク、

人ハ『パン』而已ニテ生ルモノニアラズ、唯神ノ命ニ由ルベシト、又曰ク

人ハ全世界ヲ得ルトモ其生命ヲ失ハバ何ノ益ノアランヤト

策勵セラレテ大ニ力ヲ得タリ。爾後微カニ信仰ヲ護リ居リ、明治二十一年三月多聞教會ヨリ傳道者ニ聘セラレシモ、予ハ格別專門神學校ニ入學ノ素養ナケレ共只神命ノアル處辭スル能ハズ、起ツテ其命ヲ謹奉セリ。數年間教會ニ働キシ後、出デテ但馬、豐岡ヲ始メ、西播、山崎、姫路、西宮、大津ノ諸

教會ヲ經テ目下北韓、平壤荒凉ノ野ニ戰ヒツツアリ』

と讀み上げて、山田傳道師は、按手禮の試驗に集合した大勢の古參牧師を見廻されました。それから、山田さんの信仰の內容に就いての質問があり、又答辯があつて、山田さんは其席を外されました。

『今の山田君の答辯で、按手禮をしてよろしいか。』

『もつと、山田君は、勉强するやうに言うて按手禮をしたらよろしいと思ひます。』

『あの常識一點張りの信仰ぢやあ仕方があるまいと思ひます。』

『なあに長年の經驗が物を言ひます。山田君の經歷は、奉敎三十餘年だから、大丈夫ですから、按手禮をしてよろしいと思ひます。』

と言ふやうな會話があつて、山田さんは再び牧師達の前に來られ、そして、フロツク、コートばかり、三四十集つて、黑山が山田さんの周圍に出來た。眞中に跪いた山田さんは、山田牧師になられたのです、それは明治の末年でありました。

皮肉な事には、その時山田さんを牧師にしました、按手禮の手を與へられた古參牧師の間には、後ある大事件が起つて、論爭となり分裂となり、或る人達は牧師をやめてしまひましたが、『もつと勉强すればよい』と忠告された山田さんは、それからまだ、二十年近くも。神のものとして、最後まで

牧師でありました。

長濱敎會の山田老人は、突然、四月上旬に、消化機關の破損から、會堂で起る大會衆の讃美歌の聲を聞きつつ、

『これが終りだ。』

と一言遺したまま、大聲一番、神のお許に旅立たれました。七十餘歲をとつた老人の死は、本當に靜かでした。

妻に先立たれ、子達の一人も生れなかつた山田さんの身邊は、全く無に歸しました。

私は、今、山田さんの大切な、古びた明治十三年版の大型の聖書と、四冊の、說敎や講演の種にせられた手帳を、机の上に擴げて居ります。聖書にはその七百五十ページの每ページに、赤インキで丹念に書入れられた註釋が、全聖書の、表紙から裏表紙まで、眞赤になつて、その每日の山田さんが、神の言を受けられて居ました記念を此世に遺して居ります。

四冊の手帳は、虫眼鏡で見ねばならぬ程度の細字で、五六百ページも逸話や、統計や、聖句の註釋や、演說の梗概や、金言や、又料理法の拔き書きが、眞黑に書かれ、朱點が到る處に入れられて遺つて居ります。

『ぼうふりや、蚊になるまでの浮き沈み。

でむしやまいまい登る富士の山。

鳥の巣や藁一本のそのはじめ。』

とあつてすぐ、朝鮮の人口の調査が書いてあつたり、

『ニコライ大主教ハ熱心ニ青年ニ讀書ヲ勸ムル人デアツタ。自分ノ「ライブラリー」ヲ開放シテ自由ニ書物ヲ持チ歸ラシメタ、而シテ其行動ガ面白イ。』

『〇〇サン、本ヲ讀ムニ色色アリマス。音讀、默讀、熟讀、ツンドク、シマツトク、ソシテ後ノ二ツヲヤツテハイケマセン。』

と、書いてあります。又、

『大傳道者ボーロノ教ニ感ジタル證據、第一、自ラ心ニ感ズ、第二、私ノ生涯ニ如此變化ヲ起シタルノハ萬民ニモ變化ヲ起ス力アリト信ゼリ、第三、福音ヲ傳ヘテ其結果ニ依リテ仍ホ信セリ』

など、果しなく、丹精に書き入れてあります。

ある日山田さんが、

『S知事、S知事と言うて、滋賀縣の知事で時めいてゐるが、あの人も僕も、同日拜命の兵庫縣巡査だつた。』

と話された事もありました。

私は山田老人と南江州の各地に傳道旅行をしたものでした。水口、日野、土山、それから信樂、深川、大原市場に、菩提寺へ、そして、山田さんの悠悠迫らぬ身だしなみ、花や月に憧れる一片の風流味、そして、

『人間は食ひ物に氣をつけねば、長生きしませんよ。』

と言ひながら、其書齋の机の上で、燒のりをならべて卷ずしを自作して、御馳走されたのを想ひ出して涙が出ます。

『山田先生、私もあなたのやうに、出來れば長生して、最後まで神の國の傳道者でありたいです。』と叫びたくなります。人の世に時めいたり、成功したりする事は、草の花の榮えです。

人生本來の目的は、神より與へられた、神の命令による、生甲斐のある一生を送ることであつて、そしてその最も高いことは、神の國の福音を多くの魂に傳へることであつて、我が山田老人は、それに一指を染めつつ現世を去られたのです。

今山田先生より、何千の人が神の命を吹込まれたか問ふ要はありません。ただ一生を通じて、發心の時より數へて四十有餘年、神の國の使者たらんことを心がけつつあられたことに、私は無限の尊敬と、感銘と謝意をのべたいのです。人類のために、

そしてこの一文を終ります。—湖聲　大正十三年六月號—

膏（あぶら）

まだ、私共の仕事が近頃のやうに忙しくない時分の事です。

キリストの教も、まだ不評判で、八幡町の青年會館はがら開きの時です。

Aといふ青年が、田舍から出たなりに、私共の家の勞働を引受けてくれて、コックさん、コックさんと呼ばれてました。

ある夏の日です、ヴオーリズさんが二階の食堂から、コックさん、Aさんと大きな聲で呼びました。

食卓について居たのは、米國より來たてのホヤホヤ大學生、フレッド、ソールン君と私とヴオーリズさんの三人でした。

『ヒエーイ』と階下から返事があつて、トントンA君が上つて來ました。

部屋の戸を開けたA君は、純白の上衣に洗ひたてのエプロンをつけて、帝國ホテルのボーイのやうにキリツとしてゐました。

それから食事の給仕をしてそのA君がうしろ向きになりました時、大變です、三人して一度に吹き出さずには居られませんでした。

A君は猿股だけして、上衣をつけ、エプロンを腰から下に纏つてゐましたので、うしろ向きになると、眞つ黑に日に燒けた人の脚（馬の脚ではありません）がまざまざと一糸も纏はずに、むき出てるのでした。

私の書かんとする話は、そのA君の事ではありません、その時居合した、フレッド、ソールン君の事を聞いて貰ひたいのです。

ヴオーリズさんが二度目にアメリカに歸つた時に、カリフオルニアのある大學の學生で、大學卒業前に、何でも日本に來て見たいといふので、數ケ月學校を休んでヴオーリズさんについて、はるばる近江八幡まで來たのが、ソールン君です。信仰の深い母親を持ち、本當に幸福なクリスチヤン、ホームに人となつたのが、フレッドです（フレッドはソールン君の名で、私はいつもフレッド、フレッドと呼び捨てにして親しくしてました）。父親は早く他界されたので、母親の堅い信仰の花としてフレッドは、誠に天眞爛漫のゼントルマンでした。

事件はヴオーリズさんの留守中、眞夜中に突發したのです。

一體私は、寢ぼけのたちです。今でも九時間も寢ませんと、一日だるい樣な氣がして、本當に恥しい程ですが、フレッドの居た頃は、特に身體が成長して居る最中なものですから、夜中に起されると、暫くは自亡自失する位でした。

ある、私にとつて氣持のよい晩でした。溫い床の中に、前後不覺に快眠して、泰山、崩壞するとも
この眠りは覺めじと思ふほど、寢込んでました。
搖り起す人があります。
何だか遠くで、私に訴へてる樣子です。私の身體の動搖が烈しくなつて、聲が耳の近くにガンと響
く時分に、
『ヨシダ、ヨシダ、アイアム、シック、タミエーク、ヴェリバッド、ヘルプ』
フレッドでした。
顏をしかめて胸を押へて、私のベッドの傍に立つてゐました。私は起きました。可哀さうに、フレ
ッドは宵から腹痛で、のたくつて居たのです。その頃、近江八幡町にはまだ電燈など氣のきいたもの
はありません。街は眞の闇で、皆は、提灯下げて往來してゐました。
起きて、石油ランプの火を大きくして、フレッドの部屋に行つて、今度はともかくもフレッドを寢
かせました。
『臺所に行つてお湯を沸かして、湯タンポを作つて上げよう。そして、お醫者を呼んで來るから、
暫く辛抱して下さい。』
と言ひながら、私は洋服を着ようとしました。

『吉田さん、プリーズ、祈りして下さい。私のお母さんは、いつもお腹の痛む時、頭に、膏を塗つ
て祈つて下さいます。そして、私はいつも、すぐ痛みが止るのです。』
私に、フレッドはお母さんと同樣なお祈りをして、直ちに腹痛の治療をせよといふ注文でありまし
た。私には、祈禱ですぐ腹痛を神樣に治して貰ふ確信はありませんでしたが、フレッドの目と、その
言葉は、本當に眞劍なのです。
それから、私は跪いてお祈りをしようとしますと、
『アンノイント、マイヘッド、膏を注いで祈つて下さい。』と言ふのです。
聖書の記事にある通り、
『爾等のうち、誰か苦しむ者あるか、あらば祈禱せよ。誰か喜ぶ者あるか、有らばその人讃美せ
よ。誰か病める者あるか、あらば教會の長老等を招くべし、彼等主の名によりて其人に膏を注ぎ之が
ために祈らん。それ信仰より出づる祈禱は病者を救ふべし、主これを起さん、若し罪を犯しし事あら
ば救はれん』（ヤコブ書五章十三以下）
私は膏は何だか知りませんでした。ユダヤの國のイエス樣時代の習慣は深く知りませんでしたが、
或はオリヴ油か、但しは、ナルドの油かと思ひました。
『早く膏をぬつて下さい、また、痛くて痛くて差込が來ました。アウチ、アウチ、』とフレッドが泣

きます。アウチ、アウチは、ウーム、ウームと日本ではうなる英語です。

私は臺所を探しました。膏も油の類の何もありません、困りました。

階上の部屋には、フレッドのうなりが聞えます。とうとう意を決して、私はフレッドの寢臺の傍に來ました、瓶に石油を入れて持つて來たのです。

『フレッドさん、祈ります、膏も頭につけて上げます。』と言ふて石油をポトリポトリとかけました。拙いアメリカ語の祈禱を私は捧げました。そして默禱しました。

『神樣、私はこの祈りが、てきめんフレッドに効能となつて顯れると言ふ信仰はありません。然しフレッドは眞劍です、どうぞ彼の祈りと純眞な信仰を受け入れて下さい。』

フレッドは、暫くしてすやすや眠りました。私も自分のベッドに歸りました。

その次の朝、元氣のよいフレッドは、チャンといつもの通りに早起して、聖書を讀んで、ヴァイオリンの稽古を初めました。私は睡くてたまりませんでした。

純な信仰の美しさに、私は今でもこの時の事が忘れられません。

これは、現今の青年會館の二階の寄宿舍での出來事です。

× × ×

十年の星霜は飛び去りました。

ある日、近江の療養院の一室に、臨終に迫つた、女子高師のSさんと言ふ婦人教授を、慰めるために訪ねました。

そして純眞の信仰の美しさについて、フレッドの話をしたのです。私が膏を見出すことが出來ないで、石油をかけた話をしますと、精も根も盡き果てたほど衰弱したS教授の顏は、見る見る美しい血色をたたへて來ました。そして心よい笑顏と、眞白い齒なみが見えましたが、兩眼は涙で光つてました。

『ありがたう、私は、キリスト樣を信じます、膏はいりませんから、祈つて下さい。』と。

私は本氣に祈りました。

その次の日、S教授は、主イエスに招かれて天國へ旅立ちました。私共はその亡骸を花で埋めました。

『吉田さん、不思議なことがありました。Sさんの死なれる日の朝、早くでした。うつつのやうに、眠から、Sさんがふと醒めて、（看護婦さん、膏はいりません、祈つて下さい）と仰しやりました。膏て何の事でせうね。』

この質問を、純白の制服をつけた看護婦より聞いた私は、感慨無量だつたのです。

―湖畔　大正十三年十二月號―

外套の話

今はもう、昔語りです。ヴォーリズさんも私共も、皆まだ獨身時代、勿論青年のホーム、八幡の青年會館の二階生活をしてゐた頃です、女の人は一人も私共の仲間にない頃です。

ある朝、八幡警察署の小使さんが、私を呼びに來ました。

明治の二十年代、歐化主義の盛であつた頃建築されたらしい、あの警察署の石段を上り、入口の硝子障子をあけて、恐る恐る署長さんの大きい机の前に、私は歩みよりました。何も問題にされる事をした覺えがないと考へましたが、その時は、警察署へ召喚されたことを、餘り氣持よく思ひませんでした。

『この人が、ヴォーリズさんと一しよに暮してゐる吉田といふ方です。』

と巡査の一人が私を署長さんに引合せてくれました。言葉つきが割合に叮嚀でしたから、一安心をして署長さんの顔を見てすぐ、私はなるべく鄭重にお辭儀をしました。

まあおかけなさいと署長さんは椅子をすすめて下さいました。いよいよ私も安心して、この調子では、惡い事のために拘引されたのでないと悟りました。

暫くして、

『吉田君、君は近頃、惡い所に遊びに行きはしないでせうね。』

『署長さん、惡い所てなんですの。』

『それは、その、あの遊廓の事です。』

私はその時目を圓くしたのに相違ありません。幸にも私は、生れてから、まだ酒と、煙草と、惡所通ひの經驗は全然ないのです。そして、決して窮屈に感じたことはありません。また、のんで見たい、行つて見たいと考へたことも正直ないのです。

その私に、イヤ、決して、そんな堅造であることを誇りにする考へは毛頭ありませんが、その私に處もあらうに、警察署へ呼び出して、署長直接の質問を受けたのですから驚いたのです。

『署長さん、冗談ではありませんぜ、私は何も知りませんから、よく調べて下さい。』

『オイ君、遊客の附込の帳簿を持つて來給へ。』

そして、署長の命のままに一巡査は、帳簿を早速、私と署長と對坐してゐますその二人の眞中の机の上に、無雜作に、しかもチヤンと、證據のあるページを開けて置いて行つてくれました。

私は少少不意打でしたが、もう驚きの心もどこへやら飛ばしてしまつて、非常な好奇心に驅られて、その帳簿を讀み入りました。

『遊客名　蒲生郡八幡町爲心町中一番地　吉田悅藏　年齢二十三歳

酒、三本、親子丼、すし二鉢、ビール一本　代金三圓四十九錢　某月某日　自午後九時　至午後十一時』

そしてその他に、當夜の娼婦の名前と、その代金時間等が麗々しく書いてありました。

『一回だけではありませんよ。』

と言はれるままに數ページ繰りますと、吉田悅藏は、隨分度度放蕩してゐる證據歷然、討論の餘地はありません。

『署長さん、人違ひです、僞名です、どうか調べて下さい。』

と、まるで、昔の人の狐につままれた話のやうに、唖然とした私を、巡査數名と署長さんが、面白く見物されたのに違ひありません。

私は帳簿の一部を寫させて貰つて、とにかく會館に歸りました。

『燈臺下暗し』『知らぬは亭主一人なりけり』といふやうな事を考へて、よく會館內の一人一人を考へて見ましたが、全く思ひ當りませんでした。

その次の日の夜、二階の廊下に帽子と外套をかけて私は部屋に入りましたが、十時頃、何かの用事で廊下に出ますと、私の帽子も外套も消えてありません、そして會館は消燈して眞暗でした。私は頭を傾けました。

翌朝五時に、一寸起きて廊下に出て見ますと、帽子も外套も、私のかけたままになつて、歷然そこにあります。

私は警察に出かけました。署長さんは留守で刑事に會ひました。

『ああの、その帽子と外套は、あんたのですか。』

突然尋ねられました。

『ハイ、私のです。』

『それでは、やつぱり、よんべ、あんたは遊廓に行つたんでせう。』

『冗談言はれては困ります、それで調べて貰ひに來たんです。』

『丁度夜中の十二時頃、署長さんに賴まれて、吉田と僞名して遊んでゐる男のあとをつけたんです、そして、爲心町の教會堂の角まで行くと、鐵柵を乘り越えて、その帽子と、その外套の男は青年會館に入つて行つたんです。』

『ケ、ケ、刑事さん判りました。すぐ何とかします、一寸待つて下さい。』

電光一過、私は合點しました。すぐ會館に走つて歸りました。

『オーイ、〇〇君、一寸二階の私の部屋に來て下さい。』

そして、とうとう犯人を捕へました。

『君はヒドイ事をしてくれたね、三日前の晩、六圓四十九錢、君は費つたでせう。梅龍に三圓、酒

三本、親子にすし二鉢、ビール一本、合計三圓四十九錢、總計六圓四十九錢、よく費つてくれたね。』

『ム……、ヘ……イ、』

『困るね、僞名して、しかも、僕の名を書き上げて、大びらに遊んでくれては困るぜ、本當に、どう思うてるんです。』

『惡いことしました、どうぞ見逃して下さい、僞名罪にならんやうに賴みます。今晩もうお暇を貰つて、横濱に歸らして下さい、私は全く惡いことをしました。』

犯人は私共の雇つたコツクでした。

彼は重重恐入つて、冷汗か熱い汗か知りませんが、とにかく玉の汗を流して、蜘蛛のやうに平伏してしまひました。

そして彼は、その夕八幡を去りました。

私は戸籍こそ汚れませんでしたが、警察の帳面には、嫖客の名を止めたのであるに違ひありません。私はこの一人の友を十分に神樣に導くことの出來なかつたのを殘念に思ひます。

—湖聲　大正十四年二月號—

自分のものの迷ひ

どこの醫科大學に行つて見ても同じことです。その外科の標本室や、手術室の廊下に、瓶詰になつたいろいろの人の所有品が飾つてある。

フオルマリン液體の中に、丸瓶の光線屈曲によりて、實物より大きく見える、ブツタ切りの、足、膝小僧の骨がむき出してゐる大男の毛ずね、女の手、指の一本足りない男の手、灰色の腦髓が、タテ、横に鋭利な厨刀で切つたもの、內臟のいろいろ、恐しい死首、飛出した眼玉など、樣樣のむごたらしさを暴露して居ます。

私はその瓶詰の足と、私の足とを見くらべました。その茶色になつた皮膚や、白く浮き上つた、ふくれた皮膚の毛と、私のものとは比較になりませんでした。然し待てよ！　私は考へました。

『先生、私の足は痛んで痛んで、到底このままもう一時間も辛抱し切れません。もうよろしいから一分も早く、どこからでも切り捨てて下さい。お願ひです、お願ひです、そして、私のこの苦しみから救つて下さい。』と、脫疽になやむ遊蕩兒は叫ぶさうです。

私も、手術臺に上つたこと、三回、全身の魔醉や、局部注射で、皮を切り、肉をさき、骨を磨す、手術を受けたことがあります、光つたメスが、私の身體に容赦なく突込んで來る時の感じ、赤い血の噴出する感じ、血管をピンセツト型のハサミで、パチリパチリと止めて行かれる音、アアそれは自分のものの內の自分のものが、私よりむしり取らるることなのでした。

私の手や足は、勿論私の所有であり、盜賊も滅多に犯さない、神聖な私の所有物であります。

自分のもの、財産、名譽、地位、妻子と數へて見ても、地震、火事、洪水、戰爭、惡人、病氣などのため、どんなに戀戀として未練の極みを盡しても、なくなつてしまふことがあります。自分のものだと繩張りを定めても、運命は容赦しません。天道、是乎非乎と怒鳴つても、せん方ありません。

『自分のもの』の迷ひを信じて居たからです。

そして、もつと自分に近い、その肉體、手足から內臟の諸機關まで、自分のものの繩張りから、むしり取らるることのあるのは、この世の習はしであります。

一體、何が本當の自分のものですか。

靈魂――眼に見えぬ、私――私の心の總體――おお、ただ、それだけが本當の私のもの、イヤ、私自身であることに氣がつきました。

この私は、何でせうか。

この私は、壽命が何年でせうか。

この私は、迷ひより醒めるでせうか。

この私は、救はれるでせうか。

この私は、本當の私は、今の有樣はどんなでせうか。

哲人は、よく『己自身を知れ』と申してくれました。『私』自分のもの、所有權、さては私有財產など豪勢な空威張りで、現世に幅を利かすことの、迷ひより醒めた私は何としませう。

『なんぢら己のために財寶を地に積むな、ここは虫と、銹とが損ひ、盜人うがちて盜むなり。なんぢら己のために財寶を天に積め』

『何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を着んと體のことを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり、體は衣に勝るならずや。空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父（宇宙の造り主、唯一の神）はこれを養ひ給ふ、汝等は之より遙に優るる者ならずや。汝らの中たれか思ひ煩ひて身の丈一尺を加へ得んや。又なに故衣のことを思ひ煩ふや、野の百合は如何にして育つかを思へ、勞せず、紡がざるなり。我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモン（ユダヤ王の最も威勢ありし人）だに、その服裝この花の一つにも及かざりき。今日ありて明日爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく裝ひ給へば、まして、汝らをや。ああ信仰うすき者よ。

まづ、神の國と、神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし』私共は皆、一人一人の靈魂を神より與へられ、世の旅に出發したものであります。皆一人一人、天職がある筈です。脫線した人はその天職を知らずに、即ち、目當なしの旅に彷徨します。クリスチャンは、確然たる、太陽よりも明かな人生の目的を最終點として、一歩一歩堂堂旅を樂しむものです。

自分の私有財の迷ひより、脱線より、復軌して、本線をただ直線に、進行する喜びは何も比較すべきものがありません。神の國、理想の現世を求めて、その實現を計るものは、『自分のもの』全部投出して、尙、本當の自分に生き、いろいろのものを、神より委托されて、世に安住するのであります。

この消息の奥に眞の宗教があります。―湖翠　大正十四年九月號―

賀川豐彦兄と私の對話

場所　神戸北本町の或る南京虫のために有名な御宅、二階。

時　初秋の朝、九時頃。

疊座敷の上に椅子三脚、一脚には、葡萄の盛つた皿、他の二脚に二人が腰をかけて對話。

K『輕井澤では御世話だつたね、佐藤君がウンと歡迎してくれたよ。あの唐松の森の家は暗いね、何とか君し給へ。僕は目が悪いから、あれでは困つたよ、少少。』

Y『賀川さんは目が悪いから、暗く思ふんでせうが、僕はあれで明るいと思ひますね。』

K『さうかしら。』

K『時に、ヴォーリズさんね。あの人は面白い人だ、いつも、いろいろのことを考へさせられるやうなことを言ふね。』

Y『何か言つたんですか。』

K『僕が君、輕井澤でこの間會つたら、』

賀川さんは、自分の髪の毛を右手で一握りして私に見せながら、

K『賀川君、我輩のこの白髪は、君のすることを心配して、こんなに多くなつた、と言ひながら、あの薄く白くなつた毛を見せられたよ。』

Y『近頃は僕も少少薄くなつて頭の地がすき透つて來ましたが、ヴォーリズさんは眞白で前髪が薄くなりましたね。』

K『僕は嬉しかつた、何だか涙が出さうに嬉しかつた。冗談でもいい、誰かが、この賀川のために毛が白くなるまで考へてくれる、ああ有難いと思つたよ。』

Y『ヴォーリズさんの冗談は有名ですよ、しかし全くの冗談じやあ、ありませんでせう。』

K『吉田君、彼のために、近江の兄弟達のために、滋賀縣の傳道のために祈らう。』

賀川君は私の手を握つて、脆いた。そして、人生の最も尊い數分間が私の心を捕へた。

それは力強き祈りであつた。

私も祈つた、本心から、近江の國に幸多かれと。—湖聲　大正十五年十月號—

滋賀縣高島郡にキリスト教の入りたる由來

明治四十五年三月二十九日、今津町に、奇妙な服裝をした五人連れが、洋服姿に鳥打帽、銘銘木綿の蝙蝠傘を持ち、背中に白ズックの大袋を負ひ、若狹街道を歩み來り、夕暮れに福田屋に泊り込んだのである。

五人のうちの四人までは紅毛の人達、そしてその中の一人は六尺二寸の大男であつた。胡散な奴共と言ふのか、警察署も注意して、宿帳を調べる、行先を聞く、身許を電話で聞き合す、さては、町の散歩にも、湖岸の見物にも、とうとう次の日、櫟林の深清水より海津道に姿を隱すまで、巡査さん達の厄介をかけた事であつた。

近江八幡町居住、滋賀商業學校の雇教師を免職にせられた、ヴォーリズ（米國人）その友人チエービン、ソーン兄弟、そして、吉田悅藏の五人がその一行であつた。

この五人は、大津から湖水一周の徒步旅行を試みたのであつて、そして各地視察の上、處處にキリスト教の傳道をする根據地を探しに來たのであつた。

ヴォーリズ、吉田、チエービンの三人は、その頃蒲生郡八幡町の建築設計の業務を營むヴォーリズ合名會社の社員で、その私益を擧げて、近江一ケ國にキリスト教の素人傳道をする近江ミッションと稱する團體を創立したばかりであつた。

大正四年の四月頃より、湖上に、白ペンキで眞鍮金具のピカピカするモーターボートが時時姿を顯すやうになつた。ガリラヤ丸と、船首に黑書してある、キリスト教傳道船である。噸數は九噸、速力は八ノットで、浮集會場で、船室には六人位泊り込めるやうになつて居る。

その船は、その春夏にかけて、每週一回根氣よく、西近江路の沿岸を航走した。そしてキリスト教の種まき傳道が、高島郡に入つたのである。

船長は、米國文學士、神學士ウオタハウス、牧師は前同志社總寮長兼宗教主任武田猪平であつた。時時近江ミッションより、ヴォーリズ、吉田の兩人も應援に來た。

集會のあつた村村は、船木崎、新儀村の北畑、深溝、旭、勝野、太田、今津、深清水、海津、太田では、淺見綱齋先生の遺物、螢雪學舍を借用して、每月集會を開いたこともあつた。旭では、或る呉服屋さんの家庭に每月定期の集會もあつた。北畑では、さういふ風に定期集會があつて、そして一ケ年位つづいた。

大正四年六月頃、突然ガリラヤ丸は今津港內に入船した。橋を通り拔け、天神裏に碇を下した、そ

して同志社中學教諭南石福次郎と、吉田悅藏の二人が、社殿前の廣場にて讃美歌を唱ひ、道行く人、群がる兒童達に宗教談をしたのが、今津町に於て近江ミッションがキリスト教の宣傳をした最初である。後大正十一年末、現在の今津基督教會館が新築落成し、北濱の借家より移つて、青山學院神學部出身、鎌田漢三が主任として出來るだけの宗教宣傳をしてゐる次第である。

近江ミッションは、何れの教派にも屬せぬ單純な、「キリストの力」、「キリストの心」、「キリストの理想」、「キリストの教」の宣傳をする團體であつて、教會を作る目的はない。ただ人の心が、キリストの心に合致して新天新地を見開かるることを、唯一の目的とする傳道團體である。現今高島郡にある基督教の運動は、人心の改造のみを目的として努力してゐる次第である。

× × ×

以上は高島郡の有志から頼まれて書いた由來記であります。

「高島は近江の北海道」雪は名物、霰は產地、冬の田舍行は、泥深く、雪深く、中江藤樹先生も、少年の頃凍死をやつと免れた話もある所です。傳道に行つたものの、奮鬪ぶりは目覺しいと申してよろしい。

つい村の集りが夜中になる、設備のない所に泊めて頂いては、困られることもあらうと思ひ、特に一行には、ウオーターハウス氏も居ること、大抵は自轉車を走らせて、雪の小道を二里や三里とやつて來たものである。眞の闇夜に雪明りを頼り、竹籔の側などは、大雪のため道一ぱいに、竹笹、竹そのものが折れさうに下つてゐる中を突入する、襟元から雪が背中に落ち込む、その冷いこと冷水三斗以上でありました。

或時は、幻燈機械を、下手な山伏のやうに背負つて、荒縄を勇ましく外套の上にかけて、行く辻辻に集會の廣告を下げる、トラクトをくばる、子供を集める、集會又集會、そして夜はガリラヤ丸の船室に、氷の湖水に板一枚を距てて寢たのであります。

深溝の橋の下に、ガリラヤ丸をつないで寢た、ある夏の夜、蚊攻めに會つて寢返り、また寢返りして轉轉してゐる時、頭上を通る若い衆の、とぎれとぎれに橋板をガタンガタンと來る音、そして頭の上に、小便の音。ああ傳道の旅の憂き目と、ローマンチックな味ひ、何に比べやうもありませんでした。一念、高島の村村に、福音よ、傳はれと、その希願のみでよくもやつたものであります。今はなき武田牧師、米國にあるウオタハウス先生、そしてこの初代高島郡突入に毎月出かけたのは記者ばかりになりました。山本船長、西澤機關士の兩氏は、誠によくも辛抱せられたものです。兩氏ありて私どもは、波荒き日も、颱風の夜も、また雪の旅も安全なるを得たのであります。

十年一昔、考へて見ると、高島郡も明るくなつたものであります。

—湖聲　大正十五年十一月號—

溫突

まだ曙の星の光、美しく輝く四時半である。朝鮮の空は水氣少く、天氣晴朗紺碧の空は、人界と天上界を間近く接近せしめてゐた。私は溫突のお蔭で、石疊の上に油紙を張り、戸外の寒さとは、ただ一枚の朝鮮紙の障子あるばかりでも、薄い敷蒲團と輕い掛蒲團の中にぬくぬくと寢そべつてゐた。

家は大枚四百圓で八坪位のものに側の溫突裝置もあるので、粗末は誠に粗末であるが、そして時時、まだ新築早早で、床下から煙が部屋の中に入るから、中將姫の昔話のやうに、松葉の煙で閉口することもあるが、あの大震災の時、乞食のやうに山窩のやうに、ふるへに慄へて、私の輕井澤の家に逃げ込んだ鮮人が、今や堂堂たる一家の主人、しかも愛らしい子供を三人、貞淑そのものの如き朝鮮夫人を持ち、村井農場三千町の沃田を見下す丘の上に、押しも押されもせぬ耶蘇教布經（教師）として、私を昨夜から兄の如く、親の如く幾度も手を取つて、押し戴き且感涙にむせぶばかりか、最上の部屋を私に提供して最大級の歡待をしてゐるのである。

私は釜山に上陸した、尹奉云はH孃と棧橋に立つて迎へてくれた。私は尹と肩を揃へ、手を彼の背にかけて萬感交交來る的の樣子で歩いてゐたに違ひはない。

『あの洋服を着て鮮人と肩を組んで行くのは何處の人ですか。』

と、H孃は三四人の鮮人に圍まれて聞かれた、H孃はアウズトラリヤ人である。

『あれは日本人です。』

H孃は日本語が全く通じなく、宣教師で釜山鎭の山の上に十六年、道のために鮮人達にその命を捧げてゐる。T總督時代の萬歳騷ぎに、間違へて豚箱に二日間入れられた人で、朝鮮語の達人であり、絶大の信任を彼等から受けてゐる女丈夫である。

『不思議だなあ、日本人の中にもあんなのもあるかしら。』

と小聲に語りつつ三四人は去つて行つたとのこと。

それから私は、牛の心臓、牛の胃の皮の筋肉、牛の舌、蜂蜜などの御馳走になりつくして、この溫突の部屋に泊められたのである。

教會の曉鐘に應じて、篤信の男女數名中に教會の執事長老も毎朝五時の祈禱會に參集して、小一時間は熱烈な祈り聲が會堂より聞える。

私が溫突の部屋から耳をすませると、丁度高野山か比叡山かの僧達が讀經してゐるやうな聲と調子が、この朝鮮式の祈禱より不可思議に響いて來た。突然思ひ當ることは、奈良朝に於ける佛教の渡來である。なる程あの聲が、二千二百年前の佛僧達の先生筋の聲かと思はれた。私は今や昔の任那の國附近の山に來て居たのだ。

あの朗朗たる息長き聲、そして、息切れに間近くなれば、更に調子を高めて尻上りに句切つた上、直ちに口より大急ぎで肺氣を補充してまた朗朗と讀み上ぐる聲は、私の耳には讀經の聲の如く聞えた、そしてそれが曙を呼ぶ、朝鮮耶蘇信徒の祈りの聲である。

篤信の彼等は朝五時の祈禱會を一年中やり通すのである。

尹奉云といふ鮮人は放浪して內地に居た。土方、釀造工場の人足をして食ふや食はずで、近江八幡に流れて來たのだ。それが、近江の兄弟等の中に圍まれて、とうとう信仰を起し、朝鮮に歸つてこの有樣になつた。—湖聲　大正十五年十二月號—

母　ごころ

今年の三月は寒い月であつた。雪と雨と風の月であつた。それでも梅の花は、湖畔に匂つて居た。

近江ミッションの初期を知つて居る一人のお婆さんが、三月なくなつた。

それは、野州郡は兵主村野田の散髮屋、浦谷のお婆さんであつた。

七十も越えて八十に近い、小柄の女で、身體の强健なること、働き人であること、そして、不幸のどん底に落ちた人であること等、村に隱れもない苦勞人であつた。

明治四十三年頃、赤シャツの鬚むしや男が、いつでも片目をガーゼと黑い繃帶で包んでゐる細君をつれて、手車に今川燒の道具をつけ、八幡神社の祭禮に店出しをしてゐる、自稱、救世軍の軍人がゐた。教會の祈りの會では、この夫婦がよく祈りをしたものだ。

この貞吉といふ男を、千貫老人の世話で、ヴォーリズ吉田の家庭であるＹＭＣＡに雇つて、掃除とクツキングを賴んだのであつた。

その時分、田舍の婆さんが、シャンシャンとした頑丈な身體をして、時時ＹＭＣＡの掃除をしたり、又臺所で働いてゐた。

賴みもせぬのに、よく働くお婆さんだなと思つて、尋ねて見ると、貞吉君のお母さんと解つた。貞吉君がつかれたり身體の工合のよくない時に、三里の野道を遠しとせず、野洲の仁保川の川尻の在所から、八幡までやつて來て息子の勤めを手助けするのであつた。

ある日、貞吉君が、しんみりして身の上話をした。そして、記者の如きは、親の愛の如何に大であるかを知つて、涙にくれたことであつた。

貞吉君は、師範學校の學生になつた、そして肩あげをおとした時分から、酒と遊里に足を踏入れたので、學校に居たたまらず、村で百姓をすることになつた。

野田から八幡まで三里の野道を毎夜のやうに、母親をだまして通つたのは、すさんだ淫慾の露骨な

話と、放蕩のドラ息子の誘惑と、酒のために追ひ立てられた青年浦谷貞吉であつた。戀して通へば千里も一里だつたといふ。

戀と、性慾を間違へるのは、その頃の村人の常であつた。

父の無い一人息子、妹は一人あつたが、母と妹をだますことに全力を盡して、秀才の貞吉は家も屋敷も田畑も倉も、皆人手に渡して悪所通ひ、つひには母親が一年の營作で收穫した米を、お晝の間は、何喰はん顔で母を助けて俵につめ、積み上げて置き、夜になると、別に石や瓦や藁をつめた俵を作つて、米の下積みを入れ替へて、正米入りの俵を何俵も盗み出し、遊里通ひの軍用金を作つたことと等、罰の當るはあたり前です、と語つてゐた。

家屋敷まで人手に渡し、母と妹をドン底の生活にけり落して、貞吉は東京に逃げた。そして、淺草の銘酒屋の女を救世軍の集會で、見出して、嫁にしたのであつた。貞吉は、東京で悔改したのであつた。そして變態な心理から無一文の貞吉は、そのか弱い女をつれて何のあてもなく、ただ故郷にキリストの福音を傳へたい、自分の心も變つてゐることを、母親に見て貰ひたい一念から、その村に最も近い八幡の町に流れてついたのであつた。

そして、牛乳屋の千貫さん、傳道師の大橋先生のお世話になつてYMCAに拾はれたのである。

四十三年の夏八幡教會で、米原YMCAの幹事高島氏の結婚式があつた。その翌日であつたか、浦谷貞吉君の案内で、婚禮の御客の一行が、八幡堀から田舟に乘つて、湖水に出で、仁保川尻を廻つて兵主村の圓堤濱で、鮒を買ひ切り、鯉や鮒を手づかみにする、愉快な遊びをしたことがあつた。

鮒といふのは、魚扁に入ると書く、如何にも上手に作つた、魚類の迷路である。八幡の藪知らずで、入口は廣く大きく簀の網を張つてゐて、その簀の壁に魚が當ると、壁づたひにどこまでも泳ぐので、たうとう出られぬ井戸の中に、手掬ひの網にかかる仕かけになつてゐる。

その井戸のすぐ前の處に魚の溜りがある、そこにのり込んで、淺瀬に這入り、兩手で、目の下一尺何寸と言ふ源五郎鮒や、つかめばピンと尻尾で手を打つ鯉を手取りにするのである。琵琶湖の遊びでは、これが一番面白いものの一つで、今でもその時のことが思ひ出される。

嵐が來た、湖中の颶風位、何でもなく考へる人もあるが、比叡おろし比良おろし、さては伊吹おろし等、いろいろの名のある突風、ツイ、半時間前まで青疊の如く漣一つも立つてゐなかつた湖面が、見る見るうちに怒り立ち、數尺の三角波、白い冠のある、くだけ來る大濤は、昔、大鹽平八郎をして蒼白ならしめ、急がば廻れ瀬田の長橋といふ諺を生み出した譯である。

鮒遊びの仲間は到底その日は歸れぬ破目となり、田舟はすぐ前の圓堤につけ、一同ぬれ鼠の姿で、田圃道を野田村にたどりついたのが、夕方でつた。

その嵐の夜、村の人人の懇請で、放蕩學博士、浦谷貞吉先生の酒をやめた話、八幡の先生方の演說

等をしてくれとのことで、浦谷一家の本家彌左衞門の離れ座敷で、キリスト教のお話し會を開いたのであつた。そして、その後八幡から自轉車で、野田、野田と言うて私共は、通つては農村傳道をしたのであつた。

その貞吉君は八幡のＹＭＣＡを辭職して野田に歸農して間もなく死んだ。それからもう十七年になる。死ぬまで、お母さん、お母さんと言うて、隨分老人の母親に、或は田植、草とり、刈入れの勞働で厄介をかけ、或は貞吉の業病再發三發で看病して貰ひ、淺草育ちの賣笑婦のやうな細君のために迷惑をかけ、とうとう貞吉は脚氣と心臟病でこの世を去つたのである。

世も大正となり十五年、昭和となり二年、いつ野田に行つても、この浦谷のお婆さんはピンピンして働いてゐた、紺の手甲をかけたお婆さんの姿は、勞働界の女王のやうに見えた。

飢遊びの時、三四歳、變則單級日曜學校に來てゐた小兒等も、今は堂堂たる田園の勇者になつた、そして、村で集金した現金五百圓、それから寄附約束五百圓、合計千圓の金を作つて、近江ミッションに、野田キリスト教青年會館を建ててくれるやうに申込んで來た。

ミッションの一同は感激して事に當り、今年一月完成、賀川豐彦兄に來て貰つて献堂式を擧げ、集會場は三百人を入れ、小さい部屋三つもある美事な農村文化ビルデングとでも言ふべき青年會館が出來た。

その時貞吉君の母親、それからその親類達、常にヤソヤソと、何につけても問題にされるので閉口してゐた信者の奥さん達は、とても、大層に喜んでくれた。

『吉田さん、もう、わしらはこんなもんや。』と、鼻の頭に兩手を握つて筒を作り、天狗の姿をして見せてくれた女達もあつた。

三月の初めに、この尊い勞働の權化の如き女性は、ポクリと落ちた椿の花のやうに、最後まで、骨太く勞働は神聖也と認めた木の株に、その手の業、肩の荷、腰の据ゑ方等の花を咲かせて、永劫にこの世を去つた。

『わしは、貞吉の白骨を壺に入れておいたのや、丁度今年で十七回忌やなあよ、わしは、この子が可愛うてならん。この子はわしを苦しめに生れて來たが、わしは貞吉がいとしい、貞吉の白骨をだかせて、わしの身體を埋めて下さいよ。十七回忌やからなあ。』

と、死の床に、放蕩息子の骨に涙を流したお婆さんは、何といふ尊さであらう。

地獄へでも、極樂へでも、子の白骨は抱いて行く母ごころ。

嗚呼、涙と合掌と祈りより、このお婆さんの心は受けられない。

使徒パウロは言うた。

汝等には、キリストに於ける、守役一萬ありとも、父は多くあることなし。そは、キリスト・イエ

スにありて、福音により、汝等を生みたるは、我なればなり。

父よ、父よ、父こそ、愛の權化である、母の愛も、父の愛も、理想化されて、遂に、天の父のことを知るのである。パウロの所謂守役とは教師のことである、教へてくれる人はある、宗教教師のことである、宗教家の大部分である。しかし、パウロは、

父たることを覺悟したのである。

父は多くあることなしである。

白骨となつた放蕩息子のこの世の生活をかばつたばかりでなく、その骨まで、抱いて極樂に行かんとする、敢然たる女丈夫の心は、大和魂の眞骨頂である。

キリスト魂の奥の院である。

たれか人を愛して、その父となるものあるか、その人こそ、クリスチヤンであるのだ。

—湖聲　昭和二年五月號—

銀行家

ある數千萬圓の資産ある紳士が、秋深き星晴れの夜、靜かな、美しい一家團欒の晩餐に、記者を招かれたことがある。

最も趣味の深い、英國風の食堂で、金銀のナイフ・フォーク、和蘭陀の染付藍皿、アイルランドより舶來した純白リネンの食卓掛、目醒めるやうな、いぶし銀瓶に盛られた彩花、そして風雅なお料理があつた。

食後、一脚三千圓もする、ソフアに主客の二人は腰を下した。そして主人は、しみじみ銀行家の心の有樣を物語られたのであつた。

『銀行家といふものは、心配すれば、夜寢られないものですよ。』と。

天下にその名を知られ、大富豪として時めく人にして、不安、自責の心より、一夜の快眠を、享樂し得ないとは何事ぞとその時考へたのである。

俄然、日本の歴史あつて未だ嘗て有らなんだ、財界の大動亂が來た。そして、四月の初め頃より閉鎖した銀行二十八、その預金額は八億圓以上である。

金の嵩と、金の運動と、日本銀行と、日本政府に賴つて、他力本願、金の神樣さへあればと、その銀行智識、經濟眼、法律論にのみ、一連托生の思ひに、安心してゐた人人は、神秘に動く、人の心、人の信用の基礎である人格的或るものに、注意して居なかつたため、あはれ、一敗地にまみれたのだ。

一體、銀行家といふ公職は、人物の慥な、清廉にして、清貧に甘んずるものの仕事である。世の所謂、金持のする仕事ではないのである。

銀行は、預金即ち一般の民衆より、信用を受けた借金の運轉によつて、その力を出す仕掛けになつてゐる。だから銀行をやる人は、借金して、決して、貸し主即ち預金者を心配せしめない人でなくてはならぬ。

資本金五千萬、一億萬圓など新聞に廣告して、本當の處拂込みは半分位で、あとは匂はしておく、そして欠損でもすれば、資本金に達するまでの拂込みもせずに減資したり、解散したり、勝手な眞似をするのでもともと資本金の嵩なんか言はぬ方がよい。又、言はさぬ法律でやりつけるべきである。

そして、民衆の眼も間違つてゐる。金の嵩に惚れ込んで命より二番目の虎の子を預金をする。何故銀行重役の人格に惚れ込んで大切なものを托せないのであらうか。—湖聲　昭和二年二月號—

時の記念日

近江の國は、『時の記念日』と緣故が深い。

天智天皇は今より一千二百七十年前に、志賀の都を、湖水べりの、大津あたりに營まれた。そして水時計を作らせられ、御代の十年四月には、陰陽寮に、漏刻博士二人、守辰十二人を置き、鼓と鐘を打たせて、時を報ぜられました。

水時計、砂時計、火時計、ゼンマイ仕掛の振り子時計、重りで動くいろいろの柱時計、電氣時計等が發明され、ラヂオで正確な時を毎日毎晩、知らせてくれることになりました。

時間を嚴守せよ、自他の人格の顯れである約束、生命の一片である、時間を尊重せよ、と聲を嗄らして叫ぶ聲が聞えます。誠にその通りであります。

ここに二つ考へて見たいことがあります。

人は大事件に出合ふと、全く、命がけで時を守るものです。

銀行の取附なんかは、暗いうちから數時間立ち續けを覺悟して行く、そして列を作らせられたり、待たされたりして、全く時を守るために散散の目にあつてゐる。

人氣のある芝居や、音樂會や、演說會は、二十分も早く行かぬと、滿員札止になるといふので、時間を守る。

集會や何かに、人が時間通りに寄らぬのは、寄らぬ方も惡いが、定刻以前にでも、押すな押すなと人が來てくれるやうな獻立をせぬ主人側の氣がきかぬからである。

外國では、キリスト敎の集會に、定刻前十五分も早く行かねば、入場の出來ぬ敎會等もある。

それから第二のことは、五分、十分を、やかましく言ふ。晨に星を戴いて働き、夕に夜露にぬれて漸く休息する樣子で、時間時間、時は金だ、時は生命だ等、標語を作つて働いても、一生の全體の時間の働きについて、全然失敗する人がある。人生の眞の目的を知らずして、營營働いたとて、何のたしにもならぬ。一時間、二時間、また、五分三分の時を惜しむ心に、幾萬倍して、人生五十年、八十年、全體の時を惜しむ心を宗教といふ。

光陰矢の如し、人生數十年、行きて歸らぬことを思へば、時は生命の斷片であることに大いに悟るべきであります。（六月十日）—湖畔　昭和二年七月號—

衣食住

人間生活の必要品は衣食住と言ふことになつてゐる。

衣、食、住、の順序は誰がつけたのか知れぬが、本當の願序は、住、食、衣であらう。

暴風雨の中、吹雪の下、まづ人は屋根と、圍爐裏の傍に逃げ込むものだ。

食は、その次で一日も食はぬと腹が減つては戰が出來ぬ始末となる。

衣の方は第二、第三で、夏は着物を着ねばならぬ不幸をかこつこともある。支那のやうな戰亂國では二三年は、日本から木綿や織物を買はずともすむ。

近代人の生活は、モダンガールにモダンボーイ等ありて、裏長屋に住んで、飯もろくろく食はずに、孔雀の如き、極樂鳥のやうな眞似をする、そして田園の人達等もいくらか着飾ることに骨を入れすぎる。

どつしりした住居、それは自分一生は動かぬ家である。動かぬ根の生へた、死に場所を持つ人こそ、悟りの人である。

放浪する、さすらひの旅の人は、本當に腰が据つて居らぬ。

人生の目的を貫徹する人は、住第一の人であり、死に場所を定めた人である。

少くも、半世紀、五十年と同じ仕事に打ち込む人こそ、頼み甲斐がある眞の男だと思ふ。

—湖畔　昭和二年八月號—

佐々木のおばあ樣

水口の佐々木のおばあさんと言へば、祈りの人、半世紀に近い祈りの生活をした人です。

東海道五十三次の要路に當る水口驛は、今は淋しい町になつてゐます。草津で姥が餅を食べ、石部

の宿に泊り、水口を朝がけに鈴鹿峠を越す、旅人のむれはもう見られません。靜かな町、それは水口です。

その町の中央より少し西寄りに、水口藩主の宗廟があります。加藤嘉明といへば、あの賤ケ岳七本槍の一人であり、江州水口の城主である藩主として祭られて居るのです。その宗廟の西隣りに、美しい森があります。街道ばたに、天に聳える杉が幾本も、杉皮の美しさを誇つてゐるばかりか、雜木の幾十種が、原始林のやうに黑ずんでゐます。その森のうしろに、ささやかな家の離れ座敷があります。それが佐々木のおばあさんの居宅でした。私共、日露戰爭のあつた頃より佐々木さんを知つたものには、いつでも、佐々木さんは六十を越えたおばあさんでした。

熱心な信者として、また本當に昔の武士の妻らしい、しとやかさと、氣品のある佐々木さんは、いよいよ神の前に、祈らるる時は全く神氣人に迫る姿を見せられました。その聲の凛然としてすき通り大きく强く、

天の父樣

水口に、神の國を來らせたまへ

たとへ、信者數は、指折るほどに少くとも、必ず必ず

天の父樣、水口の敎會に祝福を加へさせ給へ。

と祈らるる時、誰もかれも、その熱と、命がけの女の祈願、女の一念岩をも通す、鐵石の心に、打たれぬものはありません。

水口町のキリスト敎運動は、昔、二度ほど花の咲いた時もありましたが、全く沈靜して、京都同志社の宣敎師達が、熱心に力を盡されアメリカン、ボード、ミッションの援助で、明治二十年代より、大正の初頭頃まで傳道を續けて居られましたが、つひに打切りといふことになつたのです。

近江ミッションが水口の傳道を引受けましたのは數年前で、傳道のことは全く頓挫してゐた頃でした。

今は、專任の若き傳道主任が事に當られて居ます。會堂も少しは修復が出來まして、今年の夏は、あの路傍の森で、日曜學校の夏期學校まで開かれ、數十の小さき人達がさんび歌を歌ひ、森の小鳥のむれとして神の國の話を聞いてゐました。夜は町の人が大勢同じ森の天幕に、精神界の第一人者、川邊貞吉先生の聲を聞きました。

いろいろの水口のキリスト敎運動は、あの佐々木のおばあ樣に、力づけられてやつてゐるのです。佐々木のおばあ樣の祈り聲は、まだ私共の耳に生きて居ます。

近江ミッションが、水口の傳道、甲賀郡の傳道、鈴鹿峠より信樂の里あたりまで、主イエスの福音を叫び行かんと決心した原因の一つは、全くこの偉大な女性、佐々木のおばあさんの祈りの聲の力で

あります。

祈る人、祈られて居る我等、御旨を爲し給ふ天の父なる神様、三拍子そろひました。願くば、甲賀の山山、谷谷、田畑、川べりの石ころまで幸あれかし。―湖聲　昭和二年九月號―

往生要錄

八十三歳の高齢に達しても、白髪童顔、あの、山寺の苔むす石段を、五百段も昇つた處のお寺に住んでゐて、朝夕、まだ三百段も上にある、丹塗りの大本堂に、勤行を缺かしたこともなく、唐畫にある、仙人のついて居るやうな杖を、輕輕と引さげて歩む老宗教家がある。

近頃、病篤しと聞いたので、その病床にお見舞に行つた。

『老僧、御病氣はいかがですか。』

『老僧、この頃の御心地はどんなですか。』

痩せ衰へて、枯木のやうな老僧は、

『いや、だんだん面白くなつて來たぞ。』

と、返事された。

私は、この臨終の床の中で、段段面白くなつて行く人を、羨ましく、又本當に嬉しく、その心の奥のひらめきを心ゆくばかり味つた。

『往生』とは、よい言葉である。

生きて往くの意味である。

生きて往く人には、死もまた、段段面白かるべきである。

主イエスは、限り無き生命、永遠のいのちを人の心に植ゑつけんとせられた。

『我は復活也、生命也、我を信ずるものは、死るとも生くべし、凡て生きて我を信ずる者は永遠に死ることなし。』

復活を、もつと日本的に言へば、文字通りの往生である。源空上人の往生と、内容は少し變つても、その言葉、その文字そのまま、キリスト化して、私は嬉しい心を受けることが出來る。

ああ、クリスチヤンよ、死に面して、だんだん面白くなり、苦難に當つて、愉快を覺えようではないか。―湖聲　昭和二年十月號―

昔話をする人

ある兇暴な强盜があつた。入獄中にキリスト敎を信じて、生れ變つた眞人間として世に出て來た。ある時その男が、懺悔話をしてくれた、そして全くその身も魂も、昔の罪の日と、顏つきまでも眼つきまでも變つてしまつてゐた。

處がその話の中で、ある家に忍び込み、寢て居る主人の枕を蹴り飛ばして、

『聲を立てると、命がねいぞ。』

と言つた時の姿を、その一寸した手つき眼つきの中に、私は、忽然として出現した彼の兇惡性をまざまざと見た、丁度、鼠が猫に睨まれた時のやうに、ピリツとこたへた。

ある、柔しい八十に近い老翁が、昔話をしてゐた。幕末から維新にかけて、彼は志士として、太刀を横たへて天下を横行してゐた頃に、とうとう佐幕派の士を斬殺した話になつた。

いよいよ斬り込んで双を合せた時、靑眼に構へた手つきをして見せた、それが瞬間的に、私の眼の前にちらついた、そしてその劍の威力を、私はまざまざ見た。

× × ×

本當に事をやつた人の話を、机の上で叩き上げた人の作り話とは、雲泥の差があると思つた。人生は、眞劍勝負をして來た人によつてのみ、指導され感化されるものだ、と深く自ら頷いた。

× × ×

そして、も一つのことを考へた。

罪惡の記憶の恐しさである。よくなつた人も、惡の記錄をくり出して來ると、一時的にも、昔に返るものであることを。

燒木杭棒に火のつくわけである。

ここに十字架が尊い、キリストは我等の罪惡の記憶をも、拭ひ去り、淸め高め給ふ方である。そしてその十字架を仰ぎ見るものの心に、新生命を與へ給ふのだ。—湖聲　昭和二年十一月號—

宗敎と金

近江と美濃の國境で、急行列車が衝突をした、そして、乘り合せてゐた、神戸のある船成金は、救ひに來た人の聲を聞きつけて、大聲に、

『俺は神戸の〇〇だ、金はいくらでも出すから助けてくれ。』と叫んだとやら。

その話を傳へ聞いて、世の人は物笑ひの種にした。

私は簡單に笑へぬと思つた。笑つてゐる人が、實際そんな目に合つた時の心は、言ふか、言はぬか知れぬが、同情同感するだらうと思ふ。

宗教に入る心は、同じく、正しく、この心と同じである。

後生、即ち永遠の生命のためには、總てを投じて沒入し、誠に、光風霽月、大自然にとけ込む心に、宗教がある。あの金離れの惡い、ジミジミした猶太人、しかも高利貸のザアカイは、キリストに會つて、財産を投げ出す決心をしたのである。

宗教の起る處には、必ず命がけの人人が集る。そしてその生命は空虛なもの、精神ばかりではないから、必ず金がついて來る。だから、宗教家は眞の生命を發揮して居れば、金に困る筈のものではない。

そして初代の宗教は、魂を生かし金を生かして、どしどし世のために働きかける。

ところが、二代三代と宗教に苔がつくころ、金が溜つて來て、魂は死に失せる。そして、だんだん貧乏になつて滅びて行く。

眞の宗教は、この世の富を如何に處分し、如何に散するかを完全になしとげて、初めて生れて來るのである。—湖畔　昭和三年一月號—

南無阿彌陀佛

ナムアミダブツと假名でかくのを、昔の支那人が、字には何等の意味もない六字の名號、即ち南無阿彌陀佛と、支那音の假名文字で書いたまでである。阿彌陀はAmitaは『限』と言ふ意味である、それで、アミダは無限といふことに判明する。ナムとは、歸命である、即ち、一切の疑を絶ち、命がけで信仰することです。

ともかくもあなたまかせの年の暮　一茶

の『あなたまかせ』の徹底した心です。キリスト教の『御意のまま』といふ思想です。

『佛』は、即ちブダは、如來であつて、無限なる人格であります、『眞如の世界より來るもの』の意味です。

そこで、最後に、六字の名號、ナムアミダブツは、

命がけで、無限の神を信じます。

神の御意のまにまに生活して決して不平がありません。

とのことです。

さすれば、南無阿彌陀佛は、キリストの心をもつてすれば、

「御意をなし給へ」と祈る言葉なのです。

キリスト教の十字架は、この、「ともかくも神様まかせ」の鐵石心であります。これを文字通り實行して、本當の宗教に入ることになります。―湖聲　昭和三年二月號―

神に養はるるもの

京の一燈園の信條である、光明祈願の第一願に『許されて生きむ』といふのがあります。

『無一物中、無盡藏』の眞理を徹底的に體驗して、始めてこの信念に生きられるのです。つまり、人生の歩み方は、『神のお許しのあるままに、生活せん』とするのです。

人は、この世界に生れ出でるについて、誰にも頼みません。何卒地球上に人間として、生れしめ給へ、何卒、日本人に生れしめ給へ、何卒、男に生み出し給へ、何卒百姓の子として誕生を願ひ奉る、とは、誰も祈願した覺えはありません。私共は、ただ『生れ來つた』といふ單純な一つの事實に、人生を踏み出すのです。即ち、生れ來つたことに、善惡もなく、責任もありません。トコロテンが突き出された形です。

突き出した、責任者は神様です。天地を創造された、唯一柱の神様です。キリストは『天の父』とその御名を呼びました。つまり父があつて、私共は子として、世に生れたのです。

そして、人は生れた時に、死刑の宣告を受けて居ります。必ず確實に、死を受けるのであつて、死は、生と同じく、全く、大自然の、最も當り前の事實です。

生と、死の中間を人生と申します。そして、その人生の歩みについて人爲的にいろいろゴタゴタと惱み、苦しみ悶へ悲しむことは、全く『親の心、子知らず』の不孝者の中でも最も不孝の生き方です。

人生に送り込まれた私共は、一切を神にまかせて、悠悠、また、閑閑と、神のお仕事に『日の寄進』イヤ、毎日お手傳ひ申せばよいのです、何も七面倒なことはありません。

『許されて、生きむ』ですから、天の父の御心のままに、空の鳥の如く、野の百合の如く、生きるのです。

『この故に我、なんぢらに告ぐ、

何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を着んと體のことを思ひ煩ふな』

と、キリストは宣ひます。

『この故に、明日のことを思ひ煩ふな。明日は明日、みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり』

とも宣ひます。

神が、私共に死を賜ひますなら、昔の日本武士の如く、死刑の宣告を三寶にのせて、押しいただく心になるべきです。

死もまた、神の愛の顯れと、本當に然も徹底的に悟るのです。

宗教は人生の恐れと惱みと悶へを一切無くします。この力は、この、悟り、即ち、我は、神がこの世に送り出された、神の子である。神の子は、神のお仕事をお手傳ひ申して、お用濟みの時に、直ちに『ハイ』と答へて神に歸るのであると考へるのです。

神のお仕事の御手傳ひが人生であれば、神の命のままに或ひは立身出世し、或ひは乞食坊主となり、或ひは世界の檜舞臺に立ち、或ひは三疊の部屋を我家とし、或ひは富豪となり、或ひは癩病人となり、その生き方は、樣樣と變化して（變化と讀まずに、變化即ち、お化けと讀んで下さい）即ちお化けのやうに役者のやうに、人生の諸役をつとめても、本體は變らぬ神の子の一生なのです。如何なるやうに身は變るとも、一切神の御心のまま、許されて生きるのです。

それでキリストは、無實の罪を辯解もせず、ジヤジヤバリもせず、

『御心にまかせ給へ』

と祈りつつ、無慙な極刑十字架におかかりになりまして、

『父よ、彼等を赦し給へ、彼等はそのなす所を知らざればなり。』

と罪を人に歸せず、神樣の懷にいだかれつつ、神の子の大往生をせられました。（此の處で彼等と聖書にあるのは自分を十字架にかけた相手全體を言ふのです。一點の憎しみも恨みも、惱みも、悶へも、不安も、理窟もありませんでした。）

ここで、一つ御意のままの生活の實例として、舞妓が藝者になり藝者が妾となり、妾が乞食となり乞食が氣違ひとなり、氣違ひが如來となり、如來が十字架になつた話を書いて見ます。

× × ×

近江八幡の町に有名な踊りの名取りで、美貌ですつきりした藝者がありました。數奇な一生で、人の妾となり、不幸にも旦那樣に死に別れて、無慙な生活難に打ち勝つだけの惡度胸もなく、捨鉢にもなれず、小さい胸を傷めて苦しんだ結果、フラフラと腦をいためて、遂には路傍に立つ乞食になりました。

一錢二錢のお金を投げて貰へば、雀百まで踊り忘れぬ、それ者の手つき面白く、町の辻を口三味線で、差す手引く手の舞踊を、さわめく子供等に、知らぬ道行く人に恥を晒して居ました姿は、淺ましいものでありました。

このお乞食さんも、寄る年波に六十歳にも近づいた時、どうしても止まぬ煙草の火が危險だといふ

ので、八幡町のどの家の軒先にも一夜の夢を結ぶことの出來ぬ始末となりました。

大慈大悲の佛樣を本尊にまつつてゐる或る大きな寺の門に、破れた洋傘一本、大きな風呂敷包一つを全財産として、吹き荒れる冬の寒風に、あはれにも縮み上つて石疊の上にしやがんだまま幾夜かを送つて居りましたのが、大正十一年の正月でした。

その同じ正月にピアノを一臺買つた男がありました。アメリカから輸入したピアノでその荷造りの箱は大きく且頑丈でありますが、その男の物置にも入らぬ厄介なもので、叩き割つて釜の下の灰にされる運命になつてをりました。

そのピアノを買つた男は誠に物ずきで、その前年の冬に或る難儀した人の處分品である宅地を、三十五坪ばかり仕方なしに背負はされて居つたのです。

此の男が、この六十になる狂氣した女乞食をその寺の門で慄えて居るのを見た時に、ハハア、あの土地にあの箱を据ゑて、この女の人一人に住んで貰はうと思ひました。

すぐにピアノの空箱の家が出來ました。女乞食は直ちに世帶主になりました。八幡町役場は直ちに住所決定した貧困者の救助金を、毎月六圓出して下さることになりました。そして乞食は安心立命ピアノの空箱の家に、地から生えた大木のやうに根を下して坐り込みました。

それからもう足掛七年になります。おまるさんは（乞食でもなくなつて今は昔の藝命の通り（おまるさんと呼びます）ピアノを買つた男が、もう死にさうなものだなあ、ひよつとすると今年は冷くなつてやしないか、硬くなつてやしないかと、正月七日にそうつとのぞいて見た時は、想像とはまるで反對で、しかも意外にも、空箱の家に安住して、食物やいろいろの貰ひ物で、裕福さうに、又靜寂そのものの如くに、辻堂の觀音樣の像のやうに樂樂と坐つて居りました。全くその有樣は不死身の體そのものやうです。

この不死身の女、空箱の中に、七年の星霜を平然と暮し得た、强い强い、現代日本に稀に見る、奇蹟的の生存力を如實に示してゐる人を何と見ますか。

その見方が、いろいろと宗教の奥の院、大悟徹底の境地に人を導くのです。

× × ×

おまるさんには、物質的心配は一切ありません。人を見れば、

『おほきにありがたうさんで、おほきにありがたうさんで。』

と、柔しく頭を下げるだけの生活です。そして嵐の夜にも雪に埋められる冬の朝も、炎熱燒くが如き夏の太陽も何等の障りを與へません。

おまるさんの心境を見れば、

『最早われ生きんとするに非ず、神、われを生かし置き給ふ。故に、死なんと思へど、死ねませ

ぬ』と思つてゐるかも知れません。

不死身であります、不老長壽であります、福祿壽です。坐つてゐても食物に事かきません。家はあります、生命はたしかに心臓を鼓動させてをります。福も祿も壽も、一切を有してゐるのです。その上、狂氣ですから苦もありません。

× × ×

人生の迷ひは、將來のことを心配することより起ります。自分の將來、妻子の前途は如何、子供の教育は如何。そして金、金、金を欲しがるのが、迷ひ路の始まりです。

處が、ここに、責任を負ひ、事業の中心となつて大家族を率ゐてゐる人がある。彼は時時心配します、自分自身のために非ず、その責任ある家族に對しても貧乏させられないと、內心非常に惱むことがあります。その時このピアノの空箱の七年は、驚くべき悟りと力を與へます。

人はあの狀態でも生きられるのだ、よし悟れば、生活の心配はないのだ、神より直接に養はれることは本當にあり得るのだ。

自分も妻子も、路傍に立つも神に見捨られぬ以上は大安心、大丈夫であるのだ。

更に人生は、つまり神の御心のままに動くのが最もよい生存の仕方ではないか。

と、そして斯樣に悟れた時は、光明遍照、一點の疑ひも、迷ひも、悶えも一度に無くなります。

× × ×

おまるさんの七年は、それを悟つて見る人には、難行苦行の七年で、それはその空箱の家の前に合掌して立つ人のために偉大なる精神力を與へんとせられる、神の大なる御心の顯れであると悟るのであります。

× × ×

キリストは路傍の盲人を見て、その不具の生活そのものは、神の業の顯れんため也、と言はれたのは眞理であります。筆者は、おまるさんと言ふこの乞食は、如來であると考へます。そしてその生命力の偉大さに、常に頭を下げて、

あなたは私の先生だ、私もあなたのやうに、一切を神にまかせて生存します。

と、心に言ひ聞かせてゐます。

× × ×

そして、覺りました。人生の生き方のうち最も大なるものは、

ともかくもあなたまかせの年の暮　一茶

の一句に、全身全靈を神にゆだねるに越したものは無いと信ずるのであります。

—湖畔　昭和三年二月號—

ある新婚の人達に與ふる言葉

宗教の奥義は、神と人との合一であります。英語で、アット、ワン、メントの三つを、一つの言葉として、At-one-ment「和合の救ひ」と申して居ります。

夫婦の道は、即ち、誠の合一でありまして、算術の公式にすれば、

1＋1＝1

即ち、一に一を加へて、大きな一を作るのです。決して、一に一を加へて二を算出するのではありません。この算式は宗教の算式でありまして、昔から「不二」といふ尊い語となつて、禪宗に傳つてをります。

夫は 1/2 妻も 1/2 で、しかも女は、ベターハーフ「よき半分」と、西洋人は申しましたが、全く、殖民地氣分の妻ノロの言ふことで、取り合ふ必要はありません。

キリストの宗教は、一に一を加へ、更に一を加へても、二とならず、三とならず、同心一體の集團の出來る特色を以つて世界の光となり、地の塩となり、腐敗多き現世を潔めるの力となります。

夫婦の道は、神の合せ給ひし個人と個人が、愛他の心を持つて、二つが一つに合することなのです。よつて、よしや片一方に不足があらうとも、他の一方は、その全責任を負うて人生を歩むのです。即ち、茲に、生れつき心臓の弱き人は、その弱き心臓を一生大切に切捨てずに、懸命に保護を與へて生きのびる如く、かりにも、夫に缺點あれば、妻はその缺點を己のものとして、最も大切に、その缺點を保護しつつ、人生の旅を歩むのであります。

神の合せ給ふもの、人、離す可からず、であります。

一に一を加へて大きな一を築かんとして、門出をさるる兄姉に、心より「不二」の法語を示したくあります。―湖聲　昭和二年三月號―

宗教と言ふ文字

宗教と言ふ文字は、宗教と言ふ内容に全くふさはしくありません。宗教は斷じて「教へ」でありません。佛教とか、基督教とか言ふ言葉に、世の人のよく謂ふ、既成宗教、即ち出來上つた、出來合ひの、人造の、カスのこびりついた、佛そのもの、基督その人より遠ざかつた、力の抜けた、宗教が出來るのです。

かりに、本當の宗教は何かとあれば、私はすぐに返事がして見たいです。本當の宗教は、

（イ）人間本來の生活の事實そのものであります。（世の中から見れば道德以上の善き生活です。）
（ロ）力そのものです。
（ハ）神と我の一致です。
（ニ）無限の喜びであり、罪を犯すことの出來ないやうになつた、健全な、精神的肉體的生活です。
（ホ）神智、靈覺、湧いて泉の如しです。

宗教は悟りではありません。信仰のみの靜坐生活でありません。

止むに止まれぬ內的の發動力が、我が內に、不斷の回轉と、無限のエネルギーを出し、外部に顯はれては、人道生活、道德生活となり、世道人心を自然的に照し又、導く、說明を超越した力です。そして、世の人の言ふ宗教は、この力の說明に過ぎません。

私共が宗教に奧深く入れば入るほど、その人は、自然に光り、後光がさす筈です。

沈默してゐても、輝く人格、一見して、その高風、淸貌に打たるる人こそ、眞の宗教を體得してゐる人と見てよろしい。—湖翠　昭和三年四月號—

所謂基督教の破滅よりキリストの御出現を想ふ

西洋人はキリスト教信徒であると考へられて居ました。ところが最近、パリの大學教授、しかも基督教歷史のギンベル教授が「基督教の過去と現在」と言ふ本を著して、その結論に、「嚴密に言へば、西洋人は未だ曾て基督教信者にはなつて居なかつた。」と申しました。

かくの如く、現在のキリスト教は、根本的に解剖せられ、批判せられて居ります。さらば我等日本人は、どんなキリストを信じようとしてゐるのでせうか。

最早人造の基督教も、基督教會も滅亡して行くのです。ただ神の子キリストが、高く其の正眞正銘の御姿を顯し給ふのをお待ち申して、憧れ行く外はありません。

宗教の極致は、自分一個と神との關係を明かにするのであつて、斷じて、自分の屬する教派、教會の信條と、神との關係を論ずるのではないと考へられます。親一人子一人の關係が徹底して、始めてキリスト者となり、この一人一人の神の子らの自然的集團が、教會であると思ひます。東海道富士川にて。—湖翠　昭和三年五月號—

失敗記

いつか近江ミッション失敗記を書いて見たいと思ふ。創業から約半世紀、回顧すれば全く失策、失

敗の續出である。全く何も完全に出來たことはない。自己すら完成し得ない者共が、中樞に居るのだもの止むを得ない。自己完成の出來る人はキリストが不用である。しかし近江ミッションは、一刻一瞬間もキリスト無しで生きられない。キリストに助けられて歩んで來たのが、今の近江ミッションになつたのだ。

神の前、人の前に本當の血と汗の流れるやうな、失敗記が發表されるのも遠くはないと思ふ。

いろいろの人を預つた。そして大部分何ともかとも言へぬ始末になつてミッションから緣が切れ、自殺、殺人がある。詐僞、姦淫、反逆、放蕩などが同じ鍋の飯を食つた連中の中から出て來た。

勿論、宗教を求むる人はキリストの周邊に集散した連中と同じであつて、罪ある者、病めるものが來るのである。尤もたまには、百人に一人位は、ダイヤモンドで後光のさす偉い人物も居るが。

世間は教會を非難する。教會の奴は僞善者だと。誠にその通りであつて一言もない。僞善者だから教會に來るのだ。教會全體が世間並の惡人かと言ふとさうでもない。宗教的に言へば極惡非道の凡骨揃ひではあるが、世間の道德以上の道德を、自然にまた自由に守つてゐる。神から見れば大したことはないが、人間から見上げると偉い人達も居るのだ。玉石混交だ。そして玉に變る石が、玉になる處が教會でありミッションであるのだ。—湖聲　昭和三年十一月號—

田家朝

田園都市といふ文字を考へて來た近代の都會人は、そろそろ自分達の作つた、物質本位の、萬事機械仕掛で、鐵とコンクリートと、ガスと電氣と、自動車と飛行機と、エレヴェーターと地下鐵道の交響樂に殺人文明を見出したからであります。惡魔的モダーンな都會、東京とか、大阪に私共が行つて見ると、頭痛と呼吸困難と神經のイラダツを覺え、よくもこんな處に人間が住めるものだと思ひます。

昭和四年の御歌會に、かしこくも下し給へる、この嬉しい勅題を一寸その文字を見ただけでも氣持がすつとして何とも言へません。

「田家の朝」新鮮な空氣を感じます。さし昇る朝日を想ひます。樹木の靑靑とした、そして萬物皆生きて居る郊外の生活が浮き出して來ます。そして、人生の至寶である靑春と健康を感じます。

昭和四年の日本はこの樣な國體であれと、大內山の九重の奥より宣ふ金鈴の御聲に、私共は頭が自然に下ります。

金が出來ても、人は死ねば何等の益がありません。摩天樓が出來たり、高速度の電車が惡魔のやう

に走り廻つても、それは人間生活の本體には、あつても無くてもです。要は、本當の人生を歩むものこそ、天下最高の、最大の事件なのです。湖畔に生活する吾等は何たる幸福でせう。世界的の風光、決して瑞西の湖山に劣らぬ、我が近江は、人間を作る絶好の地であります。願はくば、近江の產物は永久に人物であれ、人材であれと祈らざるを得ません。

キリストは、野に咲く百合の花を指して宗教の奥を說かれました。

「荒野の百合花をよく見て悟るのだ。その生長の樣子をよくよく考へて見よ。」

勞働問題もなければ、黑煙りの上る人造絹糸や紡績會社もない。それでも人間世界の大富豪達が着飾つた姿よりも美しく、尊く咲き誇つてるではないか。衣食住の問題は、神が答へ神が取り給ふ。ひつきよう人生の外觀的荷造り道具に過ぎない。本當の生活は、神の心のまにまに、心の花を、惜しげもなく、荒野であらうが田甫であらうが、人里離れた山間の谷のまん中にでも全身全靈的に咲かすことだ。」と。

理想の近江ミツションは、昭和四年の勅題的生活に全生活を投げ入れるものであります。吾等の本心は近江七十萬人の文化向上のためと、その永遠の生命のために總てを捧ぐるものでありたく、そればかりを目的に生きもし、活動もし、また祈るものであります。—湖畔　昭和四年一月號—

本當の生活十ケ條

人間の本當の生活はどんなものかと、個條書的に考へて見た十ケ條。

(一) 自分が生きて居ることを人が喜んでくれる生活。

もう、よい加減に死んでくれても早くはないと思はれたり、「あの人はまだ生きてゐたのか。」などと言はれたり、「生きてゐようが死んでしまはうが、どちらでもよい。」と考へられたりせぬ生活。肺病になつても、癩病になつても、不具者であつても、その生きてゐることを人が喜んでくれる生活を言ふのです。

(二) 死に場所の定つた生活。

自分の最後は、かういふ有樣で結構であると、膽玉の据つた死に場所の見極めのついた生活、本當の宗教家は路傍の行き倒れにても、決して不名譽としない。キリストは十字架上の犯罪人として死なれたのです。自分の天職のためには何とでもなれ、骨が舍利となつても、一念巖をも貫く生活を言ひます。

(三) 何時死んでもよい生活。

壽命は天にあります。一切を神にまかせて魂の落着きある生活。妻子など、最愛のものの行末を心配すれば、死んでも死ねぬと申しますが、本當の宗教生活は、妻にも子にも、神は直接にその恩寵の御手を下し給ふので、必ずしも、自分のみを通じて神の愛を妻子に顯し給ふものでないことを信ずる生活です。

つまり信仰の生活です。そして自分の命ある間懸命に働くことです。

(四) 生き甲斐ある生活。

老年になつて一生を棒に振つたと後悔せぬ生活です。

(五) 今自分のしてゐることは、結局「積み上げて居る」何か有益な仕事だと信ずる生活。

(六) 世の中を明くしてゐる生活。

(七) 毎日心から愉快である生活。

(八) 必勝的生活。

自分の一生は、全體として總計算すると、惡に勝つた生活であつたと確信の出來る生活。

(九) 神まかせの生活。

(十) 永遠に自分は生きるのだ。イヤ、既に永遠の生命の一段階の生活を今してゐるのだと確信ある生活。

十ケ條のよい事づくめ、どうしたら、その生活に入れるでせうかと言ふ人は、直ちにこの心になり得る力を握らねばなりません。—湖聲　昭和四年二月號—

やつて見たいことの一つ

キリスト教會堂は、大體腰かけ式の講演會場のやうで、一二時間も集會と稱する一定の型式の中に沈默と、時時立つたり腰かけたりと、そして、讃美歌の合唱の中にある氣分と、說教や講演と、大勢の人が聞いてゐることを意識してゐるらしい祈りの聲などがあつて、結局は、大した深みを感ぜぬうちに散會となり、そのまま家路につき、教會の印象が甚だ稀薄であるままに、毎週毎週同じことを繰り返すやうな心理狀態にある人人の多いことを思ひます。

禮拜と宗教運動は、眞劍勝負なるを要します。何とか外國の教會の眞似より超脫した、もつと深い、教會本來の姿に、向上進步出來ないものでせうか。プロテスタントを新教と譯した人達の氣持が、私共によく了解が出來かねます。そしてまた、未だにプロテストしつつある人人として呼ばれた舊教、いや、カトリックと對立的にものを考へる英、米、獨のキリスト教に、だんだん力の拔け來つたのを、見る人は見ると思ひます。

魂の底より、全身全靈をうちこんで突入し來る人、倚り合ひ相扶けて、神の國の建設に一心不亂の人達を中心とするキリスト信者の教會は、今よりもつと、腰かけ式の臭味を脱して、寢食を共にして共同作業の神髄に生きて行く方法と精神を考へたく思ひます。そこで腰掛式、短時間主義の教會より、禪堂式長時間禮拜や天理教式の合宿主義や、特別の日月を毎年信者の向上に捧げ、出來れば一週間乃至二週間、牧師と信仰者の徹底的結合集會を作つては如何かと思ひます。—湖畔　昭和四年二月號—

支那の乞食哲學

朝起きると日本では、

「お早う」と挨拶をします。考へてみれば、「お早くお出精の御模樣で結構でございます。」といふことでせうか。

・アメリカに行くと、「グッド・モーニング」で、善い朝ですから「よいお天氣ですな」と言ふ日本語同然、「貴君に善き朝の光、豐にあらんことを祈る。」といふ意味です。支那に行きますと、「お早う」も大分變化して來ます。

「儞吃飯了麼(ニーチーファンラマ)」で「もうお飯をおすませになりましたか。」と第一着に挨拶するのです。

處變れば品かはる、浪速の声は伊勢の濱荻であります。しかし人間の住む地上の生活には、皆朝起きぬけに、お互ひに何とか挨拶する時は、誠に氣持よく、人の幸福を祝し合ふのだと思はれます。

この美しい氣分に滿ちて人生の旅を渡り行く時に、極樂世界や法の華咲く淨土や、天國生活に近づくのであります。支那の乞食は、その乞食であることについての哲學を持つて居ます。

「私に施しをなさると言ふことは、つまりあなたが幸運に巡り合ふ手段ですから、お施しをせられても御損はありません。老爺。」

と言ひます。誠にその通りですが、乞食自身の幸運はどうなるのでせうか、私にはさつぱりわかりません。自分の福分を犧牲にして、貴大人のために乞食をして上げるのだと言ふかもしれません。まことにのんきな有樣です。が、實際支那の貧乏人はみじめ過ぎるほど悲慘な生活をしてゐます。

昔、イヤ、昔と言つても二た昔よりは新しい、歐洲大戰前のロンドンで、私は、ある英國の乞食さんに話しかけられました。フロックコートの古手を着て、山高帽のはげたのを冠つた洋服乞食です。

「親愛なる兄弟よ、兄弟！　私にパンとバタの代を分配してくれませんか。」

と、そして、ツカツカと傍にやつて來て私の肩に手をかけました。

「日本の兄さん、何とか賴みます。」と申します。

乞食するのに、キリストの理想主義をふりかざして、四海同胞なんだから、私に食物を分けて下さいとは、誠に都合のよい理窟をつけたものです。

江戸時代の日本では、「兄弟は他人の始まりで、他人はつまりどこかの馬の骨で、そして人を見れば泥棒と思へ、家を出づれば七人の敵あり。」等申して、世の中は誠に渡り難い鬼ばかりの浮世として恐しがり、いつでも身を護るための正眼の構へで、ジリジリ、人の足許から頭のてつぺんまで、丁度近頃の宿屋の番頭が、玄關先に入つてくる、一現のお客の品定めをするやうに、見上げ見下して、少しも人にかすりを取らず、人を信ぜぬことを以て道德であるが如く考へた時代の有樣と、「お早う」と挨拶し、「人に善き施しをなさしめるための乞食である。」と言つたり、通りかかりの見ず知らずの男の肩に手をかけて、「兄弟」といふ無邪氣さが、どんなに純眞で人間らしい行爲であるかを比較して見て、何だか現代人のすることに微笑を感じます。

一體世の中は、だんだん善くなつて行くのか、まただんだん惡くなつて、しまひは地球が破裂してしまふのかどうであるのか、人によつて考へ方が違ひます。キリスト教の先生達の間にも意見が違つて、時時この問題で大騒動を起し、やれ純福音だとか、モダアンだとか、根本的信仰だとか、勝手に自分とその一味の名をつけて、宗教界の陣營的、亂世を作るのでありまして、宗派のあらそひをすることが、アメリカあたりで流行します。

が、見方によつて、世界がよくなるか惡くなるのか、いろいろ議論が出て何とでも言へる。すこぶる複雜な結論を見出すし、今の人間の智慧では測り知ることが出來ません。

私はこの問題に對する時、極めて樂觀的に考へることが宗教的だと思ひます。

「お早う」氣分、「グッドモーニング」氣分、「後世のために私共は生きてゐるのだと支那の乞食式哲學」氣分で結構であると思ふのです。—湖畔　昭和四年三月號—

人生の目的

「卑怯な奴は、幾度も幾度も死ぬんだ、大丈夫は一生に一度しか死なないぞ。」

これはシエキスピアの有名な、せりふの一くさりであります。

「一ぺん死んだら二度と死なねいや、さあ、すつぱりやつてくんなせい。」

お手打に會ふ處を助けられる、江戸前の勇み肌が、よく芝居のせりふに齒切れよく怒鳴ります。

敷島の大和心を人問はば、朝日に匂ふ山櫻花、で、散り行く花の思ひ切りのよさに、古武士は無限の感激を覺えたのです。

「人生は願はくば、短命なるべし」「願はくば、花の下にて吾死なん」

春、爛漫の花の色、今や眞つ盛りなる中に死を思ふ時、私共は嚴肅なる、淸高なる、眞面目なる思ひに打たれます。人生の最大な、最高な感激は、若き人靑春の生命が、その全力を捧げ、死を賭し

て、その人間本來の目的のために、死線を越える、眞劍の事實が生み出すものです。

キリストは、三十三歳、精力絶倫の絶頂に十字架に釘づけせられました。そして、その叫び聲を聞けば、

「我は生命のパン也、人このパンを食はば、永遠に生くべし。我が與ふるパンは我が肉也、世（全世界の人類）の生命のために之を與へん。」

とあります。即ち、己を殺して人を活かし、十字架につけられて、人の生命の永遠に活くる途を發見せられたのです。私共の人間生活をする目的は、全生涯を投じて、（事によれば短命に死するも）人間世界を天國化する。ただ、この一事を全うすることにあります。クリスチヤンは、これを確信して、一分間も、呼吸の止らぬ間は、之を念じてゐるものなのです。そして、この信念に忠實なるものが、永遠の生命を有すと言ふのであります。—湖聲　昭和四年五月號—

宗教について

宗教を持つ人と、持たぬ人、即ち無宗教の人があると言ふ。

私はさうは思ひません。

萬人皆、それぞれの宗教を持つてゐると考へます。物質主義の人は、神を、物に置き代へたばかりと知ればよろしい。

宗教といふ字の語源を探索すると「再考」であつたり、また「一致結合」といふことであつたります。日本產の字でなく、あの法律で有名な、ローマの產物であります。

人は、人生の目的について再考する時、宗教が生れる。神と人が一致結合する處に宗教があるのです。

私は、宗教といふことを「人の生活の總計」だと考へます。私の一生を通算する時、いろいろ雜多の思ひ、その思ひによりて行ひとなつて顯れた一切の行動は皆、私それ自身であります。

私それ自身の全體の「總締」は、私の宗教であると申して差支なしと考へます。一時的の熱狂した信仰、三四年の間に變化する信仰など、全くつまらぬものです。

一生を通じて、それが幾十年に亙つても決して變化しない、且、變化しない中に、自分の人生を渡り行く目的が一歩一歩と、明白になる。理想に向つて一本途を、眞つすぐに歩み行く心こそ誠の宗教心であります。

地上に於ても、天國の成就、天上に於ても同じ、神の國の完成。私は永遠に生きて、この一筋の途を行く。ここに本當の宗教があると斷言したいのであります。—湖聲　昭和四年九月號—

時間を超越して

物は見樣であります。

田毎の月で有名な信濃の國は、姨捨山の絶景を見た支那人が、

「なんだ、日本て國は、こんな貧乏國か。」と申しました。支那流に言へば、

「耕して、山嶺に至る。其國土の貧、以て知る可き也。」ですと。

湖畔の聲も二百號になりました。明治四十五年から指折り數へて、かつきり十六年と八ケ月、毎號缺かさず、イエス・キリストを叫んで來ました。筆者はその第一號に、

「我は聲である、湖畔に叫ぶ聲である、ガリラヤの湖水のあたりに叫ばれた、イエスの聲の反響である。」

と、二十三歳の青二才で、大膽にも近江七十萬の同胞に呼びかけたのでありました。

星移り年かはりて茲に一昔半を經過しましたが、仕事はこれからであります。大いに叫んで、神の聲が鳴り渡るまで、やつてやつて、やり拔くのであります。

ある人は早く年をとります。そして又ある人は萬年娘です。曆はたしかに必要ですが、曆や時計で人の年齢を計算するのは大した間違ひです。人生の半分は、

「まだ、年が足りないから、も少し、も少し。」と遠慮をします。そしてあとの半分は、「俺も初老だ。俺は五十だ。そろそろ老人らしく穩かにならう。」といふ引込思案になります。そして年を氣にしてゐると、全く手も足も出ぬデクノボーになつてしまひます。物は見樣であります。神を信ずる者は永久に生きます。だから、曆や時計に追ひかけられたり、年の寄るのを苦にしたりしません。人生は永久の春です。

「湖畔の聲」も、「年知らず、號知らず」の若き聲として、近江の國に、幾十年、幾百年も續くものとして疑ひません。

「イエス・キリストを信ずる者は限りなく生く。」

ここに二百號を越え行かんとする「聲」は、

「我は永遠の聲である。曆と、時計を超越して、人を、神に結ばんとする聲である。」

と、叫ぶのであります。—湖畔　昭和四年十月號—

十字架上の血

十字架の血に、清めぬれば

來よとの御聲を、我は聞けり
主よ、我は、今ぞ行く
十字架の血にて、きよめたまへ

× × ×

イエスを十字架につけしは、朝の九時頃なりき。
往來の者ども、イエスを譏り、首を振りて言ふ。
「十字架より下りて己を救へ。」
互に嘲弄して言ふ。
「人を救ひて、己を救ふこと能はず。」

× × ×

「講釋師見て來た樣なうそを吐き」と川柳で皮肉られるやうに、あらゆる正確さを保持して、事件の報告をするとしても、その事實の眞相を握ることから、まづ困難が始まり、これを人に傳へんとする時、また、非常な難關を突破せねばならぬことになります。イエスの傳記が、聖書の中に四冊ありますが、一つ一つその觀察の仕方が變つてゐるので、色とりどりで面白いには違ひありませんが、はつきりとピントを合せた一筋の傳記としてみようとすると複雜で見當がつきません。

事件の報告でも、いよいよ血を見た、となると、奇妙にも頭が變調子になつて、神經質な物の見方をするものです。
江州は安土の城中で、明智光秀が主人信長公の前で、森蘭丸から、さんざん油を搾られる。そしてその最後、面體を鐵扇でぴしやりと割られる。
「アツ」と傷口を押へる。それからその押へた掌を下して、じつと見れば血が滴つてゐる。忽ちに變る形相すさまじく、ぶるぶると肩を震はせ、發狂したやうな眼つきをする。それからが桔梗の旗上げとなり、本能寺となるのです。
昔の作者は、よくこんな場面を見せまして、「血を見た男」の、ヒステリツクな行動に、事件の原因をつけたりしたものです。
私どもだつて動脈を切つた時、噴水のやうに鮮血が流れる、いや、爆流するのを見て、氣が變にならぬものはありますまい。
生命が流れるのですもの。
私は、七人の屈强な男が、首を刎ねられた場面に出會つたことがあります。
ビクビク動く、首なしの胴體、醬油徳利をひつくり返したやうに、ドブドブと脈を打つて流れる、七つの鮮血の河。

切られた首の眼が、パチクリする、口がアグアグ動く。
いや、全く胴震へするほどに、今でもその有様が眼の前に見えます。
血は、奇妙な力を以て私どもに迫るものです。
大名が、何と家來が諫めても、うんと言はなかつた時、昔の武士は、腹を切つて血の忠諫をしたものです。
信長の青年時代は、可成り亂暴であつたらしい。「行儀作法もさながら狂人の如し」であつたのでした。御傅の家老、平手中務政秀は、「所詮賴もしからぬ主人を守り立て、事ゆべしとも思はざれば、忠諫の爲に、腹切つて、無き跡までも、せめて忠義の志を立てん」と、決定して一通の書を遺して曰く
「度度の諫言御用ひなき事、身の不肖に過ぎず、玆に因つて、自害致し候者也。あはれ、某が死を不便にも被思召ば、申上置きたる處一箇條にても、御用ひに於ては、草葉の蔭にても難有、仕合せに存じ奉る」
と、短刀を腹に突込んで死んでしまひました。信長公は全く驚いて、感涙にむせびました。「末代無雙の忠臣」だと言ふことで、その行ひを改め、一寺を建立し、「政秀寺」と命名し、
「自身御參詣、御燒香有、それより後、代代、この寺にて平手が後世を弔ひ玉ふ」とあります。
近頃でも、時時首相官邸の玄關あたりで、國家のために、腹切る男が飛び出したりします。

鷄一羽しめるのも、猫一匹殺すのも、百人中半分位は嫌がると思ひます。人に雞や牛を殺させておいて、自分はよい氣持ですき燒をつつくのは、あまりに虫がよすぎます。
私は血を見るのが嫌ひですが、時には牛でも殺すだけの責任を負ふものだ、と考へながら、牛肉を食ひます。
昔の人のやうに、殺生を人にさせて、自分はその血を流したあとの魚や肉を食ふばかりか、もしも鷄屋、牛屋の家に不具者が生れでもしたら、「親の罪が子に報ふ、あはれな商賣だ」など申して、人に血を流した罪をなすりつける心の淺ましさは、私共には合點のゆかぬ次第であります。（生きものを殺してまで食はなければならぬかと言ふ人が、大根を土の中からメリメリと引き拔く、芋をズタズタに一分刻みにする、大根も芋も生きもので、赤血を流さぬが、白い血を出してゐるのです。このところ、一休和尙の如く、「汝、腹中に入り成佛せよ」とでも悟る外に考へやうがありません。）
數千年もの昔、書き遺された文章の中に、人間の始まりは、一對の夫婦、アダムとエバを、神樣がお創りになつたとのことですが、その長男はカイン、次男はアベルと申しました。
カインは荒くれ男で、アベルは柔しい農夫でした。
或る野良の仕事最中に、カインは、「其の弟アベルに起ちかかりて、之を殺せり、神（エホバ）カインに言ひたまひけるは、汝の弟アベルは、何處に居るや、彼言ふ、我知らず、我あに、弟の守者な

らんやと、エホバ言ひ給ひけるは、汝、何をなしたるや、汝の弟の血の聲、地より我に叫べり。」

そして、カインは荒野に追ひ出されたとあります。

古代の人でも血を流せば、その血の聲が地下より叫び出して、神にその訴へが通ずるものと考へました樣です。

墓の石を建てるのは、その墓の下に埋められた亡き人が、この世の人達と交通するために、地下の住居から顔を出してゐるのだ、丑滿の頃には、墓が、幽靈の立ち姿となるのだ、と、昔の人が考へました。一寸死人のためにペリスコープやアンテナのやうな役目をするのが墓だと思つたのでした。

血は、生命の本流也と申しました。その血潮が地下に流れ込んでも、決して消えぬもので、「血の聲」は神に聞えると申します。

イエスの血は、イエスの生命の脈搏、いのちの實體を意味するのです。生命は目に見えません。しかし血は見えすぎるほど、派手に見える、紅の色で、生命の香氣、鼻をつくのであります。

イエスは地上生活の天國化の大理想のために、殺されたのです。

その時、流された血潮は、眞劍、眞實、正眞正銘の、まごころの顯はれであります。一生を通じて教訓を垂れ、說教されましたが、思想や教へだけでは、力が出ません。その理想のために身命を捨てられた、その實行の前に、萬世を動かす力が出て來たのです。

或る處のトンネル工事の取り合ひのため、土方の二組が殺氣立つて、白鉢卷、白だすき、日本刀、ピストル、竹槍、棍棒で武裝して、いざ、命の取り合をおつぱじめんとしたことがありました。暴れられるだけ暴れさせる間の、四斗樽は勿論、鏡板をぶち割つて、ひしやくや、茶碗で、アルコールが兩方の陣營に、殺氣と狂氣を、あふり立ててゐる有樣で、今にも入り亂れて、死人の山を築く光景でありました。

「まて、まて、まつた、まつた、双方俺の顔にめんじて、この處は、双方共一旦引いて下さい。必ず双方の顔を立てるから。」

と、腹に白木綿を一反も卷いた褌一つの小男が、短刀を握り締めて、兩軍の眞中に立ちふさがりました。

「とつつあん、今度といふ今度は、何としても了見出來ねい。引いて下さい、わし等の、果し合を見てゐて下さい。」

と、兩方の親方衆が承知しません。つひには小男の仲裁を、まどろしさうにしました。

「山椒は小粒でも、ヒリリと辛い。」日本は小國でも、大和魂があるぞ、と申すやうなわけで、

「よし、俺の言ふことを聽かないなら、俺は死んでも動かんぞ、この俺を、ぶち殺してから喧嘩をしてくれ。」

と、大手をひろげて動きません。兩方の荒男も扱ひかねて、しんとした時、この小男は、明晃晃たる用意の短刀をギラリと引拔きました。そして大地の上にドツカと腰をおろし、右手に持つた業物で、自分の右の太股に、ぐさつとばかり突きたてたのです。

「さあ、皆の衆、これで、この場は俺にまかせて、引いてくれ。」

と言ふなり、再び太ももより血の滴る刀を引き拔き、また、いま一度膝のあたりに、拳も通れと突き立てたのであります。

この眞劍な挨拶を見てゐた親方は、兩方とも感激してしまひました。兩方から、仲人となつた小男に取りつき、

「とつつあん、許して下さい。そんな手荒いことをせんでも、俺達が惡かつたのですから、あやまる、あやまる、まあまあ、待つて下さい。おい野郎共、繃帶を出せ、傷藥を出せ。」

てな有樣で、たうとう血を見たために、一切の喧嘩、一切の言ひがかりは、さらりと水に流して和合の祝杯を擧げたのであります。

神と人、理想と實際は、背中合はせの、仲違ひ、いさかひのある眞最中に、イエスは、

「十字架の血の扱ひ」を入れ給ひます。その流れる血を見て、誰が感奮せぬ人がありませうや。世の爲、人の爲、偉人豪傑と言はれた、イエス・キリストが、生命を捨て給ふのです。

ああ、我我、ああ、小さき私が、何條苦難を恐れ、死を怕れませうや、イエスと共に、同じ莚に坐つて、同じ繩目にかかつて見たい、と感じてこそ、はじめて人間の仲間入りが出來る譯であります。誠に十字架上のイエスの血は、私どもを潔めます。又高めます。そして、眞實に人として世を渡る時の、最良の指南車、指導原理となるものと考へます。—湖聲　昭和四年十一月號—

現代教會の行きつまりより新しき教會を想ふ

今までの宗教團體は、みな浮き草のやうに人の懷を當にした。

寄附金や、喜捨金や、政府の下賜金や、善男善女のへそくり金を基礎に、その財政計畫を立ててゐます。坊主長袖、阿彌陀樣も、金欲しさうな手つきをして御座るとも、言はれて來ました。

宗教は、獻金でその必要な經濟生活をせねばならんでせうか。

キリスト教會も御多分に洩れず、日曜日毎に集る、口だけの兄弟姉妹といふ、烏合の會衆を主體として、教會がある如く考へてゐる處に、最大欠陷を覺えます。

宗教が、悟りと稱する智慧を授けるところであつたり、儀式や魔術である間は、以上のやうな、通り一ぺんの浮き草團體の中に、實現してゐるかも知れませんが、最早大衆の時代は來ました。胡麻か

しや阿片的の宗教は、一切その光を失ひつつあります。

新時代のキリスト教會は、本當の意味の、兄弟主義の實行より生れます。生活を共にする、家族的の集團より出發します。

喜捨金でなく、血の出るやうな貴い金、收入の大部分を私有とせずして、地上の天國化の爲に捧げる、純眞の經濟實現から、力に滿ちた宗教運動があると考へます。

近江ミッションは小なりと雖も、この新教會の出現と出發のために、全力を致すものです。

宗教即生活の聲よ、擧れ、と叫びます。—湖聲　昭和四年十二月號—

旅から旅へ（その一）

世界の谷底グランド・キヤニオン、ハーミツト・キヤンプにて

アメリカの南部、カンザス、ニューメキシコ平原よりアリゾナの砂漠に來て見ますと、全く青磁色のセージブラツシュとシヤボテンばかりの石ころ交りの砂原を汽車で二日も通ります。處がこのアリゾナ州の北部にある斷層は世界で有名な谷で、平原がドカンと陷落して、底は濁水の渦卷くコロラド河になつてゐますが、凹みも凹んだり、目の下直線で有名な支那の赤壁の樣な崖が五千尺も垂直に落ち込んでゐるのです。

谷の長さ東西二百哩、幅は十四五哩から十八哩もあるんです。そして向ふ側の岡は平氣な平原で、山もなく平地が谷のあるのも知らぬ顏で、ただ廣廣と天に連つてゐるのです。斷層の岩石の色の樣樣であるのに加へて、空の模樣が時間によつて違ふライト（光線）をこの谷に與へますので、全く人智以上の驚くべき複雜な色彩が顯れるのです。

今日は六月の十五日、この地方の最も暑い時節であるにも不拘、ヴオーリズさんは谷底に行かうと言ひ出して、何といふても承知しません。

四十年前からこの谷底を狙つてゐて、これで六度アリゾナに來て、その目的を達せないのは終生の恨事だから、行くと言はれるのです。

「崖を歩くのですか。」

「イヤ、驢馬に乘るんです。」

「暑いでせうね。」

「早く、カラとネクタイを外して、ハンケチを首に卷いて、頭に濕布してついていらつしやい。」

こんな次第ですから、私も元氣を出して、驢馬にのりました。グランド・キヤニオン停車場から自動車で數哩谷の緣を見物しつつ、いよいよ驢馬にのる處に來ますと、勿驚、谷に下りるお客は我我二

人きりとなります。案内者は活動で見るカウボーイで、ツバの廣いフエルト帽に、首には黄色のハンカチを巻き、腰から下は皮の乘馬ズボンで、しかも、金物のピカピカ飾つてある例の荒馬馴らし専門の男ですから、私は少少悲觀したのです。と言ふ譯は、私は馬に乘つたこと、二十三年前に北海道の牧場で落馬しかけて、ひどい目にあつたのと、十七年前コロラドの銀山で、ヴオーリズさんと二人して乘馬登山したのと、それから富士山麓で、ヴオーリズさん、浪川さんと前後二回、駄馬にしがみついただけしか經驗がないのに、今度は世界第一の谷底指して、一の谷の逆落しのやうに馬をあやつつて行けるかどうか、内心餘り進みませんでしたが、俺も日本人だと大いに力瘤を入れていよいよ手綱を取つて、ドウドウ、ハイハイ、いや、ウオーウオーと、實は馬を止めるのを專門に、急坂を降りました。目の下幾千尺の岩を見ながら反り身になつて、鞍の上で崖を下りる、馬の首が低く前に下つてる、氣味の惡い落馬直前の氣持で、ヒヤヒヤしながら、とうとう谷底まで、數里の細道を下りました。とてもお尻が痛くて景色どころの騒ぎではありません　今原稿を書いてますと、ヴオーリズさんは、日燒したまつ赤なお顔でもう高いびきなんです。

「こんな急な坂だつたら、馬から下りようかと思つた位です。」

と、さすがのヴオーリズさんも弱音を吐きました。

そして、谷底から一千尺程ある、この崖下のキヤンプで夕食をすませて、いよいよ今日一日を無事に送らせて下さつた神樣に感謝して、休まうとしてゐるのです。西日の影が、高い向ふ側の岩にさす色の變化を一時間半もあかずに眺めてました。

私が大聲を擧げると、木だまが谷から谷へ四度も響きます。

鈴蛇（ラツトル・スネーク）の音、鈴虫の聲、その他いろいろの山鳥の聲が今一ぱい聞えてます。思ひ出せば明治三十八年八月十日、私はヴオーリズさんと二人で、富士登山をしました。

私はたしか十六才、ヴオーリズさんは二十六才の時でした。二人してドシドシ登りきつて、日の暮れ方には胸突八町まで行つてました。私はその前の日腹を痛めて弱つてゐたのに、元氣を出して、ヴオーリズさんについて行つたのです。

富士山のあの扇形の影が、美事に伊豆半島を覆つてゐるあの壯大な景色を見て、始めて私は天地に神あり、造物主ありと信ずるやうになつたのです。

その晩、頂上の淺間神社の一室に、二人はあるだけの着物を身につけ、大蒲團六枚を着せて貰うて、同じ床に寢たのでした。私の一生のうち、あんな寒い目をしたことがありません。ところが今日はどうです。富士山に登つてから二十五年目に、ヴオーリズさんと私は世界の谷底に下りて、今でも百十度に近い炎熱に一しよに打たれて居る次第なんです。「寒暑を共にす」を文字通りにやつてます。

明日は四時に起きて日の出を見て、六時半出發、涼しい間に崖を登るんですと。

明晩あたりカリフオルニア行の汽車の中で、さぞさぞお尻の痛いのと、兩足の變なケイレンに、惱むことだらうと思ひます。然しもう上り坂で樂でせう。それにあと九日して秩父丸の船客だと思へば「歸心矢の如く」少少の苦難は、喜んで忍べばよいのです。

とにかく、グランド・キヤニオンはやつぱり下に降りずに、上から見下した方が絶景だと思ひます。明晩はしつかり上から見ます。

× × ×

四月十七日

想つた通り日の出は平凡でした。太平洋の日の出を見る伊勢の二見、または富士山上と、比較のとれたものではありません。何しろ谷底から日の出を見るのは變態ですからね。

昨晩一ばん、炎暑のためにとうとう寢つかずに、朝の四時をジツと待つてました、全く地獄の釜入りの練習でした。

早起出發、二十何哩の山道を上り下りして、午後四時、漸く頂上、イヤ、元の平原につきました。全くご苦勞樣です。しかし、上より向ふ側を見渡す、このグランド・キヤニオンこそ、全くナイヤガラの瀑以上に、世界に誇るべき谷であることが、はつきりと印象されてます。

これからアメリカ・インデイアンの踊りを見て、谷の夕陽を見つつ汽車にのりますと、明日はロスアンゼルス、懐しい太平洋が見られ、新しい魚が食べられると思ふと、少少よい氣持です。

昭和五年六月十七日、午後五時、フレツド・ハーヴエー　ホテルにて。—湖畔　昭和五年九月號—

新しき決意と希望

近江八景。比良の暮雪、三井の晩鐘、粟津の晴嵐等等と並べたてて見ると、あるすがすがしさを感じます。山と水の美しい調和、それは湖國の自然でありまして、何だか、お正月のやうな氣分を想ひ出します。

琵琶の湖畔にあつて、過去、千年の昔を想ふとき、このあたりに、傳敎大師最澄や、弘法大師空海等が住んでゐたり、旅してゐたり、探險や調査をして元氣に、佛法と王法の關係を考へたりしてゐたまつ最中となります。千二百年昔の奈良の都には、大佛さんがどつしりと、あの巨大な金の身體で坐り込んでしまつてます。

ああ、佛敎千數百年、そしてわが湖畔の天地は、勿驚三千百八十七軒の寺院が、昭和五年一月一日を迎へる除夜の鐘で、今更ながら我等は、佛敎寺院網中の人間であることを悟れよかしとこそ、ボーン、ボーンと鳴り響かせてくれます。

近江の人口は、六十七萬人餘ですから、人口二百十人宛に一ケ寺です。この二百十人を社會統計の物差であたると、

一ケ寺を支へる總人口、二百十人、內半分は老人と子供です。

差引、働ける人、百〇五人、內病人と姙婦で七人五分六厘。

飲酒、放蕩、不具、癈疾、發狂、犯罪、四人六分二厘、小計十二人。

差引、健在者、九十三人、內半分は婦人につき、つまるところ男の數、四十六人五分。

この四十七人足らずの成年男子によつて、寺が一ケ寺づつ支持されてあることになります。勿論近江の寺院は、敕願寺であつたり大本山であつたりして民衆に立脚はして居ませんが、かりに、大衆の數と寺の數を計算すれば右のやうになるのです。

こんなに緻密に寺院網がはられ、千年以上の努力が籠つてゐるのに不拘、大衆と佛敎の信仰は、本質的にぴつたりしてゐる樣子もなく、また今、近江にある佛敎家が、近江人の社會生活に働きかけてゐるとは考へられません。

私は、絕大な悲しみに浸ります。落膽です、失望です。

キリストの敎會も、今のまま千年もすれば近江の國に、數千軒出來るか知れませんが、この人間生活と沒交涉な、寺院と同じ運命が待つてゐるのではあるまいか。

「眞理は常に路傍にあり、斷頭臺上にあり。」と、哲人の叫んだのを想ひ出します。

千年も努力して、こんな賴りない宗敎運動の結末になるやうなことは斷じて嫌です。私共は、本眞劍の、キリスト魂を作り上げ、人間生活の有樣を根本的にやり直して、地上の天國化を計畫し、どしどし身の廻りからやつて見たくあります。これが、年末と、年始の決意であります。

—湖畔　昭和五年一月號—

世界の中心を極めるまで

——ヴォーリズ先生來朝二十五周年紀念講演——

スコツトランドのある宗敎大會に出席された矢部さんが、自分のことを、ある英國人に紹介する必要があつたので、

「私は日本人で、大津の近くの膳所の町の牧師です。」

と話されますと、

「さうですか、大津といふ所はどこですか。」

「大津は京都の近くの町です。」

「京都は日本のどこにありますか。」
「大阪の近くです。」
「大阪は東京の近くですか。」
「大阪は東京から四百哩位南西の大都會です。」
とうとう、膳所や大津が合點行かぬ樣子だつたさうです。矢部さんは一寸考へ直して、
「私の住んでます町は、日本第一の湖水、琵琶湖の南端にあります。」
と、も一べん違つたことから自分の町を說明されると、
「ああ、さうですか。それでは、ヴォーリズさんの居る、近江の八幡の近くですね。」
と言はれて、びつくりしたとのお話でありました。
「ぢやあ、京都といふ町は、近江八幡の近くなのですか。」
と、疊みかけられ、二度びつくりしたとのことでありました。
この問答の相手の某國人が、全く日本地理を知らぬのであきれますが、同時に、過去四半世紀の間に、我がヴォーリズ先生が世界の地圖の表に、强く、大きく「近江八幡」とほりつけて居られる事實に、驚歎してよからうと思ひます。全く人物あつての、町であり、人物あつての、國であることを悟れます。

良寛和尙の言葉に、
「災難に逢ふ時節には、災難に逢ふがよく、死ぬ時節には、死ぬがよく、是は災難を、のがるる、妙法にて候」
とあるやうに、ヴォーリズ先生は覺悟をきめて、日本の土となるべく、琵琶湖畔に埋骨することを、生涯の結末と決心して、一切を打ち込んで、自給傳道の生活を四半世紀一歩も退かず、佛敎的にいへば、不退轉の日日を送られたのであります。
この事實に感激して、私等は神を知るやうになつて、同心協力、身命を投入して、私有財產目當の舊い考へを捨て、天に寶を積む、精神をもつて、全く身分不相應のキリスト敎傳道に、散財して悔いない次第であります。—湖聲　昭和五年三月號—

致　良　知

小川村の中江藤樹先生はよく、この三字、致良知を書いて人に與へました。
「知つてゐることを實行せよ」「よく知ることを實際に致せ」「實行したものを始めて知るのだ」との意味を悟ればよろしい。ジョン・デュイ博士は申します。

「子供が物を覺えた」といふことは、教育の目的ではない。「子供が物を體驗して、これを熟知した」といふところまで、進出せしむるのが誠の教育である、と。

昔から畠水練と言つたり、論語讀みの論語知らずと申したのはここであります。

或る劍術の下手な武士が、腕に覺えのある武士に果し合を挑まれて、とうとう斬り合をした話があります。恐しい太刀合せの修羅場の前、靜に羽織を脱ぎ、たすきをかけ、袴をつり上げた下手の武士は、心の据つた男でした。

いよいよ刀を取つて相手に向つた時、エイツと氣合をかけると同時に、痰つばを敵の顔面に吐きかけました。そして、はつとしてゐる大の男を、バラリズン、と切り下げたとの事です。そして、「人を斬るのは、この呼吸でなくては、」と申しました。

人生は斷の一字あるのみと申します。少少の學問、少少の腕よりは、腹の出來不出來が物をいひます。

宗教の研究といひ、宗教學者と申しますが、研究や學問は、宗教の實行——即ち宗教生活の實際——があつてから始めて、本當の研究と學問が出來ると言ふものです。

あれも知つてゐる、これも合點だと申す人は、或ひは顔につばを吐きかけられて、ひるむ處を斬られる武士に似てゐると思ひます。

實行力そのものの如きキリストは申されました。

我この言を聽きて行ふものを磐の上に家を建てたる、智き人に譬へん。雨降り、大水いで風吹きて其家を撞てども、倒るることなし、これ磐を基礎となしたればなり。

實際の宗教生活は、この磐を掘り當てる唯一つの道と思ひます。

昭和五年、二、二十七、勃海灣内　さかき丸のサロンにて。—湖畔　昭和五年四月號—

近況錄

近江ミツション第二十六年の春、ヴオーリズ先生と近況子は、加奈陀と北米合衆國へ出發せんとしてをります。七月歸幡しますまで、近況錄は本誌の編輯部で綴られます。

大正九年三月以降、日本財界は、急轉直下今年こそ不景氣のどん底だ、いや來年で景氣が回復するんだ。など、毎年毎年口ぐせのやうに言ひながら、既に十年です。

天變地異、地震があつたり、人災、銀行騷動があつたり、日本の金がドカ下りをして、アメリカの一圓が日本の三圓もしたりしました。隣國支那は、内亂がつづく、等等等、よくもこんな内憂外患が續いたものです。大ていの土臺骨では、財産半減、いや倒産の憂き目を見る有樣で、銀座のどまん中

で、綺羅を飾つてゐる商店が、殆ど皆欠損を出してゐる樣子で、濱口內閣のキンシュク節約、物買ふな政策が、とても、ドギツク商工階級を締めつけ、米價は下る、生糸も下る、株は暴落、何と見渡す限りの荒野原の如き、經濟界であります。

もう惡化材料も出きりで、これ以上崩れやうがないと言うてよろしい。

日本人は、よくもよくも堪へ忍んで來たことであります。

近江ミッション財政の歷史を知つてゐる近況子は、過去四半世紀に、全く、摩訶不思議、キリシタン・バテレンの法以上に、天佑を毎日繼承して來たことを、今更ながら驚くの外ありません。

「神の國とその義しきを求めよ、されば生活必需品は、與へられる」と、宣ひしキリストのお言葉の、如何に的確であり、事實であり、且つ迅速であるかを、近江ミッション全體の歷史を以て、證明してあまりありと申せます。

借金しました。數十萬圓も赤字の出た時もありました。涙も留めどなく出た。經濟上の不安と、どん底も、たんまり味つて來たのであります。

「神與へ、神とり給ふ、神は讃むべきかな」と、狂瀾怒濤の眞つただ中に、多數の家族團員の將來を想ふとき、何とも言へぬ心になつたこともあります。然し、宗教、否キリストを信ずるものには、斷じて行きつまりのないことを自覺して來たのであります。

「人が人を養ふ」これは不可能のことです。自分の妻も、自分の子も、一人一人神樣の嫡流で、一人も、神の養ひ給はないものは絕對にないのであります。

近江ミッションは、財的破產をしても、神樣はその最後の赤ん坊の一人まで、豐かに護り給ふのであります。

要は與へられると與へられぬの區別なく、ただ一向に我等は、神に向つて直進すればよいのであります。

近江の國の神國化、天國化、極樂化のため、我等は全力を致して他事なければよいのであります。食へても食へなくても、石にかじりつき、砂を食つても、踏まれても、蹴られても、琵琶湖畔は必然、天國になるのだと確信して、近江ミッションの皆は、枕を並べて打ち死にすれば、あとのことは一切心配がないのであります。

「七度生れ來つて、湖畔の天地を守らん」であります。永遠の生命、永遠の努力、久遠の祈り、久遠の信仰をもつて、此の身を神に捧げるのであります。—湖聲　昭和五年五月號—

旅から旅へ　（その二）

阿片窟

ある日、阿片窟に行つて見ました。

生きた人か、死んだ人形かわからぬやうになつて、アンペラ敷の上に寢そべつてゐる。薄汚れた、淺黄服の中華人、よく見ればびろうどの夢を結んで居るであらうやうなほほ笑みを、かすかに片頰に現はしてゐる青年さへ見られるのでした。

三四度、ぱつぱつと煙を吸つて、濛濛と悪鬼のやうに、毒煙を室内に漲らしてゐるクーリーもありました。

彼等は、一日炎天の下に、又氷のやうな滿蒙の天地に働いて得る處、僅かに四五十錢ですが、三ぷくの阿片のために、喜んで金三十錢を投じるのです。

「起きな、起きな、起きば浮世の夢を見ん」であります。

人生は快眠にあり、虚無にあり、百年を一日に縮めて、美しい夢を見ようとする心。

中華六千年の文明も、まだ、こんな人を救ふ力がないのを悲しみました。

私は、阿片窟の煉瓦小屋で、進められるままに、ぐぢ魚の天ぷらを、兩手に持つて腹一ぱいたべて見ました。

銅元(トンユアル)三個（日本の金一錢に當ります。近頃は支那開闢以來の安銀ですから）で、魚河岸あたりの天ぷら一人前たつぷり食へる國を、驚いた次第です。

これは大連の碧山莊のことですが、人間が食料問題で食ふことに困つてゐると言ふ學説に、全く反對の事實を見た心持ちでした。

地球は小さい、しかし、全人口まだ二十億に足らぬ今日、少しばかり考へたらその食物位は、揚子江とミスシツピ河の流域で、すつかり賄うて餘るだらうと考へられます。

支那毎年の戰亂、饑饉、水害、土匪等が如何にあつても、支那人は全滅どころか、阿片を吸うたり、麻雀をしたり、底拔け生活をもしながら、洋洋、幾千年暮して來てゐるのです。

如何に造物主の神樣の、お辛抱の大なるかよと「あきれ申候」とでも言ひたい氣分になります。

ノアの洪水物語を創作した文士が、今の世に生きてゐたら、現代の世相を見て、地球全滅物語をどんな風に作り上げるでせうか。獨乙人の想像、メトロポリス位では、とてもとても及ばぬ奇想天外的のものが出來るかも知れません。

私は、隣國支那に行く毎に憂鬱になります。何故、神は私を、山東省の片田舍にお生み落しにならなかつたでせう。ああ、私如きは、どんな目に遇はされても、苦力として追ひ使はれても、とても不平なんか申せぬ、悪人、凡人をよくも日本に生かして下さるばかりか、神の國の建設などと、大望を考へさせて下さる大御心を想ふ時、全く難有さに涙こぼるる心地です。

新聞廣告の、南無妙法蓮華經居士が、大臣、大將に會ふと、涙滂沱として下ると書いてあります

が、私は、大連の埠頭の筋骨隆隆たる苦力諸君を見て、心に涙百行の苦惱を覺えます。

「あの人達の中から、五六人英雄が出ませんかね。藤山さん（藤山さんは苦力一萬五千人の親分筋の法學士です）一つ特別に優秀な青年を、近代教育して見たらどうでせうか。一人の男を年二百圓で養へるんぢやありませんか。

長崎の天主教が、中學生を全部教會の費用で生活を支へ、教育を施し、その中のよいのを、一生不犯の神父、に仕立てる有樣を見て、私は何とかなりさうなものと思ひますが、どうでせうね、藤山さん。」

× × ×

阿片は、法律で誰にも禁止されて居ます。日本領土や關東州では。

それでも常習的に飲まねば心身堪へられぬまでに中毒したものには、特に阿片許可票を與へて飲ますやうになつて居ます。たばこと同じ吸煙をするのですが、これをやりかけると、何もかも忘れて、家倉を煙にするばかりか、人生を燒き盡す恐しい業火となります。阿片なしには身體が言ふことをきかぬまでに病的になるので、次は、コカインの注射を、或時間毎にしなくては文字通り進退谷まつててんかんの如くぶるぶる震へ出し、恐しい悲鳴を擧げる。生きながらの地獄生活をするやうになりますから、死を賭して金を手に入れ、藥屋にかけ込むのです。「老爺（ラオヤ）タイタイ」（タイタイは奥樣といふことです）西や東の旦那樣、一文やつて下さいと、支那もどきに私について來た女乞食の顔を、幾つも幾つも想ひ出して、今でもぞつとするのです。

私は、煙草も實に不潔な、いやな、人の迷惑をかまはぬ、毒煙御免の惡習慣だと思ひます。容赦なく、近所から煙を吹きかける人は、一體人間的の禮儀を知つとるのかと思ひます。清き空氣は、清き飲料水と同じものです。その水源に惡臭の水を流すのは、誰だつて許せないでせう。それなら空氣を毒ガスでけがすばかりでなく、自分の肺まで入れたものを、一二尺隣りの人に遠慮なく吸ひ込ますのは、本當にひどい奴と思ひます。汽車の中や、自動車の中、電車、寢臺でやられると、身を切るやうにつらいです。

そして日本で、毎年數千萬圓の火事損害は煙草の吸ひ殼だし、一年二億七八千萬圓と空費する馬鹿は、いつ中止になるでせうか。鼻は斷じて煙突ぢやないではありませんか。

煙草を吸ひ吸ひ、阿片は野蠻だと言ふのは、私にはわかりません。

一體人間は、不必要なことに金を使ひ、力瘤を入れる不思議な動物です。

ピカピカ光る裝身用のダイヤや寶石、酒、煙草なんか、世界になくても誰も困るまいと私は思ひます。ピュリタン的でなくても、これ等を追ひ求むる心は、變態的な野望として人間界より撲滅したく存じます。

×　×　×

大連の町で、支那栗を買ひに行きました。永年大連で、その人ありと知られて居るIさんがお一しよに、栗屋の店に入つて値段のこと、品物のよしあし等、支那語で話して居られました。

「も少しまけて置いて下さい。何しろ澤山買はれるのですからね。」

と言はれる。向ふの商人は、

「いや、私はあなたと古い友達だからまけません。」

と言つて、すましたもので、ずんずん六貫目の栗を二つの籠に入れて、荷造りしてしまひました。

私は、とても面白い挨拶だと思ひました。古い友だちだから、初から親切に安くしてある、だから一文もまけません、と言うたのです。

×　×　×

上海で俥にのります。

乘つた人の人品、風采で値段が違ひます。紳士風した人が、何だ、俺は高い金を拂つて馬鹿を見た、と言ふ人がありますが、それは支那で通用しないさうです。

「旦那は、よい洋服なんか召していらつしやる身分ちやありませんか。少少は高く出したつて、よろしいでせう。」

と言ふのが、中華心理なんです。

×　×　×

うどんやが店をしまふ、夜の十時頃に、

「おうい、黄包車、俥引きの兄貴達、これから店のうどんを安くします。うんと食べて下さい。」

と大聲をあげると、大勢の車力が集合して、普通十五錢のうどんが、二錢位で腹一ぱい食べられるのですと。

これは、上海の内山大人より聞いた話ですが、如何にも、社會共存的に出來て居る支那を見るやうな話ぢやありませんか。

×　×　×

青島に二時間あまり上陸して、獨乙時代の市街、日本時代の施設等を最大スピードで見て廻りまして、しまひに美しい海岸に出ました。

そこに、イルチス砲臺があります。鐵筋造りの二階建の上に、大砲がそのまま三本、一かたまりに海に向つて並べてありました。

廢墟となつた古戰場の樣で、砲壘内の將校室、兵員室、炊事室等、カンテラの火をたよつて見て廻りますと、何だか歐洲あたりの監獄のやうでありました。獨乙が何だつて、遠い支那邊までやつて來

て、こんな物騒なものを仕かけたんだらうと考へますと、人間といふ奴は、案外智慧の足らん動物だと思へてなりませんでした。

孤立無援の山東省の一角に、これ位のことをして、東洋の天地を白眼視してゐたカイゼルの昔が、二千年も前のことかと思へば、つい十數年以前のことだつたと、今更ながら世の中の移り代りに、その無常迅速さに驚くものです。

十八年昔、ベルリンのブランデンブルグ凱旋門外で、銀色の双鷲を獨乙兜の頂きに輝かせて、ぴかぴか光る獨乙皇帝が、素的な銀色自動車に悠然と構へて、私の目の前を、大風の如く通過された光景が、今でも眼に遺つて居ますが。

青島の岸頭に立つて、私は世の中の變化の速さに、愕然として、イルチス大砲にドツカり腰かけて、瞑想したのでした。

× × ×

話は飛んで京城に移ります。

朝鮮は古い國です。その國の首府、京城の光熙門外に穴居民が居る。と聞いただけで、すぐに飛び出して見物させて貰ひました。

「土幕里」と言ふのださうです。砂山のてつぺんに四角い穴を掘つて、藁の屋根、新聞紙の天井、白紙一枚の窓、莚の入口、莚敷の居間、入口わきに炊事場があつて、とても簡易な生活でした。

まづ金三圓位と、二三日の穴掘りで、一軒の家が出來るのです。

これも、もうだんだん無くなるさうですから、よい歴史的の穴居を見たと、今でも喜んで居ます。

土蜘蛛とは、こんな連中を言ふのでせう。―湖畔　昭和五年五月號―

旅から旅へ（その三）

エンプレス・オヴ・カナダ船中記（加奈陀女皇丸四百八號室）

三月二十七日（土曜）

太平洋第一の優秀船である。

船の長さ一町以上、船室が五階あつてエレヴエーターがあるばかりか、溫泉浴場があつて、寶塚以上の水泳設備から子供室等、帝國ホテル以上の應接室、書齋、カルタルーム、食堂、全く美麗を盡してゐる樣子、まづ洋上の浮城、夢の國である。勿論我我（ヴォーリズさんと私）は二等室に頑張る。各室滿員で、一等五百人、二等は百何人で、三等スチアレージ（雜居室）を入れ、船員を入れると一寸、二千人近くの同行同船の航海だ。二等室の日本人は私一人。そして特に東洋人だといふので四人

前の船室を獨占して居る。このあたり、全く排斥か優遇か見當がつかぬ次第で、とても樂樂と八日間（いや途中で一日を儲けるので實は九日だが）暮せさうである。（ヴォーリズさんは西の宮のマン氏と同居）速力は二十ノット以上、横濱を三時に出て、三浦三崎の城ケ島は四時半、犬吠が六時半、日没の頃沖から見て通る。夜九時になつてもまだ日本の燈臺の火が見える。多分、大洗あたりであらう。磯ぶしでも聞えさうな處を通つて居る。

しかし、針路は北を向いてゐるので、今頃は三陸沖、夜半には北海道の東で、八日間は一切島影を見ずに加奈陀につくと船員は言つてゐる。

「今宵出船か　お名殘り惜しや　暗い波間に　雪がちる」

だれかサロンで藤原義江のレコードをかけてゐる。時時一等の食堂から、フイリツピンのジャズバンドが聞える。船は大きくて少少の波は知らぬ顔の半兵衛以上の、不動明王式行進である。つまり動搖がないから不動明王といふ處だ。

さあ、それではそろそろ寢たり讀んだり、又かうして原稿を書き書き太平洋を鼻唄の間に乘り越える次第で。

「ドント、ドント、ドント波のり越えて」でなく、波を船尾に捲き起しながら、三萬數千噸の巨船は魔法のやうに東へ東へと飛脚して行くのである。

三月二十八日

東への航海で、朝日に近づくために、昨夜の十二時に三十九分時計を早めた。今日は又三十六分早まるさうな。

大西洋の航海に、あるインテリが一等船客になつた。そして話し相手を探して見るが、一向手ごたへがない。ダンスとタバコと、ジムの生活、スポーツと異性と、御馳走の世界であつた。「船長、智識的の話し相手はないかね」と問へば、すぐにキヤプテン曰く「近頃はインテリ連中、大學教授は皆二等か、ツーリスト三等ですよ。」と言つたとのこと。この船の二等客の生活は、先づ月收五百圓以上の家庭でないと出來まいと思ふ。

毎食ホテルの食事以上で、日本郵船の上海丸や、大阪商船の蓬萊丸（臺灣行）なんかは遠く寄りつけまいと思ふ。これ以上食ふ人があれば、それは食道樂のお化だ。ローマのネロ皇帝だと思はれる。勿論我等の英雄、豐臣秀吉や德川家康は、こんな上等の料理を食つたことはないこと請合である。

北米大陸まで、四百五十圓の光はたしかにある。昨日横濱を出てから一切日本語は封じられた。全く英語と支那語の世界である。

昨日からウイル・デユラントの新著「哲學の家」海老名先生の「キリスト教大觀」それから諸雜誌を讀みふけつてゐる。何れも愉快な本である。

それから、英文の聖書を船室で音讀して、口馴らしをやつてゐる。何しろ向ふに渡れば、昔のやうに、演說や說敎が待つてゐるもの。幸にも、今日は大分日本語を忘れて、英語ばかりの世界を樂しめるやうに、アタマが一寸バタ臭くなつたと自信してゐる。

船は少しも搖れない。ただ機關室の振動が轟くにつれて、船室の何かがカタコト小さくささやくばかりである。

漸く今頃では、青森の眞東四百哩位の處を北東に進行してゐるのである。勿論大海原の外一物も見えない。

鳥も通はぬ八丈島以上の沖だ。そして、青海といふ圓形の盆の中をこの三萬噸の巨船は走つてゐるやうである。

三月二十九日（土曜）

今日は合計二十三時間と十五分で一日である。一寸四十五分短縮でも、何だか早く日が暮れるやうな氣がした。夕食の後サロンで、蓄音器を使うてゐる間にもう十時である。

いよいよ北太平洋だ。名物の霧がかかつて、雨のしぶきが甲板を濕らしてゐる。相當の大浪で、白い浪の花が見えても、このエンプレスは知らん顏である。ドンドンのろい汽車以上で東への道を歩いてゐる。

支那の山東省で四十年、近頃四平街に移つた老宣敎師が、朝食堂で聖書の研究會をしてくれる。集つてくるもの二十人位あつて、交チン支那、カンボジア、フイリツピンあたりの宣敎師や、學校敎師がのつてゐることがわかつた。船客のリストによると、この船の一等室に日本人一人しか居ない、二等船客に私一人といふわけで、全く國產奬勵的で、外國船には日本のお客が少い。歸りは郵船の秩父丸だから、或は大いに日本趣味の太平洋であるかも知れない。

昨夜少少、支那式洋食と外のものを混食しすぎたため、胃に變調を來したので、今日は減食の一日であつた。そして目的通り、今夜あたりより元氣回復した。船は英國船なので、米國式にルームを溫めないのが缺點である。一寸風邪氣味になりかけたが、それもどうやら押へつけた樣子。何しろ旅で病むほど、氣のきかないことが世の中にあらうかと思ふので、絕對健康のレコードを持つてゐる私は一寸今度は出帆早早ヘマをしたわけである。これであとがよければよい警報であつたと思へばよいのだ。

一日中寢たり、讀んだり、全くの大名生活のやうである。今日は「日本經濟革命史」と大谷崎氏の小說を讀んで悅に入つてゐる。聖書は創世記である。

三月三十日（日曜）

今日は全行程の三分の一を過ぎた。いよいよ棒太の眞東である。朝から深い霧に鎖されて、船は氣

笛を鳴らしてゐる。一寸悲鳴を擧げてゐるやうに聞える。船も少少動搖してゐる。へさきあたりは可成りのピッチングだ。一萬噸以下の船なら、テーブルのものが落ちる位である。勿論、船影は一艘も見えない。

長い廊下を通つて見ると、舳には雜居客室がある。支那人の賭博場がある。貝ボタンを一つかみ眞鑄の皿で覆せて、四つづつ數へて行く、そして最後に、〇、一、二、三、の四種を當て合ひするのだ。「買買」と、私に賭けよといふ。私は首を横に振つて見てゐるのである。

支那料理店が廊下に出來てゐる。北京ダック、チャーシューに、肉マンヂュー、蕪にニラにニンニクである。天津の蜜柑、安煙草、スリッパー、火酒、うどんにせんべい、何でもある。船の中でも商賣する廣東人。それから小鳥がある、到る處に美しい鳥籠にカナリヤである、全く到る所青山ありを實現してゐる。

日本室は雜居の靈棚である。赤ん坊が泣いてゐる、全く瀬戸内海の三等と同じである。フイリッピン人は船尾に、俺達はアメリカ人扱ひだぞ、とでも言ひさうにして住んでゐる。地獄の沙汰も金次第、船の中の差別は金のせいとはいへ、とても大變だ。

三等室には交通が許されてゐないので、要領よく行かねばならぬ。つまり流行病の傳染を恐れるからだと。私共は二等だが、まづ十分以上で、一等室に出かけることも時時ある。今日は日曜日で、船

長司會の朝の禮拜があつた。堂堂たる一等食堂に集るもの三十人位である。船長はお坐なりの、聖公會祈禱書を朗讀して、さつさと引き揚げた。

夜は二等客室で、西の宮の友人マン先生が感話をした。朝は例の馮玉祥の牧師であつた。ゴーフオース博士の聖書研究會にも列した。

やつと今日あたりから船室が溫かくなつた。これで氣持が直つて常の身體となつた。そろそろ明日あたりから、仕事（原稿かき）にかかるつもりをつける。一日中讀書、又讀書であつた。

三月三十　日（月曜）

東經百八十度を越えるので、明日もまた同じ三月末である。これで太平洋を半渡りしたことになる。天氣が直つたので美しい日沒を霧の向ふに見る、日本畫であつた。アルーシャン群島あたりの黑い鳥が一羽船尾に見えた。

追風と黑潮にのつた本船は、二十一ノット以上の高速度を出してゐる。三月三十日は四九四ノット走つた。籠の鳥のやうにデッキをうろついて散歩をした。この船は全く高級の溫泉場以上である。潮湯は何時も用意してあるし、銀座以上のアイスクリームがベル一押で食べられるのだ。それから食卓には西瓜、パパイア、葡萄、バナナ、林檎、望み次第である。何と人間も贅澤になつたことよ、これで二等なのだ。

朝は聖書研究會に出席、蘇峰先生の「老記者叢話」を讀んだり、キャンベル・モルガンの一キリストと聖書」を味つた。昨夜は朝の二時半まで、いろいろのものを讀んで有益であつた。今度のアメリカの旅はいろいろの仕入である。

(三月三十一日、メレデアンデー　二日目の月末である)

朝の二時半頃に、タービンの屋根が一枚折れたので、えらい勢でスチームが吹き出して機關室は大騒動。船は止る、船客は寢室から飛び出す、北太平洋中の難であつたさうだが、私は全く白河夜船で、朝の八時まで知らなかつた。起きて見ると、船が波間に止つてゆらゆらと左右に搖れてゐる樣子、お蔭でヴアンクーバー着は一日日延べださうである。

今日、デツキテニスにシヤフルボード、散歩に漫談の一日であつた。ヴオーリズさんが子供のやうに遊んでゐる。全く喜喜として他愛なき仙境である。

ウキツテ伯著「されば、ロシアは敗れたり」を讀んでゐる。支那の李鴻章の話が出てゐるが、全く世界が急テンポの變化をしてゐることが今更ながらよくわかる次第である。

洋食がいよいよ板について來た。この工合なら、全く日本食を忘れても大丈夫な氣分である。つまり、より食ひが出來るし、幸に言葉が自由だから得してる譯である。

四月一日(火曜)

恐しい大浪である。沸き立つた熱湯のやうにぐらぐらと煮えて泡が立つやうに、波の花が渦卷いてゐる。風が變つて北風となり、このあたりの名物、小山のやうな奴が、ドシンドシンと船に當る。

この工合では五六千噸の船なら、船首を廻して逃げ出すであらうし、乘つてゐる人こそ大變であるが、幸本船は太平洋第一の巨大さで、搖れるは搖れるは大搖れである。左右ゴロリゴロリとやつてゐる、少少は氣が變である。

こんなに動くと仕事が一切手につかず。時時甲板によろけながら出て行つては、荒波を見てるばかりである。速力は十五ノツトに落ちて、今日正午までに漸く三百八十二哩しか走つてゐない。そろそろ海の旅も味氣なくなつた。宅で入れて貰つた、燒海苔、するめ、昆布、かき餅、朝鮮飴、キヤンデー等出して來た。一寸旅愁といふ心地である。

近江八幡を出てから、まだ八日にしかならぬのに淋しくなるのは、旅に馴れた私としてはお笑ひ草かも知れんが、今夜のやうに大荒れになると、妻子を想ひ同志を思ひ、神に祈ること切なりと正直に告白しておく。

米國へ千哩ほどの沖合で四月一日の眞夜中であるが、日本では四月二日の夕方六時頃であらうと思ふ。

こんなになると船酔ひはしない、ただ上陸した時、さぞ大陸が、ヴアンクーヴアーの町が、家が山

が、波のやうに動いて見えることであらう。

夜はサロンで自發的の親睦會が賑かに催された。

四月二日（水曜）

日光を見てもまだ濤は止まらぬ。朝から晩までごろりごろりとやられた。もうかうなると度胸もきまるし馴れて來るので、思ひ切つて甲板にかけ昇り、雪なげをやつたり、一寸スベリゴツコをして、スキーヤーのやうな氣持になる。晴天の激浪、その色の美しさは何とも言はれない。深い紺色の波に、白い花が咲いてゐるのだ。海、海、海ばかりで、一切何物もない。鯨一匹も、鱶一匹も出て來ないのである。

一寸動搖はするが、この船の氣分は溫泉氣分である。昨晩身體が寢臺の中に、轉轉ところげ廻つたので睡眠不足で、朝も午後も寢てしまつた。

毎朝聖書研究會に出てゐる。今サロンの机でこの處を書くと、あたりには、黑チリメン裾模樣の羽織を着たアメリカの女が二人、蚊トンボのやうな足を惜氣もなく出して、たばこを盛にふかしてゐる。

一人は眞赤な長襦袢を引かけて、モダン振つてゐる次第で、變な世界に來たやうな氣持である。

私は女と卷煙草は、最早離れぬものとなつたらしいアメリカを悲しむ。

日本の基督教會が、煙草を罪惡の一つに數へてゐるのは、世界的の石部金吉振りであるが、大いにその通り頑張るべしと思つてゐる。

四月三日（木曜）

朝は上天氣、浪も小さかつた。ゴーフォース博士の聖書會に出て、晝前「產業と宗教」といふ原稿を最大速力で書く。神の國運動のためである。とうとう三十一枚、一息に書いてしまつた。お蔭で血が頭に昇つて晝食をたべる時、何が何やらわからなかつた。しかし仕事をしたので肩の荷が降りて愉快である。フイリツピン音樂隊連と、デツキテニスを汗が出るまでやつた。

午後から雨になり雪になり、猛烈な向ひ風となり、船は全航海中第一の複雜なモーションを起す。全くさんざんである。寢てゐると惡魔が夜通し暴れてるやうである。私の身體を寢床の下から持上げては落し、ついては引張り、横にもたてにも嬲り通しにゆすられて、一晩中虐まれた。一寸、下手な按摩地獄である。

紀貫之の「土佐日記」に、土佐の國府から出發したのが十二月二十一日で、京都についたのが翌年の二月十六日であつて、この道中五十八日、四國の海岸を頼りない船で廻つて、和泉國の田無川に渡り、全くほうほうの體で京についてゐる。

「二十三日、日てりて曇りぬ。このわたり海賊のおそりありといへば、神佛をいのる。二十四日、

昨日と同じ處なり」

「二十五日、掛取等の北風あし、といへば船いださず、海賊追ひ來といふ事絶えずきこゆ」

「三十日、風雨ふかず、海賊は夜ありきせざるなりと聞きて、夜中ばかりに船を出して河波の水門を渡る。夜中なれば、西東も見えず、男女辛く神佛を祈りてこの水門を渡りぬ」

恐しい海の旅、それに海賊におびえた紀貫之朝臣と比較して、このエンプレス・オヴ・カナダは、全く天地の差である。などと思ひながらねる。

四月五日（金曜）

船も今日で最後である。とてもよく搖れてゐる。朝めしは中止、船室でオムレツとベーコンに紅茶をすする。琵琶湖のガリラヤ丸を乘り廻すのは誠に愉快であるが、雨の日、風の夜のガリラヤ丸は地獄である。今思へば、伊吹おろし、比良の嵐に吹捲られて、大浪の中に浮き沈みする、あのガリラヤ丸の經驗は、全く最高級の船醉退治であつた事を。

殆ど誰も出て來ないサロンに悠悠として、原稿を書き、ボートホールより怒濤を眺めては、あざ笑ふ自分を少少賴もしくも思はれた。

終日、狂瀾怒濤である。また船が遲れさうだ。しかし明朝は船が大陸へつくので、郵便は今夜八時までとのこと、ここで筆を止める。

「濤はぴたりと止つた。いよいよアメリカ大陸である。細雨しきりに降つてゐる向ふに、薄墨のやうに見えるのが、カナダの入口である。今日は一日下船の用意である。

「ヴイクトリアについた。灣内をヴアンクーヴアーに行く間に、加奈陀の入國檢査官とアメリカの官吏に、旅券を出して調べて貰ふ。

君はいつまでアメリカに旅行するんですか。

三ケ月。

君は三百弗以上持つて居られるか。

ハイ、ナショナルシチー銀行の旅行小切手を持つてゐます。

（一寸、スベツテ千五百弗ほどあります、といふと、君アメリカは物價が高いから、千五百弗位すぐ飛んでしまふよ、と米國官吏が親切に話してくれた）

往復切符を持つてゐますか。

ボストンまで切符があるが、歸りはロスアンゼルスから船に乘ります。

全くこれだけで萬事すんだ。官吏の顏は親切さうな表情をしてゐた。

それから大きい手荷物は、加奈陀通過、ボストン稅關まで開けずに送る。あとは全く輕裝である。

一臺の自動車に、ヴオーリズさんも私も手荷物全部入つて餘裕がある程である。

風呂のボーイに二弗、食堂のボーイに三弗、ルームのボーイに三弗、靴磨きに三十五仙をそれぞれ分配して、何も彼も支拂濟である。支那廣東のボーイ達で、全くよく働いてくれた。食堂では毎夕食毎にアイスクリームを、お代りまでくれた譯である。

寒い、まだ三月上旬のやうである。

いよいよ上陸だ。そして明晩の九時に、大陸横斷のインペリアル急行にのるわけである。同行の中に、石山の東洋レーションのホール氏があつた、西の富のマン先生もある、支那のゴーフオース博士、上海のスコベ氏（歌手である）コーチン支那のステビンス氏、高松のモア氏、そしてその家族達、ニューヨークのウツド女史、ロンドンのウイガム氏、皆相當の人士である。一等にはバークス氏、バート氏、石油會社の角田氏がある。

夜の七時半、とうとうヴアンクーヴアー港に到着。棧橋の目の前に、二十階建の摩天樓が、大方落成してゐる。市街は人口三十萬といふ。實に堂堂たるもので、摩天樓が林立してゐる。數千尺の山脈を北にして、この天然の良港は、我我を迎へてくれたのである。大きい荷物はボストンまで、稅關の封印つきで、チエックして、あとは身輕な手荷物を兩手にブラ下げて、赤帽要らずに町に出る。

北米大陸横斷記

（グレシア・ナショナル・パークにて）（氷山國立公園）

○四月五日

三月風、四月雨、五月花、といふのが、この頃の北米大陸の氣候を表現する。支那では三寒四溫、のこの季節である。そして日本では、二八の暴風季節に我等は出發して、その諺通りに、舊曆二月、陽曆春分の暴風に、ひどく北太平洋の怒濤にゆられて、とうとう一日と七時間遲れてしまつた。

上陸は夜になつた。ヴアンクーヴアーの町は美しく光つてゐる。棧橋といつても堂堂たるカナダ太平洋鐵道（C、P、R）のビルディングである。ロツキー山中の名勝バンフで一泊する豫定を變更して、明日のサンデーはヴアンクーヴアーで禮拜を守らうといふことになり、市の盛り場に近いグローヴナー、ホテルに落ちついた。

近代式な新ホテルであつて、入口のエレベーターに同胞の青年達が働いてゐる。あたまの毛を美しく分けて、キリリツとした金筋入の制服を着て、早川雪洲のやうな姿の日本人であつた。

「この邊のホテルは大方皆、我我の働いてゐないところはありませんよ。」といつて教へてくれた。

四階の一室、バス附き、ツキンベッド（寢臺二つ）の裏手に面した、近代的學校の寄宿舍のやうな部屋であつた。二人して、とても寢心地のよいベッドに泊つて、室代僅に四弗半であつた。

私は食堂車で、美しいアメリカの四十女を見た。モダアンの尖端を行くのであらうか、その美事な斷髪を、勿驚、藤紫色に染めてゐるではないか。あの淺草の松竹座あたりで見るダンサーが、いろい

ろの光線によつて、或は眞紅の全身、藤紫、コバルト、エメラルド色の彫刻のやうに變る美しさを、素地で行くのである。私はあつと叫んで、ヴオーリズさんに問ふと、同氏も始めて見たといふわけである。

まあ考へてもご覽、日本婦人が未亡人になつて、斷髪して髪を藤紫色に染め、顏を白塗にして、口に眞紅のルージュをつけた姿を。

演劇の街頭化である。刺戟に生きる近代人は、お芝居を日常の生活にしなければ、心が休まらぬのであらうか。何しろ北米大陸は、白人の樂園だが、その音樂と踊りはアフリカの黑人に征服されたのである。

ジヤズの內に、ピストルを發射しながら、旋律を行く曲があるとのこと。ダンスは勿論半狂亂、半裸體、否、褌一筋で男女が舞臺に飛び出して居る有樣である。裸體もよい、しかし裸體なら裸體らしく、靜かにしてゐればよいがと私は思ふ。

ここで又本線に復軌すると、四月五日の夜、私共は九時前から、「オフイアム」劇場に入つて見た。いろいろの輕技である、ダンス、口合ひ、唄、を見たり聞いたりした。別に變つたことはない。あれなら皆、京都の松竹座で見られる。最後に、オール・トーキーの「かかる男は危險なり」といふのを見た。

歐洲第一の金持で、恐しい顏附の男が美しい少女と結婚する。その夜一億萬圓の金を女に贈つて喜ばせようとすると、女は家出してしまふ。男は直ちに飛行機に乘つて、身投げをすると見せかけて、落下傘で英佛海峽に飛び降りる。獨逸の外科醫に顏を若く美しく作り變へてもらつて、女に復讐を計る。そして巴里の豪華な社交會で、少女の純眞の愛を受けて、幕切れの一分間で憎しみを捨てて本當の夫婦になる、といふアメリカ風の甘いものであつたが、私は驚いたことには、スクリーンの一言一句、百パーセント私によくわかることであつた。これなら菊五郎、猿之助、水谷八重子あたりの芝居に少しも劣らぬと思つた。日本のトーキーは設備が惡いのと、建築の設計が成つとらんので、全く聲には半分の効果も出てないのであつた。私は船にのる前日に、藤原のトーキー「ふるさと」を見たので、よく比較することが出來るのである。

何しろ劇場の構造が、卵を横にした型で、卵の尖つた方が舞臺である。そして、ルイ十四世王朝時代の佛壇のやうな、デコデコした裝飾がしてあり、シャンデリヤ、カーテンが賢く吊り下されてあるので、聲の傳達は完全に近い。東海の日本、人口數百萬の東京に、このやうな劇場が一つもないのはどうしたことか。

トーキーの將來は、たしかに實演を追ひまくるものと思ふ。今や、百パーセント天然色テキニカラー・トーキーが生れてゐることを思へば、いよいよスクリーンが檜舞臺を打倒してしまふであらうと

思はれる。藝術の機械化であり、民衆化である。

四月六日（日曜）　於ヴアンクーヴア市

九時前に飛び起きる。今日はサンデーである。すぐホテルの食堂で、ウアツフルにオレンジの朝食。すぐにＹＭＣＡへ急いだ。

來て待つてゐるはずのフイリツピンの樂手（エンプレスの乘組員）が見つからぬので、ボツリボツリと市街の見學をする。裏通りの住宅に貸間、賣家のサインの多いこと多いこと、全く東京と同じである。郊外の新住宅地に移つてゆく、近代家庭がさうしたのである。ある四つ角に芝生小公園があつて、お定りの片足を失うた男が、クラツチをベンチに立てかけて、新聞を讀んでゐる。

小公園のはしには、忠魂碑がある。オベリスク型の三角石で「名は永久に生きる、通行の人よ、これを無關心で居れるか。」と彫刻してあつた。黑くなつた花崗岩の臺石の前に花環が幾つも幾つも置いてあつてしほれてゐる。

歐洲戰爭で夫を失つた人達の涙の花であらう。

後刻、リビングストン公園に、日本軍人、加奈陀軍に參加した志願兵、百何十人かの記念塔があつた。石の柱の上に一寸した日本式の燈籠がつけてあつた。

ヴアンクーヴアの銀座尾張町角で、半時間以上立つて、ヴオーリズさんと二人で市街を穴のあくほど見たのであつた。私も珍しいが、四年振りに大陸に歸つたＶさんにも、珍しさは同じと見える。

まづ右側通行である。電車が大型で、窓の硝子がとても大きく美しい。自動車の數は東京位である。ただ驚くべき錆錆のフオードに、百姓が平氣で街路をがたぴし乘り廻してゐる光景である。

四つ角でなければ街路横斷は禁じてある。安全地帶は街路の上に黃色の銅鐵製の枕のやうなものが、二間おきに置いてあるばかりだ。そしてその枕の中に、赤色の電燈が足許を照してゐる。

汽車電車の交叉點、學校前、盛り場では、ストツプと黃色の文字が路面に書いてある。青色のヘツドライトがあつて、自動車は一旦停止して、よく兩側を見て通るのである。停止せぬとすぐ罰金だ。

市街の中心は十四五階の摩天樓で、ショーウヰンドウは美しい。

商品は何も變つたものはない。洋服や、食ひ物や、時計や、靴屋、寶石屋、ドラグストア、本屋等等である。

タキシにのつて、第十五街カナデアン・メモリアル教會堂の朝拜に出席した。

會衆は七百以上、美しい新築のゴシツク、石造の會堂であつた。牧師は加奈陀の人氣物ファリス博士である。童顏で美しい齒並を出して、にこりにこりとしてゐる。

堂の三方は最も美しいステインド・ウヰンドウである。正面は十字架、左右の窓は在りし日のイエスの面影である。色ガラスを鉛の紐で、押繪のやうに張りつけて、外から來る光線で寶玉造りの繪

のやうに光つて見えるのである。それから加奈陀西部第一の譽れあるパイプオルガンだ。十一時に、第一聲を我等は耳をそばだてて聞いた。おお、ヴオータス・ヒューメナだ、オーボーンだ、チヤイムだ。ピクロだ、トランペットだ、十本指と二本の足の十二の動作から流れる、美音の諧調は驚くべき効果を顯してゐるではないか。

或は遠雷の轟き、腹の底にこたへる深いベース、或は鶯の谷渡り、或は銀鈴のかすかな妙音である。

人間の作つたもののうち、パイプオルガンに優るものは、樂器として一つも無いのである。キーは全部電氣仕かけで、三層鍵盤にストップは五、六十ある。それに足で奏樂するやうにもなつてゐる。禮拜が終つてから牧師に會ひ、オルガンを詳細に見せて貰ふ。とうとう十二時過ぎより二時まで、パイプオルガンの傍を離れずその驚くべき大仕掛の、電氣づくめの、數萬圓の樂器を隅から隅まで見學したのである。

「Vさん八幡教會でも一つ五萬圓ほり出して、パイプオルガンを買ひませうや、日本で傳道するのには、これ位のオルガンがあつてもよろしいね。」と私がいふと、

「この會堂位のものを、二十年位の間に建てるとよいのだがね。」と答へる。

「まづ、六、七十萬圓ですね。」

と二人して考へる。神の宮殿だとすれば、一千萬圓でもかけて、禮拜堂を作りたいなとも想ふ。

しかし、同胞の經濟的困窮を思ふ時、やつぱり、神は人の手に造りしものの中に住み給はず、八幡山の森に、長命寺の沖に、誠意と涙の祈りのある處にこそ住み給はんものをとも思つたのであります。

禮拜は全く美しく運んだ。

六十人の聖歌隊が會堂の外室から「聖なる哉聖なる哉」を合唱しながら入場する。中年以上の男女が皆黑のガウンの衣をつけてゐる。パイプオルガンの美音と共に、涙ぐましくなるほど、禮拜的であつた。聖書、齊唱、祈禱、交讀等、てきぱき集會が進む。それから四部の合唱があつて、献金があつて、牧師の説教があつた。

「ポンテオピラトを想へ、我等は彼をさげすむ資格ありや」といふ話であつた。約三十分の説教は、雄辯に且謙遜に、近代的に、我等の心を打つた。「このイエスと稱する男の處置を如何にするか」とピラトの言つた言葉は、我等に當てはまるのである。それから、午後遲く、またヴアンクーヴアの中心に歸つて來て、「オフイアム」といふ一寸した小綺麗な食堂で中食をした。

コロンビア河の鮭、リヴアーとベーコンを主食に、靜かな食事をしたのである。感心したことは、給仕女の服裝がとてもよく洗濯の行き屆いてゐること、はきはきしてゐることと、料理が上手で、こ